# 智書

本書はギリシャ語で書かれているが、このことがすでに、その著作年代がキリスト御降生前の時代の末期であることを示すものであつて、普通プトレメオの治世で西暦紀元前三世紀に入る頃の作と考えられている。

作者は本書の中でサロモン（Σοφία Σαλωμῶνος）であると自称している。しかしこれがサロモン自身の作ではなく、無名の作者がイスラエル切つての賢明な王の名を借りて書いたものであることは疑いない。

本書は二部に分かたれ、第一部は智慧に関する一般の教説（一―九章）、第二部はイスラエル民族史における智慧の効用についての記述（一〇―一九章）となつている。

## 第一章

欺かれ給わぬ天主を真心もて求むべし――天主は我等の死を望み給わず

一　義を愛せよ、汝等地を審判く者よ、1）善意もて主を思い、心を素直にして2）主を索め

二　よ。3）蓋は、主は之を試みざる者に見出さ

第一章　1）この訓戒はまず、民の運命を左右するその指導者たちに向かつて發せられる。2）ただ目的ばかりを目ざしてわき目もふらぬ心で。――3）王上三・九。賽五六・一。

三　れ、之に依り頼む者にその啓示を賜えばなり。4)
四　夫れ、邪曲なる思念は天主より離し、その御力は試さるる時、愚なる者を懲らす。
五　四蓋し智慧は悪意ある魂に入り来らず、また罪の奴隷たる体に宿らざるなり。
五　蓋は教訓を賜う聖霊5)は虚構を避けて逃げ去り、聰明ならざる思慮より遠ざかり、不義の近づき来るや、逐い払われ給うべ
六　ければなり。六夫れ智慧の霊は仁慈あれども、悪しざまに云いなす者を、その唇の故に、罰せずしては措き給わじ、其は天主はその腎6)までも糜し、誤謬なくその心を
七　探り、その舌の云う所を聴き給う者に在せばなり。7)七蓋し主の霊は全世界に満ち、万物を保ち給う者8)は如何なる声をも知り給うなり。9)
八　八されば不義を語る者隠るる能わず、懲戒の審判之を逃ざざるべし。
九　九実に天主を蔑

4) 代下一五・二。―5) これを天主の第三位と解する人もあるし、天主から出て人間を規律、即ち徳に導く力と解する人もある。―6) ヘブレオの心理学によれば、腎臓は欲情の、従つてまた思想や言語の中枢と考えられていた。―7) 加五・二二。耶一七・一〇。―8) ヴルガタ訳 hoc, quod, これは spiritus (霊) にかかり、従つて文法上からは hic qui と訳すべきであつた。πνεῦμα というギリシャ語は中性なので、訳者はこの代名詞を誤つて中性に訳したのである。
9) 宇宙において語られる（しかしてまた起り来る）すべてのことを知り給う。―養六・三。

一〇　する者の思念は紛され、その言は聞えて天主の御許に達し、その不義を罰せらるるに至らん。一〇其は熱心[10]の耳は一切を聴き、呟きの声も隠るることなければなり。二されば汝等益なき呟きを慎しむべし、舌をいましめて誘ることなかれ、其は人知れず語りし言も空しくは消え行かず、また虚言[11]を吐く口は魂を殺せばなり。一二汝等の人生を謬りて、死を求むるなかれ、また汝等の手の所為によりて、滅亡を招くなかれ。一三其は天主死[12]を造り給わず、生ける者の亡ぶるを喜び給わざれば[13]なり。一四実に天主は万物を存在せしめんとて、創造り、地球の諸国民[14]を健かならしめ給いしかば、その中に滅亡の毒なく、冥府の地上を支配することなし。一五是、正義は永遠にして朽つることなければなり。[15]一六されど天主を蔑する者は、その手と言とを以て之[16]を呼び寄せたり、即ち彼等之を友と思いつつ失せゆき、之と契約を結べり、其は彼等之が方に加わるに相応わしければなり。

10) 義に対する熱心
11) ここでは一般の虚言でなく、天主の御摂理に対する冒瀆的言辞。
12) ここでは肉体の死ばかりでなく、永劫の罰による霊魂の死をもさす。
13) 結一八・三二。三三・一一。
14) すべてのもの。
15) 永遠の生命の源であるから。
16) 最も広い意味での死。十三節参照。

## 第二章

悪人の空しき論拠――彼等は義人特に天主の子を苦しむ

一　一　彼等[1]すなわち心の中に誤り思いて云えり、「我等の生涯は短くして煩わし、人間の終に救済あることなし、また一人だに冥府より帰り来りし者あるを知らず。[2]二　其れ、我等は無より生れたれば、後には我等さながら無かりしが如くなりぬべし。蓋し我等の鼻孔の気息は煙にして、言は我等の心の動くに当りて発する火花なり。三　その消ゆるや、我等の体は灰となり、霊は微風の如く流れ去り、我等の生命は浮雲の跡方と過ぎゆき、日の光に逐われ、その熱に圧さるる霧の如くに散るべし。四　我等の名も亦束の間に忘れられ、誰も我等の所行を憶ゆる者なからん。五　実に我等の時は、影の移い行くが如く、我等の終りは回ることなし、これ、堅く封じられて、誰一人帰り来る者なければなり。[3]六　されば来れ、我等今あるところの幸を楽しみ、急ぎて若き間に、造られし物を用いん。[4]七　価高き葡萄酒と香膏とを

第二章　1)天主をなみする者共。本一・一六の続き。2)百七・一。一四・一。哥前一五・三二　3)代上二九・一五。―4)賽二二・一三。五六・一二。

我等豊かに用い、季節の花をして徒に我等を過ぎしむるなかれ。八 薔薇の花の凋まざる間に、我等之を冠とせん。如何なる野辺をも遊び廻らずしては措かじ。九 我等の中誰をも我等の逸楽に加わらしめずしては措かじ。我等何処にも歓楽のあとを遺さん。是、我等の分にして、是、我等の運命なればなり。一〇 我等貧しき義人を虐げん、また寡婦を劬らず、齢高き老人の白髪を敬わじ。二 我等の力をして正義の法たらしめよ、弱き者は無益と認められるればなり。5) 一二 されば我等義しき者を窺い陥れん、6) 其は彼我等に益なく、我等の業に反対し、律法7) に背く罪ありと我等を非難し、我等の生活を罪として我等を誹れば なり。一三 彼は天主の知識を有すと誇り、自ら天主の子8) なりと称す。一四 彼は我等の思想をあらわに譴責する者となれり。一五 彼は見る

5) この語は現代唯物主義者の標語のように聞える。―6) 二・一―二一〇は、間接にはただプトレメオの時代にエジプトでひどく迫害された敬虔なユデア人達をさす。カトリックの註解者等は遠い昔からこれを救世主の御死去の予言と見て来た。しかし次の文は直接一般的正義をさしているが、かれらの迫害者らがかれらに対するやり方は、救世主の御苦難御死去の原型のようである。―7) モイゼの律法。8) 厳密な意味でこの名に値するのはただイエズス・キリスト御独りのみ。しかし広い意味ではすべての義人に該当する。

一六　だに忌わし、その生活は他人と異り、その道は甚だ変りおればなり。一六我等は彼には痴者と思われ、彼は汚穢を避くるが如く我等の道を避け、寧ろ義人の最期を遂ぐるを望み、天主を父とするを誇るなり。一七いざ我等、彼の言の果して真なるやを見ん、また彼の行末を見極めん。さらば我等彼の最期の如何なるやを知らん。一八蓋し、彼もし真に天主の子なりせば、天主之を護りて、敵手の手より救い給うべし。[9] 一九我等侮辱と苛責とを以て彼を試みん、これ、その恭順を知り、その忍耐を確めんためなり。二〇我等彼に最も恥ずべき死を宣すべし、蓋は彼の言の如くならば、御眷顧[10]彼に利あるべければなり。」と。二一彼等かく思いて、道を誤れり、蓋は彼等の悪意、彼等を眩ましたればなり。二二彼等は天主の奥義を識らず、正義の報賞を望まず、また聖なる魂の誉を重んぜざりしなり。二三夫れ、天主は人を不朽に創造し、之を己に肖たる像に造り給えり。[11] 二四されど悪魔の嫉妬[12]によりて、死あまねく、この世に入り来り、二五之に与する者、之に倣う。

9) 詩二一・九　耶一一・一九
10) 天主の御助け。一三、一六、両節参照
11) 創一・二七
12) 惨めにも天から落された悪魔は、アダムとエワとの次いではすべての人の幸福を、卑劣な嫉妬の目で見た

# 第三章

義人と悪人との運命の比較

一　然るに義しき者の魂は天主の御手にありて、1) 死の苦痛2)も
二　之に触るることなし。3) 三　愚なる者の眼には彼等死すと見え、その
三　逝くは不幸と思われ、三　またその我等の許を去るは滅亡と思わる
四　れど、彼等は平安4)の裡に在るなり。四　彼等はたとい人の眼には
五　苦悩すと見ゆとも永生の希望に充ち満てり。五　彼等は少しく苦し
六　みたる後、多くの幸を与えらるべし、其は天主彼等を試みて、己
七　に相応わしき者と認め給いたればなり。六　天主は炉の中の黄金の
八　如くに彼等を試錬し、燔祭の犠牲の如くに之を嘉納し、時至らば
九　彼等を顧み給うべし。5) 七　その時義しき者は輝きて、葦の間の火花
八　の如く飛び交さん。八　彼等は諸国を裁き、諸民を治めん、しかし
九　て主は世々に彼等の王たり給うべし。6) 九　主を恃む者は真理を7)悟

第三章　1) 主の御保護を受けて。天主を蔑する者共が、義人を全く滅ぼすことができると信じているのは徒労。2) 死に致すような責苦。3) 申三三・三。本五・四。4) 霊肉の永遠の福樂。5) 以上の全部は聖会が特に聖殉教者に適用している。6) 哥前六・二。7) 御摂理のいろいろな神秘な点。

一〇　り、愛に忠実なる者は主の御許にて安息わん、是、主の選び給いし者には恩寵と平安とあるべければなり。一〇されど悪しき者は己が策謀8）に循いて罰を受けん、彼等は義しき者を蔑にし、

一一　主より離れ去りたるなり。一一蓋し智慧と規律とを斥くる者は不幸なるかな、かかる人々の希望は空しく、その労苦は効果なく、

一二　その為す所は無益なり。一二その妻9）は愚にして、その子等は悪し。一三彼等の裔は呪われたる哉、其は罪の床を知らざる10）石女と、汚玷なき女は幸いなればなり。即ち聖なる魂の顧みらるる時、彼女は報酬を得ん。一四閹者にして、その手もて不義を行わず、天主に対して悪しき事を企まざりし者は幸福なるかな。蓋は彼その忠誠の為に特に優れし賜物を授かり、天主の聖殿に於いて最も楽しき身分にせらるべければなり。11）一五実に善き労苦は美しき果を結び、智慧の根は枯れ果つることなし。一六されど

8）かれらの生活に相応した。―9）この世の幸福の第一条件たる幸福な家庭生活は、悪人には恵まれない。―10）子のないことは、イスラエルでは恥ずかしいこととされていた。ここでそういう不運な人々は、もし罪を犯してまで子を得ようと図らないなら、天国で報いられるという見込を与えられる。―11）閹者は聖殿で勤めることを許されなかつたが、その代り何の罪も犯さなければ、天国に入れて貰えた。

一七　姦淫者[12]の子は成育せず、道ならぬ床の胤は絶やさるべし。一七また彼等たとい長く生くることありとも、物の数ともせられず、その老年も終に

一八　栄あることなからん。一八また彼等もし夭折せば、希望もなく、審判の日

一九　に是と認めらるることもあらじ。一九蓋し悪しき輩の終末は悲惨なり。

## 第四章

貞節なる人々と、不貞なる輩との相違、ならびに義人の死と悪人の死との相違

一　一貞潔なる人々は栄ありて、ああ如何に美しきぞ。[1]実にその記憶は絶

二　ゆることなし、其は彼天主にも人にも是と認められればなり。二その現

三　存するや、人之に倣い、その去るや、人之を慕う。しかして汚れなき戦

四　闘に賞を贏得、冠を戴きて永遠の凱旋に入るなり。[2]三されど悪しき者の群は、如何に増すとも、益する所なく、私生児等は深く根を下さず、また固き礎を置くことなからん。四たとい一時枝を張りて繁茂るとも、固く立たざるが故に、風に揺られ、烈しき嵐によりて根こぎにせらるべ

12）不信仰の結果は結婚を軽んずる所に最も多く現われる。

第四章　1）ギリシャ語本は「徳ありて子なき方まされり」。本三・一四参照。

2）哥前九・二五提前六・一二。提後二・三。四・七など参照。

五　し。3）実にその枝は成長し了えざる前に折られ、その実は無益

六　にして食するに渋く、何の役にも立たざるなり。六蓋し義しからざる添寝によりて生れ出でし子等は、彼等の審判かるる時、

七　その親に対し悪行の証人となるなり。4）七されど義しき者は、時

八　ならず夭折すとも、憩いを得ん。八夫れ、誉ある老年とは、寿の長きことに非ず、また齢の数を算えて定むべきにも非ず、人の

九　悟了こそ白き髪、九汚穢なき生涯こそ真の高齢たるなれ。5）

一〇　一〇彼天主に嘉せられ、愛せられしかば、罪人のただ中に存えおりしを、移されたり。6）

一一　一一彼が取り去られしは、悪のその智力を乱すことなく、虚偽のその魂を欺くことなからん為なり。

一二　一二蓋は痴愚なる事の魅力は善きものを曇らし、慾情の恒なきは

一三　無垢の心を迷わすべければなり。7）一三彼は少時の間に完成され、

一四　多くの歳月を満たせり。一四実にその魂は天主に悦ばれたり、さ

3）結一三・一一。マテオ七・二七。―4）悪への傾向を父母から受け継ぎ、かれらの悪しき手本によつて悪の道へ導かれたから。―5）智者が老人のように尊重されている。6）来一一、五。―7）罪悪には屢々悩殺するような快い刺戟があるが、徳はその厳しい要求ゆえに人の気に逆らうことがある

れば、こそ天主は悪の中より彼を引き出すことを急ぎ給いしなれ。然るに民[8]は之を見れども悟らず、また次の如き事を心に留めず、

一五　一五　そは即ち天主の恩寵と仁慈とはその聖者等の上にあり、主その選みし者を眷顧み給えること是なり。一六　また義人は死したりとも生ける悪人を、その青春は速かに畢りたりとも不義なる者の長寿を、罪するなり。[9]一七　彼等は賢き者の最期を見れども、天主の之に対する御計画、及び主の之を安全なる所に移し給いし所以を悟らじ。一八　彼等は之を見て蔑まん、されど主は彼等を嘲笑い給うべし。[10]一九　かくてその後彼等栄なく倒れ、[11]永く死者の中にて恥辱を蒙る者となら

ん、其は主この傲れる者等を打砕きて声なからしめ、根柢より震撼し給い、彼等全く見棄てられて呻吟し、彼等に就きての記憶跡を絶つべければなり。二〇　彼等は己が罪を思いて、恐れ戦きつつ来り、その悪行は起ちて彼等を罪に定めん。

8) 異教徒、および棄教したユデア人。本書の一部はこの両者を戒めるために書かれたのである。

9) 悪人は義人の早死に接して、短命でも大なる完徳に達し得ることを悟ることができる。それで義人の死は悪人を罪することとなる。―10) 詩二・四など参照。

11) 審判の時に。本三・一八参照。

# 第五章

## 来世に於ては悪人後悔すとも益なし――義人の報賞

一　その時1)義しき人々は、己を苦しめ且その労して得たるものを奪い取りし輩に対し、2)大なる落着を以て立ち向わん。二　彼等はこの様を見るや、甚だしき恐怖に慌てふためき、思いもかけざりし救拯の俄に至りしに驚き呆れん。三　また悔いて霊の苦悶に呻きつつ、心秘かに云わん、「是こそは我等が曾て笑柄となし、嘲弄の的となしたる者等なれ。四　愚なる我等は彼等の生涯を狂えりとなし、その最期を栄なきものと思いたりしに、3)五　視よ、彼等如何に天主の子等の中に算えられ、聖者等の中に入る身分となりしかを。六　されば我等は真理の道を離れて彷徨い、4)正義の光我等を照らさず、悟了の太陽我等にさし昇らざりしなり。七　我等は不義と滅亡との道を行きて疲れ果て、難き路5)を歩みたれど、主の道を知らざりき。八　高慢は我等に何の益する所あり

第五章　1)本四・一九に記してある時が来てから。2)マテオ二五・三二以下にある公審判についてのキリストの御談話参照　3)本三・二。　4)我々は人生の真の目的を謬つた。　5)ギリシャ語本「道なき荒野」。耶一二・一〇参照

九　しぞ。また富を誇りしことも我等に何をか齎したる。九是等のものは皆

一〇　影の如く、馳せ行く使者の如く過ぎ去りぬ。6) 一〇しかして波間を航く船の如く、過ぎたる後にはその跡も見えず、また波の上にその船底の路もなし。7) 一一或は空飛ぶ鳥の如く、その通りし路も見えず、あるはただ軽く風搏つ、もしくは飛び行く力すさまじく空かきわくる羽ばたきのみ。

一二　翼動かして飛び去れば、その後には何の路の印も見えず。一二或は的に向かいて射られたる矢の如く、空気は分れてまた直に合し、その過ぎ行き

一三　し処を知らざるなり。一三かくの如く我等も亦、生れ出ずるや、直に失せ、

一四　更に徳の印を示し得ずして、己が悪のただ中に滅びたり。」と。一四地獄

一五　にある罪人等はかく云えり。8) 一五蓋し悪しき者の希望は風に吹き飛ばさ

一六　るる塵埃の如く、嵐に散らさるる軽き泡沫の如く、風に吹き千断らるる煙の如く、また唯一日のみ滞在する通りすがりの客の記憶の如し。9) 一六されど義しき者は永遠に生き、その報償は主の御許10)より、彼等に対

6) 代上二九・一五。本二・五。
7) 箴三〇・一九
8) 本節はギリシヤ語本にはないさればヴルガタ訳は前の言葉を地獄で語られたものと解しているので、良心の苛責は審判の時から始まつて、地獄でも続くのであるから、これは当然である
9) 詩一・四。箴一〇・二八。
10) 天国から。

一七　する配慮は最高き者より、来るなり。一七されば彼等は栄光の国と美の冠とを主の御手より受けん、其は主その御右手もて彼等を庇い、

一八　その聖き御腕もて彼等を護り給うべければなり。一八その熱心は甲冑を着け、11）主その敵に復讐せんとて、被造物に武器を与え給わん。12）一九主は正義を胸甲として着け、誤謬なき審判を兜として戴き

二〇　二〇公平を打勝ち難き楯として執り、二一その激しき御忿怒を研ぎて槍となし給わん、かくて世界は主と共に愚なる者共を敵として戦うべし。13）二二電光の箭は真直に飛び行かん、よく引き搾りし弓よりの如く、雲間より放たれて、目ざす処に飛び行かん。二三怒の投石器より烈しき雹は擲たれ、海の水は彼等に向かいて荒れ狂い、河流は凄まじく押し寄せん。二四主の威力の息吹彼等に向かいて起り、旋風の如く彼等を吹き散らさん。彼等の悪行は14）全地を荒野と化し、その兇悪は権力ある者の位を覆さん。

11）作者は悪人処罰の際の天主を、詩的に戰士に譬えている。このくだりが聖パウロがキリスト信者の武装を述べた時の思想の本になつていることは疑いない。弗六・一一—一七参照

12）詩一七・四〇。

13）天主が行動し給うのは激情からでなく聖徳から。—14）全世界荒廃の責は罪にある。作者は天罰をこの世で下ることにしている。

# 第六章

智慧を求めよと諸侯に説く―智慧は求むる者容易に之を得べし

一 智慧は力に、賢き人は強き人に優る。1) 二 されば汝等王たる者よ、
三 聴きて悟れ、汝等地の果までも審判く者よ、学べかし。 三 汝等衆
くの民を統べ治め、国民の数多きを喜びとする者よ、耳を傾くべ
し。 四 其は権は主より、力は至高者より、汝等に与えられたればな
り、主は汝等の業を査べ、汝等の思念を探り給わん。2) 五 そは汝
等その国の臣僕なるに、正しく裁かず、正義の法を守らず、天主
の御旨に従いて歩まざりければなり。 六 恐ろしく、且速かに、主
汝等に現れ給うべし。そは上に立つ者に対し、最も厳しき審判あ
るべければなり。 七 蓋し小さき者は憐憫を賜われど、3) 大なる者
は大なる責苦を蒙るべし。 八 夫れ、天主は人の位を問い給うこと
なく、また人の大なるを憚り給うことなし、そは小さき者をも大

**第六章** 1) ギリシヤ語本になし。箴一六・三二、二四・五、伝九・一六に基ずく。―2) 羅一三・一以下。殊に四、六兩節。―3) 地位の低い人は過失をしても、地位の高い人よりも御救しを蒙る見込がある。それは後者よりも物事がよくわからないし、その境遇上掟の厳守が屢々困難であるから。

なる者をも親ら創造りて、すべての者の為に等しく配慮し給うによりてなり。4)

一〇九　されど、より大なる者には、より厳しき罰備われり。一〇されば汝等王たる者よ、わが汝等にかく云うは、汝等智慧を学びて誤謬に堕ちざらん為なり。二一夫れ、正義を正しく守る者は義しとせられ、之を学びたる者は、何と答うべきかを知らん。二二されば汝等わが言を慕いて之を愛すべし、さらば汝等規律を得ん。二三智慧は輝かしくして5)凋むことなく、6)之を愛する者には容易く見られ、二四之を索むる者には見出さるるなり。二五早くより目覚めて之を求むる者は労立ちて来り、先ず自らを彼等に現す。二六さすることなからん、蓋は彼己が戸口に之の坐せるを見るべければなり。二七それば智慧を思うは完き聰明にして、目覚めて之を求むる者は、やがて憂慮なきに至らん。二七そは智慧自ら己に応わしき者を索めて廻り歩き、その途すがら快く彼等に現れ、あらゆる賢慮もて、彼等に出会えばなり。二八夫れ、智慧の始は、いとも真に規律を望むことなり。7)二九規律を望むとは愛すること、

4) 申一〇・一七。
5) 星のように。
6) 決して凋まぬ花のように美わしい
7) 一八―二二節はソリテス（連鎖体）と称する三段論法

愛すとはその法を守ること、また法を守るとは不朽8)を完成9)する

二〇　ことにして、二〇不朽は人をして天主に近づかしむ。二一されば智慧を

二二　望むとは、永遠の国に至らしむることなり。二二されば民に王たる者

よ、汝等もし王位と王笏とを好まば、智慧を愛すべし、さらば永遠

二三　に王たるを得ん。二三すべて民の先に立つ者よ、智慧の光を愛すべ

二四　し。二四然らば智慧とは何ぞや、またそは如何にして起りしや、我之

を告げ、天主の秘密を汝等に隠すことなく、その生じたる始より、

二五　之を探り究めて、その知識を明らかにし、真理を秘することなかるべし。二五我また心を蝕む嫉妬と道を共にせじ、かかる人は智慧に関

二六　係なければなり。10)二六賢き者の多きは全世界の福祉にして、賢き王

二七　は民の支柱なり。二七されば我が言より規律を学べ、是汝等を益する所あらん。

8) 不朽とは即ち永遠の救い。―9) 救いを確実ならしめる。

10) 古の賢人達は一般に自分の知識を非常に大事にして、少数の愛弟子のほかにはそれを伝えようとしなかった。しかし智慧を自分の胸一つに秘めておいていいと思うような人は、真の智慧を有していないのである。

# 第七章

智慧を得る途とその長所

一　一我も亦すべての者に等しく、やがては死すべき人間にして、かの原始に土もて創造られし族[2]に属し、母の胎内にて形成られ肉となりぬ。[3]

二　二添寝の快楽の中に、人の精により血の凝りて、十月の間に我成れり。

三　三我また生るるや普通の空気を吸い、同じく造られし地上に生み落され、わが挙げし産声はすべての者と等しく泣き声なりき。

四　四次いで我襁褓に包まれ、大なる心遣もて育てられたり。

五　五蓋は王とても生るる始は他と異る者にあらざればなり。

六　六されば凡べての人の生れ来るは同一にしてその去り行くもまた相似たり。[4]

七　七是故に我願いしに悟了を得たり、我呼び求めしに、智慧の霊[5]我に臨みぬ。

八　八我之を王国[6]や王位にも優りて尊び、富貴も之には較ぶるを得ずと思えり。

九　九我また宝石をも之に較べざりき。其は如何なる黄金も之に較ぶれば価なき砂の如く、白銀も之が

第七章　1)ここから作者はサロモン王になつて語る。—2)アダム。創二・七参照。—3)百一〇・八—一〇。4)百一・二一。提前六・七。5)王上三・六以下参照。6)ギリシヤ語「王笏」。

一〇　前には、粘土の如くなればなり。7）　一〇我は健康と美貌よりも之を愛し、之を光とせんと志したり、そはその光消すこと能わざればなり。二然るにすべての善きもの之と共に我に来り、8）無数の資財、その手を経て来りぬ。一二しかして我すべてを喜びとせり、そはこの智慧我が前に立ちて導き行きしに由りてなり、9）されど我はそれが是等一切の母たることを知らざりき。10）一三我は他意なく11）之を学びたれば、惜しみなく之を伝え、その富を隠すことなし。12）一四蓋は智慧こそ人にとりて尽きせぬ宝なればなり。之を用うる者は天主の友誼を蒙るに至り、13）規律の賜なる故に天主に嘉せらる。一五天主はまた我をして己が考うるままに語り、且我に与えられし賜物に相応わしきことを思うを得しめ給えり、是、主は智慧に導く者にして、賢者の指導者に在すが故なり。一六蓋し我等も我等の言もすべての智慧も、事を為す知識もその御手の中にあ

7）百二八・一五。
8）王上三・一一―一三参照。―9）私が智慧を有して、それを正しく使うことができたから
10）サロモンは智慧を請い求めた時、またそれが天主からその上いろいろ宝を賜わるもとになろうとは知らなかった。―11）それに他の宝が含まれているとは知らずに。―12）本六・二五参照。―13）彼が天主の御愛顧を得るよすがとなる捧げ物は、智慧に整えられた善業。

一七　るなり。一七実に天主は、ありとしあるものの真の知識を我に賜いたれば、我世界の構造と元素の能力14）とを知り、一八時の始と終と中と、一九運行の変化と季節の推移と、二〇年の循還と星辰の位置と、15）二〇動物の習性と野獣の兇暴と、16）風の威力17）と人間の思考と、植物の種々なると根の精力と18）を知り、二一すべて隠れたること、我に起ることをも我は学べり、蓋は万物を造りし智慧、我に教えたればなり。

二二夫れ、之が中には悟了の霊あり、そは聖にして、類なく、多様、二三微妙、雄弁、敏活、汚れなく、確実にして、快く、善を好み、明敏にして、何物にも阻まれず、恩寵を施し、二三人情あり、好意あり、安定、確実、安全にして、すべての能力を有ち、万事を予見し、一切の霊を透視し、聰明にして、純潔、微妙なり。19）二四実に智慧は一切の敏活なるものよりも敏活にして、その純潔なる故に、何処にも到り達ぶなり。二五蓋しそは天主の力の息吹にして、全能なる天主の栄

14）自然哲学。―15）天文学。―16）動物学。―17）気象学。―18）心理学と薬学。―19）一切を造る天主の御英智の性質は、ギリシャ語原典では二十一（ヴルガタ訳では二十五）その一部は本質を定めるもので、他はただ修辞上飾りとして附加したものに過ぎない。これらは天主の全能、英智、仁慈の説明となる。来一・三参照。

光より潔らかに流れ出でたるものなれば、潔からぬもの之に来ることなし。二六 蓋は之久遠の光より出る輝にして、天主の稜威の曇なき鏡、またその善の映像なればなり。20) 二七 しかして之は一つにして、何事をも能くし、自らは恒に変らずしてすべてのものを新にし、21) 万国にわたりて聖なる魂に入り、之を天主の友とし、22) また預言者となす。二八 実に天主は、智慧と共に住む人の外、誰をも愛し給わず。二九 蓋し之は太陽よりも美しく、星の如何なる分布にも優り、光に較べ見るもなほ勝れたり。三〇 蓋は昼の後には夜来れど、悪は智慧に勝つことなければなり。

20) この言い方は、智慧を天主の完全な映像、似姿としている。教父達はこの「光より出る輝」という喩を、御子の御父と同質にてましますことを証するためにしばしば用いている。―21) 詩一〇三・三〇参照。―22) 天主の英智は霊魂に成聖の聖寵を生じ、かくして人々を天主の友とする。

## 第八章

### 智慧への憬れ

一 されば智慧は力強く極より極に達し、一切を柔らかに整うるなり。二 我はこれを愛し、わが若き時より選み、わが花嫁として娶らんと憬れ望み、その美を慕う者となり

三　ぬ。[1] 三　そは天主と親しむが故に、その貴きを誇りとするのみならず、
四　万物の主も亦之を愛し給う。四　是、そは天主の規律を教うる者にしてそ
五　の御業を選ぶ者なるに由りてなり。[2] 五　もし人生において富を望まば、
六　一切を作り成す智慧に優りて富めるは何ぞや。六　また悟性もし為す有
七　らば、あらゆるものの中にて智慧よりも工夫を凝らすに偉大なるは誰
八　ぞや。七　人もし義を愛せば、智慧の働きは大なる徳を齎す。蓋は節制
九　と賢明と正義と剛毅と[3]を教うるが故にして、是等よりも人の世に益
一〇　あるものはまた非るなり。八　またもし人多くを知らんと願わば、智慧
は過ぎにし事を知り、来るべき事を推し測り、なお、言の綾と謎の意[4]
とを暁り、天変地異をその起らざる内に知り、時季と年代との出来事
を知る。九　されば我は之を生涯の伴侶として迎え入れんと思い定めた
り、其は我、これが我をその幸に与らしめ、また憂慮や悲哀の時に我
を慰むべきことを知りたればなり。一〇　我はこれが為に衆人の間に誉を

**第八章**　1) 天主の智慧と人間との一致を、作者は婚姻に譬えて述べている。―2) 創造の時天主の伴侶であつた智慧は、創造主のありとあらゆる御業の中から、その實現が主の御栄えや御慈しみに最もよく適うものを選び出した。3) 四つの枢要德。4) ギリシヤ語によれば「謎の解答」。

一一　博し、若くして既に老人と共に尊敬を受けん。二我裁く時に
は5裁決の速かなるを認められ、偉大なる者の眼に感嘆せら
一二　れ、諸侯我に驚嘆せん。6一三我默するや、彼等我を待ち、我語
り出ずるや、彼等我を仰ぎ見、また我言を続くる時は、彼等そ
一三　の口に手を当てん。7一三その上我はこれによりて不死を得、
一四　後世の人々に永遠の記念を遺すべし。一四我民等を支配せん、し
一五　かして諸国は我に従わん。一五恐るべき王等、聞きて我を畏れ
ん。我衆民には仁慈深く、戦争には勇猛なるを認められん。
一六　一六我わが家に帰りなば、これの傍に憩わん。8蓋は之と語ら
うに苦きことなく、之と交わるに退屈することなく、楽しみと
一七　喜びとあればなり。一七さて我は是等の事を心に思い、なお胸の
一八　中にて熟々考うるに、不死は智慧とつながり、一八また之を友と
するに崇高き喜悦あり、その手の業には尽きせぬ富あり、之と

5）暗にサロモンの有名な裁判をさす。王上三・一六―一八参照。―6）サロモンの役人たちや、チロおよびエジプトの王たちサバの女王、その他偉い人々は実際この大王の智慧に感嘆したものであつた。王上五・七。九・一四、二四。一〇・五―九など参照。―7）恭々しく謹しんで沈默し承るという印。百二一・五。二九・七参照。―8）智慧は外の栄えのみならず、内の幸福をも与える。

論を討わす時は智慧を得、之と言を交す時は栄誉を博す
一九　るなれば、之をわが為に娶らんとて、探ね廻れり。一九　我は
二〇　資性善良なる若者にして、善き気質を受けたり。9)　二〇　我
は優れて善かりしが故に、穢れなき肉体を得たるなり。
二一　三されど天主賜うに非ずば、我之を執うること能わざる
を10)知りたり。しかしてこの賜物の誰より与えらるるか
を知ること、之も亦智慧の徴なれば、我主の御許に至り
て、主に願い、真心尽して云いぬ。

## 第九章

智慧を求むる祈禱

一　一わが父祖1)の天主、憐憫深き主よ、汝は御言によりて
二　万物を創造り、2)また汝の智慧により、人を立てて汝の
三　創造り給いし所造を支配せしめ、三公平と正義とを以て

9) サロモンは自分が果たしてかかる生涯の伴侶を得るに値するか、自問し、自分は霊魂ならびに肉体の卓れた性質を具えてはいるが（一九、二〇両節）、それでもなお且それに値せぬと思い、熱心に祈つてそれを天主に請い求める。

10) continensには「貞潔を守る」という意味もあるから、そう訳する人もある。

第九章　1) アブラハム、イサーク、ヤコブ。　2) 王上三・九。

四　世界を治めしめ、直き心をもて裁きを行わしむることとなし給えり。四願わくは汝の玉座に汝と共に坐す3)智慧を我に賜えかし、汝の僕等の中より我を斥け給うなかれ、五実に我は汝の僕、汝の婢の子、4)弱くして生命短く、審判と律法とを悟るに力乏しき人間なれば、六蓋し人の子等の中にて完き者なりとも、もし之に汝の智慧なからんか、彼は物の数とも思われざるべし。七汝は我を選みて汝の民の王となし、汝の子女を審判く者となし給い、5)八また汝の聖なる山6)に御殿を建て、汝の住み給う都に祭壇を築き、汝が元始より7)備え給いし汝の聖なる幕屋の像りとすべしと、我に曰いぬ。九汝の智慧8)は汝と共にありて、汝の御業を知り、汝が世界を創造り給いし時にも立会い、汝の眼に善しとせらるることと、汝の誡命に適う義しきこと

3)御父の御言、ロゴスたる造られざる永遠の「智慧」は、「玉座を共にして」、すなわち天主の御許にまします。その御性質として天主の傍にあつて助言し給うのである。―4)詩八五・一六及び一一五・一六参照。5)代上二八・四、五。代下一・九。―6)アブラハムが犠牲を捧げ、天使が現われ、またダヴィドが祭壇を築いた（母下二四・一六以下参照）モリア山。7)イスラエルに対する天主の特別な御導きの始めか、または宇宙万物の始めから。―8)四節参照。

一〇　とを知れり。9）　一〇願わくは汝の聖なる天よりこれを下し、汝の威光の座より之を遣して、我と共ならしめ、我と共に労せしめ給え、これ我が汝に嘉納せらるることを知らんためなり。

一一　蓋しそは一切を知り且悟る故に、わが事を為すに当りて慎重に我を導き、その能力もて我を守らん。

一二　かくてわがなす所は御旨に適い、我汝の民を義しく治め、わが父の玉

一三　座を辱めざる者とならん。一三夫れ、何人か能く天主の御思慮を知る者あ

一四　らんや、また誰か能く天主の欲し給う所を推測る者あらんや。10）　一四実に

一五　死すべき者の思慮は気遣わしく、11）　我等の予想は確ならず。一五蓋は朽つ

一六　べき肉体は霊魂に重荷となり、塵土の軀は思慮深き精神を圧しつくれば

一六　なり。12）　一六我等は地にある物を推量ることだに難く、我等の眼の前にあ

一七　る物すら骨折りて漸く見出すなり。されば誰か天にある物を究めんや。

一七　汝もし智慧を与え給わず、また最高き所より汝の聖霊を遣し給うにあ

一八　らずば、誰か能く汝の御思慮を知らんや。13）　一八かくてはいかで地にある

9）箴八・二二、二七。約一・二。
10）賽四〇・一三　羅一一・三四。哥前二・一六。
11）動揺し。
12）肉体と精神との相剋についてはただ新約聖書においてのみ完全な啓示が遺憾なく説明している。羅六・一二を見よ。
13）ギリシャ語本は本節で問が終りになつている。

一九 者の径直くせられ、人々汝に嘉せらるる所を学ばんや。一九蓋は、主よ、始より汝に嘉せられし者は、ただ智慧によりてのみ救われたればなり。

# 第十章

天主の選民の歴史に現われたる天主の智慧

一 一智慧1)は地球の始祖として始に天主より創造られしかの者を、そのただ独り2)創造られたる時に護り、3)

二 彼をその罪より救い出し、4)

三 また万物を支配する力を之に与えぬ。5)

四 三かの義しからぬ者は、6)怒りて智慧より離るるや、その怒りて兄弟を殺したるによりて亡びたり。

五 四この者の為に、7)洪水の地を滅ぼしたる時、智慧は取るに足らざる木材により義しき者を導きて、再びそれを回復せり。8)五なおまた諸国民相携えて悪に赴きし時、智慧は義しき者9)を知りて之を護り、天

第十章 1)本九・一九に続く。2)エワはまだ創造されなかつたのでアダムはどうしても天主の御智慧に縋つて御助言を仰がなければならなかつた。3)創一・二七。—4)人間を救う天主の思召により、また天主の智慧がこれに罪を悔い来たるべき救主に依り頼むようすすめ給うたによつて。—5)人間の弱くなつた現状においてもこの支配権が揮えるよう智慧は助けを与えた。—6)カイン。7)カインの子孫。—8)創七・二一。9)アブラハム。

主に咎めらるることなからしめ、その子等に対する情愛にひかれし時、之を守りて強からしめたり。[10] 六 五市に火下りて、天主を蔑する者等の滅ぶる時、遁れ行く義人[11]を救いしもこの智慧なり。[12] 七 その地は悪の証にとて、荒れ果てなおも烟りつつあり、樹は実を結べども熟することなく信ぜざりし魂の記念にとて塩の柱立てり。 八 実に彼等は智慧を顧みざりしに由りて、啻に善き事を知らざるに至りしのみならず、その愚なりし記念を後世に遺し、かくて彼等の罪隠れなきに至れり。 九 されど智慧は己を奉ずる者を、苦患より救いたり。 一〇 これは兄弟の忿怒より遁れたる義人[13]を、正しき道に導き、之に天主の御国を示し、聖なるもの[14]の知識を与え、その辛苦によりて之に栄あらしめ、その労苦に報いたり。[15] 一一 これは人々が企みて彼を欺かんとしたる時に、彼を助けて之に栄あらしめぬ。 一二 そは彼をその敵より守り、責むる者より安からしめ、激しき戦闘[16]に勝つことを得しめて、智慧の何よりも力あることを知らしめた

10) 創一一・二。
11) ロト。―12) 五市とはソドマ、ゴモラ、アダマ、ゲボイム、およびソアル即ちセゴル。―創一九・一七、二二。
13) ヤコブ。
14) 実際ヤコブは幸いにもこの啓視の間に天国を垣間見ることができた。―15) 創二八・五、一〇
16) 天使との格闘

一三　り。一三これは義人17)の売られし時、之を棄てずして、罪人等より救
一四　い出せり。これは彼と共に坑に下れり。18)一四また縲絏のうちにも彼
　　を棄てず、終に王笏を之に与え、彼を虐ぐる者に抗う力を得しめ、
　　且彼を謗りし者等の虚偽者たることを示して、彼に永遠の栄誉を与
一五　えぬ。19)一五これは義しき民と咎なき裔とを、之を虐げし異邦人より
一六　救い出せり。20)一六これは天主の僕21)の魂に入りしに、彼奇蹟と徴
一七　とを以て恐るべき王等に屈せざりき。一七これは義人等22)にその労苦
　　の報酬を与え、之を不思議なる道によりて導き、彼等の爲に昼は覆
一八　蓋となり、夜は星の光となり、一八彼等をして紅海を渡らしめ、大な
一九　る水の間を通らしめしが、23)一九その敵を海に沈め、深き底より引き
二〇　出したり。されば義しき者等は悪人等の財物を取りて、24)二〇主よ、
　　汝の聖なる御名を讃歌い、一斉に汝の御手の勝てるを讃め奉れり。25)
二一　其は智慧唖者の口を開き、幼児の舌をして語らしめたればなり。

17)ヨゼフ。―18)兄達が投げ入れた坑。―創三七・二八。19)創四一・四〇。徒七・一〇。―20)出一・一一。―21)モイゼ。―22)イスラエルの人々。出一二・三六参照。23)出一四・二二。詩七七・一三。24)イスラエル人達は岸に打ち寄せられた死骸の甲冑や武器を分取つた。このことは出エジプト記には記してない。―25)出一二・三五。一五・一。

# 第十一章

前章のつづき

一　智慧は聖なる預言者[1]の手によりて彼等の業を導きぬ。[2]
二　彼等は人の住まざる荒野を通り、荒れたる処に天幕を張れり。
三　彼等はその敵に立ち抗い己が仇を防ぎたり。[3]
四　彼等渇きて汝に呼び求めけるに、水高き岩より出で
五　蓋し彼等の敵は飲水尽きして彼等に与えられ、渇堅き石より癒されぬ。[4]
六　彼等はそれによりて恵まれしが、イスラエルの裔等は之を溢るるほどに賜わりて喜びたり。
七　即ち敵はその乏しきに苦しみたるに、
八　実に、汝は絶えず湧き出ずる泉の代りに、不義なる者に人の血を与え給えり。
九　不義なる者は嬰児を殺したる罰として、[5]その数を減ぜられしに、かの人々には汝思いもよらず豊かに水を与え給い、
一〇　時、渇によりて、如何に汝の者等を高め、之に仇する者共を殺し給うかを示し給えり。蓋は彼等試みられたる時、ただ憐憫の懲を受けしのみな

第十一章　1）モイゼ。―2）出一六・一。3）出一七・一―二。4）民二〇・一一。5）エジプト人は残忍にも男の赤児の血を流した。出一・二二参照。

れども、怒もて審判かるる悪人の如何なる責苦を受くべ
一一　きかを知りたればなり。一二実に汝は此をば訓す父の如く
試み給いしかど、彼をば厳しき王の如く問い訊して罪に
一二　定め給えり。一三蓋し彼等は居合せざりしも居合せたる
一三　も[6]等しく苦しみたり。一三即ち彼等は過去を想い出し、
一四　二重の苦悩[7]と呻吟とを得たり。一四蓋は彼等、己が受け
し苦患によりて他の者等が益を得たりと聞くに及び、主
一五　を想い、[8]事の成行に驚きたればなり。一五彼等は曾て己
等が無慈悲にも投げ棄てて、嘲り笑いしその者[9]を、事
一六　の終に驚きたり、是、彼等の渇[10]は義しき者の渇と全く
異りしによりてなり。一六されど彼等は天主を蔑する愚な
る妄想の為に、物言わぬ蛇と卑しき獣とを祀りしかば、
汝物事の弁えなき獣の群を彼等に遣して報復い給えり、[11]

6)「居合せざりし」とはイスラエル人に対するファラオの決意に直接には関与しなかったエジプト人達。「居合せたる」とはモイゼの奇跡を直接その場にいて目撃した人々。出七・二〇参照。他の解釈者の説によれば「居合せざりし」とはエジプトに残っていた人々をさすとする。この説に従えば「居合せたる」とはイスラエル人を追いかけた人々を意味することとなる。―7)即ち苦しみそのものと、一四、一五両節に述べてある苦しい気持。―8)ギリシャ語本「主を認め」。―9)モイゼ。―10)いわゆるエジプトの禍の時に受けた。11)本一二・二四。

一七　一七是、彼等が、人はその罪を犯す便となしたるものを以て罰せらるることを思い知らん爲なりき。一八夫れ、眼に見えざる素材をもて世界を創造り給いし汝の全能なる御手は、彼等に対して熊の群、もしくは猛き獅子を遣す能わざりしに非ず、12）一九或はまた未だ世に知られざる新しき類のいと猛き獣にして、火の気息を吐き、臭き烟を出し、或は恐ろしき火花を眼より発し、二〇その害をなすことただに彼等を亡ぼし得るのみならず、人之を見るだに恐怖のあまり死するほどの獣を遣る能わざりしに非るなり。二一されど是等のものはなしとするも、彼等は自らの行為に責められ、汝の御力の息にて吹き飛ばされ、唯一息13）にて殺さるることもあり得たりしなり。そは汝万物を量と数と重さとによりて秩序を立て給いたればなり。二二実に大なる事をなし得るは、唯汝のみなり、誰か能く御腕の力に抗い得んや。二三汝の御前に在りては、世界も衡にかかれる一片の塵の如く、また晨に地に落つる一滴の露の如し。二四されど汝は何事をもなすを得給う故に、すべての者を憐み、人間の罪をその悔悛のために看過し給う。14）

12）利二六・二二。耶八・一七。本一六・一。
13）天主の。
14）罪人らに悔悛のいとまを与えるために徒一七・三〇参照。

二五　二六　二七

二五 夫れ、汝はあらゆるものを愛し、一つとしてその創造り給いし物を憎み給うことなし。
蓋は汝の憎みて定め、或は創造り給いしものとては、更に是なければはなり。二六 汝欲み給わずば、物如何にしてか存するを得んや、また汝に呼び出されざりしもの如何にしてか
よく保たれんや。二七 されどすべては汝の有なるが故に、汝之を容赦し給う、諸々の霊を
愛し給う主よ。

# 第十二章

カナアン人やエジプトへの御摂理に見らるる天主の御叡智

一　二　三　四　五

一 ああ主よ、汝の霊は万物の中にありて、如何に善く且甘美なるか
な。二 されば汝は過つ者を然るべく1)懲らし、彼等の罪を犯したる所
につきて、彼等を戒しめ訓し給う、主よ、そは彼等が悪を離れて汝を
信ずるに至らんためなり。三 実に昔汝の聖地に住みたりし民は、2)
汝の厭い給う所なりき。3)四 即ち彼等は妖術と悪しき献物とによりて、
汝に憎むべき行為をなし、五 また無慈悲にも己が子等を殺し、4) 人間

第十二章　1)かれらに相当する厳しさで。—2)カナアン人ら。—3)申九・三。一二・二九。一八・一二。
4)モロクの祭祀で

六　の臓腑を喰い、汝の犠牲の中より血を啜りしかば、六無力なる魂を亡ぼ
七　したる親たちを、汝は我等の父祖の手によりて絶やさんとし給えり、七こ
八　れ、すべての中にて汝の最も愛し給う地、天主の子等に応わしき住処とならんためなりき。八されど彼等も人間なるにより、汝は之を寛容し給い
九　て、5)汝の軍の先鋒として大黄蜂を遣し、彼等を徐々に絶やさんとし給えり。九そは汝戦争によりて悪人を義人に服せしめ給うこと、或は猛き獣に
一〇　より、或は厳しき言により、一気に彼等を絶やし給うこと能わざりしが故に非ず、一〇その輩の邪悪にして、その悪意は生来のもの、またその思念は
一一　永遠に変り得ざることを知り給わざるにはあらざれど、審判を漸次に行い
一二　て、悔改の時を与え給いしなり。6)一二そは彼等始より呪われたる胤なりければなり。また汝は何者かを憚りて、彼等の罪を容赦し給いしにもあら
一三　ず。7)一三抑々誰か汝に向かいて、「汝は何を為したりや」と云う者あらんや。或は誰か汝の判決に抗う者あらん。或は誰か悪人等を弁護せんとて汝

5) かれらにはお悔悛の機会を与え給うた（二、一一両節参照）。
6) 出二三・三〇。申七・二二。
7) キリストもユデア人について同様に仰せられた。路一三・三四参照。

一三　の御前に進み出る者あらんや。或は汝の創造り給いし異邦人等の滅びん時、誰か汝に罪を帰する者あらんや。一三蓋し一切に就きて配慮し給う天主は、汝を措きてまた他にあらざれば、不正なる審

一四　判を行い給わざることを示し給うに及ばず。8) 一四また王侯も汝の御眼前に来りて、汝の滅ぼし給える者に就き、汝の弁明を求むる

一五　ことなからん。一五汝は義しく在せば、すべてのものを義しく治め、罰すべきに非る者を罰するは汝の御権能9) に悖ることと思い給

一六　う。一六夫れ、汝の御権能は義の基にして、また汝はすべてのもの

一七　の主に在せば、すべてのものに対して寛大に在す。10) 一七即ち汝の全

一八　能を信ぜざる者には汝の御権能を示し、また汝を知るを欲まざる者には、その不遜を罰し給えども、11) 一八力の主権者にて在す汝は

一九　また、柔しく審判き給い、大なる忍耐を以て我等を治め給う、蓋は汝御旨のままにその御能力を用うるを得給えばなり。一九さて汝

8) 彼前五・七。―9) 天主の罰し給う御権能には、聖徳と正義とが伴う。―10) 天主はその造り給うた物を愛し給う

11) 天主が御自分の力を十分に感ぜしめ給うのは、ただ疑う者や否定する者（例えば大人物や諸侯などのような。出五・二。王下一八・三五。喀後九・四参照）または棄教したユデア人のように、天主の御力を信じながら逆らう者に対してのみ。

はかくはからい給いて、汝の民に義しく且情深かるべしと教え、また汝審判き給うと雖も、罪を悔い改むる時機を恵み給うとの喜ばしき希望を汝の子等に与え給えり。二〇蓋し汝は、汝の僕等の敵にして罪死に当る者をも、大なる寛容を以て罰し、彼等に悪を改め得る時と処とを与え給いしかば、二一ましてその父祖に善き誓言と契約とを賜いし汝の子等を、如何に大なる思遣もて審判き給うならん。二二されば汝、我等を懲し給うとも、我等の敵をば、幾倍もの苦痛を以て鞭打ち給う、是、我等審判く時には汝の御仁慈を思い、我等の審判かるる時には汝の御憐憫に希望をかけん為なり。二三是故に汝はまた、己が一生を愚かに不義に暮したる者をも、その祀りし物によりて、此上なく厳しく苦しめ給いしなり。二四即ち彼等は久しき間迷妄の道を彷徨い、動物の中にても最も卑しきものを神々として崇め、愚なる小児の如く暮したれば、(12) 二五汝は弁えなき小児に対する如く、彼等を罪して之を嘲りに付し給いしなり。二六されど彼等この嘲笑と懲責とによりてもなお悔改めざりしかば、それに相当する審判を天主より受け

12) エジプト人の動物崇拝は蛇や甲虫や鰐などのような軽蔑すべき動物にまでも及んだ。

たり。13) 二七 蓋は彼等、正しく己等が神々と崇めしものによりて苦を受け、且それにより滅亡を招きたるを見て立腹せしが、前に知ることだに拒みしものを、今や真の天主と認めたれば なり。14) かくてその劫罰の極 彼等に臨みたり。

13) エジプトに下つた蛙などによる最初の天罰は皮肉な性質を具えていた。それらの緩やかな罰が軽んじられてから漸く、初子がみな死んだりファラオとその軍隊が全滅したりする、天主の御稜威に応わしい厳しい罰が下つたのである。

14) エジプト人は天主の御力を認めながら、偶像礼拝をやめなかつたので、極めて厳しい罰を蒙つた。

## 第十三章

被造物よりして創造主を認め得ること——偶像礼拝の不合理なること

一 されどすべて天主のことを知らざる人々は空しきかな、彼等は眼に見ゆる善きものより推して、在す者1) を曉り得ず、また造られし物に眼を留めながら造りし者を認めずして、2) 二 火、或は風、或は疾風、或は星の運行、或

第十三章 1) 出三・一四。——2) 羅一・二八。

三　は逆まく水、或は日や月を、世界を司どる神々と思えるなり。3）　三彼等もしその美しきを悦びて、是等のものを神と思いしならんには、それらのものの主は、更に如何ばかり優れて美しきかを知るべかりしなり。蓋は美の源にて在す者、是等をすべて創造り給いたればなり。

四　四彼等もし是等のものの力と作用とに驚きしならんには、それらのものによりて、之を創造り給いし者の一際力強きを暁るべかりしなり。

五　五蓋は造られし物の大なると美なるとより推して、その創造主を認むるを得べければなり。4）六さりながら是等の人々もなお多く咎むべきに非ず、蓋は恐らく彼等と雖も、天主を索め、之を見出さんと欲しながら、迷いしものなればなり。七実に彼等はその御所造を調べて之を探り、見ゆるものの善き故に心惹かれしなり。5）八されどまた一方より云えば彼等は容さるべきにあらず、九果して彼等世界を判断するほどに、多くの事を知り得たりとせば、いかでその主をも更に容易く見

3）申四・九。一七・三。―4）天主存在の証拠は、（一）被造物から因果律によつて創造主の存在を認めること（一、二両節）と、自然力から類推によつて天主の御性質を悟ること（三―五節）。―5）羅一・二一。―一〇節以下に記してあることに較べればまだしも恕すべきこと。

一〇　出さざらんや。一〇さるにても彼等は不幸なるかな、彼等は死物[6]に望をかけ、人の手に造られし物、即ち金銀、人工に成れる物、獣の

一一　肖像、或は無益なる石、古人の手に作られし物を神と称べり。一一或は木匠ありて、森の中にて適当なる材を伐り倒し、[7]巧みにその皮

一二　を悉く取り去り、手際よく人の世に有用なる器を作り、一二その工作

一三　より出でし木屑をば、食物を調うるに用い、一三なおも残りて何の役

一四　にも立たざる、曲りて節多き木片を執り、閑にまかせて丹念に彫り刻み、手際鮮かに貌づくりて人の像となす。一四或は獣の形を造り、

一五　これに赤土を塗り、漆にて朱に染め、それにある汚玷を悉く塗り抹す。一五かくてこれに相応わしき室を作り、壁際にこれを鎮座せし

一六　めて、固く釘付にす。一六是その墜落ることのなからんためにして、そのためにかくも意を用うるは、彼実にそのものが像たるに過ぎずして、他の援助を必要とし、自ら衛る能わざることを知ればなり。

6) 生命のない像や画記者は自然力や天体を拝む人々を愚かであると言っているが（一三・一―九）、偽神の形像を拝む者に対してはかれらが生命のない物を神と見なしている故に、卒直に不幸な者と称している（一〇節以下）。―7) 記者は偶像礼拝の成立ちを述べて、形像を祀ることの愚かさを嘲弄する。養四四・九―二〇。耶一〇・三―五参照。

一七　一八　一九

一七しかもなお彼は誓願を立ててその財産、子等、結婚などのことをこれに問い、生命なき物に語いて更に恥じず、一八弱き者に健康を哀願し、死せる者に生命を願い、無益なるものに向かいて救助を呼び求め、一九歩み得ぬ者に旅路の安全を請い、何の利益もなきものに、事毎に利得と繁栄と成功とを哀願するなり。8)

8)これらの人々はいずれも不幸なるかな。一〇節参照。

## 第十四章

偶像礼拝の起源とその結果

一　二　三　四

一更に或者は航海を思い立ち、荒き波路の旅に出でんとして、己を乗せ行く木よりも脆き木片を呼び祐助を求む。二夫れ、これは利得を望む欲望が工夫し、工匠が技倆を揮いて造りしものなり。三されど父よ、1)汝の攝理は之を掌る。2)其は海の中にも道を備え、潮の間にも最安らかなる路を設け給い、3)四たとい人ありて技術を知らず大海に船出すとも、これをすべての危難より救い得る

第十四章　1)本一一・一一参照。—2)船で海を渡るのは、木で拵えた偶像を呼び頼むことによつてではなく、天主の御摂理によつて。3)暗にイスラエル人が紅海を渡つたことをさ

五　ことを示し給いしは汝なればなり。五されど汝の智慧の業の無益にならざらんために、4）人は一片の板子にその生命を托し、ささやかなる舟にて恙なく大海を乗り切るなり。六また往昔傲れる巨人の滅びし時にも、世界の希望は筏によりて難を避け汝の御手之を導きて、世に子孫の種を遺したり。5）七実に義の行わるる木6）は祝せられたるかな。

八されど人の手にて作られし偶像は、之を作りし者と共に呪わる、それは作者は之を作りしに由りて、また偶像は脆き木なるに神と称えらるるに由りてなり。7）九かく天主を蔑する者も、その天主を蔑することも等しく天主に悪まるるなり。一〇即ち作られし物も作りし者と共に罰を受くべし。一一是故に異邦人の偶像も容赦さるることなからん、そは天主に創造られし物なるに、悪むべきもの、人の魂を迷わすもの、また愚なる者の足には陥穽となりたればなり。一二実に偶像案出されしは姦淫8）の始にして、その出で来りしは生活の頽廃なり。一三抑々是等のもの

す。―出一四・二二。―4）天主は万物に具え給うた能力が発揮されることを望み給う。5）創六・四。七・七。―6）ノエの箱船。神秘的意味ではキリストの十字架。―7）詩一一三・四。巴六・三。8）偶像礼拝をさすために度々聖書に用いられる喩。申三一・一六。士二・一七。何二・三―五など参照。

一四　のは初よりありしにもあらず、9）永遠に存すべきにも非ず、一四蓋は人間の迷妄
一五　によりて世に来りしものなれば、速かに滅び去るを見らるべければなり。一五蓋
一六　し俄に兒を失える父、10）痛ましき悲哀に崩折れてその像を作り、人間として死
　　して日なお浅き者を、神として崇め始め、これに対する儀式と供物とを、己が
　　臣僕等のために制定めたり。一六それより時を経ると共に、この悪しき風習は盛
　　となり、この迷妄は捉の如く守られ、王侯の命によりて人の像は礼拝せられ
一七　ぬ。一七しかして人々遠く離れ居るが故に、面前にて礼拝し得ざる時は、その者
　　の肖像を遠くより取り寄せ、彼等の崇めんと欲する王の見ゆる像を作れり、そ
　　はこれによりてその居らざるに居るが如く、熱心に之を礼拝せんためなり。
一八　一八また工人の凡ならぬ手並も、彼等を知らざる者をさえ駆りてこれを礼拝せし
一九　めたり。一九蓋は彼、己を雇いし者の意を迎えんとして、その肖像を最美しく仕
二〇　上げんために、11）技巧の限りを尽したればなり。二〇かくて衆くの人々は作品の
　　美しきに心奪われて、少時前にはただ人間として敬われし者を、今や神と思い

9）最初の祭祀は真の神天主に対するものであつた。
10）祖先および君主崇拝の発生形式
11）理想化するために

二一　倣すに至れり。二二是即ち人の生の迷いの原因にして、人々或はその好む所に従い、或は王に嘉せられんとして、口にすべからざる聖名[12]を石に木に名づけたり。二三また彼等は天主を知ることに迷いしのみならず、その無智よりして大なる争闘の中に生を送りながら、かくも多大の悪事をも平和[13]と称するなり。二三抑々彼等は、或は己が子等を人身御供となし、或は秘密の祭を行い、[14]或は終夜狂愚の限を尽し、[15]二四その生活をも、夫婦の縁をも、純潔に保つことなく、或は妬みて互に殺し合い、或は私通によりて之を悲しませ、二五あらゆることと交々起る、即ち流血、殺戮、窃盗と詐欺、腐敗、不信、騒擾、偽証、善人の不安、二六天主の忘却、霊魂の汚濁、性の倒錯、婚姻の紊乱、淫乱、及び不潔等の道ならぬことと是なり。二七蓋し憎むべき偶像を礼拝するは、諸悪の源、その始にして終なり。二八即ち彼等喜べば物狂わしくなり、或は虚偽の預言をなし、或は正しからぬ生を送り、或は軽々しく偽証す。二九蓋は彼等命なき偶像を恃みとするが故に、偽の誓を立つるも、[16]

12) 唯一の真の神天主にのみ適する名称。
13) 即ち「幸福」本三・三参照
14) キビレやバツカスの祭祀などにおける秘儀。―15) 申一八・一〇。耶七・六。
16) かれらが偽り誓う究極の理由は、天主の罰し給う御力についてのかれらの観念を鈍らせてし

三〇　害を受けざるべしと思えばなり。三〇されどこの二つの罪故に、17）正義の
罰彼等に臨まん、そは彼等偶像に帰依して天主を悪と思い、義しき事を
三一　蔑みて偽り誓えばなり。三一実に悪しき者の違法を罰するは、彼等の呼び
て誓いしものの権能に非ずして、常に罪人に対する報にこそ。

## 第十五章

### 偶像礼拝の愚かさ

一　されど我等の天主よ、汝は甘美にして、真実に在し、気永く、憐憫も
二　てすべてのものを掌り給う。二夫れ、われらはたとい罪を犯すとも、汝
三　の偉大さを知る故に、なお汝のものにして、また罪を犯さずば、我等の汝
四　の属たる1）を知る。三蓋し汝を知るは義の極にして、汝の義と権能とを
五　知るは不死の本なり。2）四実に人の悪しき工の造り出したる物、無用の作
なる排かれし影も、五色に彩られし彫刻も、我等を迷わしたることな
し。五愚なる者は之を見るや情慾を起し、死せる像の生命なき姿に愛着

まつたその偶像礼拝にある。
17）かれらの偶像礼拝と偽証とに対して。

第十五章　1）創造、維持、選抜、奇跡などによつて。—2）同様な思想は本一・一五。三・四。四・一以下にあり。

六　するなり。六悪を好む者等がかかる物に希望をかくるは相応わしく、これを
七　作る者も、これを好み崇むる者も、亦同じ。陶工師も亦軟かき土を捏ね、
　我等の用に供えんと労苦して各種の器を作り、同じ土より潔き事に用うる
　器と、然らざるものとを作る。されど是等の器を何に用うるかを定むるは
八　陶工師なり。3)八かく彼空しき労苦もて同じ土より神を作る。その彼は少時
　前に自らも土より作られ、また少時後にその貸し与えられたる生命4)の返
九　却を求めらるる時、己の取り出されし所に帰り行くなり。九然れども彼の思
　い患う所は、己のやがて病むべきことにもあらず、その生涯の短きことに
　も非ずして、金工銀工と競い、また青銅工にも倣い、贋物を作ることを以
一〇　て誇となすなり。一〇実にその心は灰の如く、5)その希望は土よりも空しく、
一一　その生命は粘土よりも卑し。6)一一そは彼、己を造り給いし者、己の裡に活
一二　く霊魂を吹き入れ、これに生命の気息を吹き込み給える者を知らざればな
　り。一二剰え彼等は我等の一生を遊戯と観じ、人生の営みは利得にありとな

3) 羅九・二一
4) 霊魂は天主から借りたもので利子を付けて返さねばならぬ。
5) 養四四・二〇参照。
6) 粘土は使命を果たすが、偶像を神として崇め、真の神天主を認めない人間はそうでないから

一三　し、7）如何なる途によりても、悪事を為してさえ、利を牧めざるべからずとなす。一三実にかかる人は、己地の物質より脆き器と彫像とを造るによりて、8）他のすべての人々よりも罪深きを知るなり。

一四　一四されどすべての愚者と、不幸にも目に余りて邪に高ぶる魂とは、

一五　汝の民の敵にして且その圧迫者なり。9）一五そは彼等見るにその眼を、息吸うにその鼻を、聞くにその耳を、握るにその手の指を用うること能わず、またその足は動かざれば歩む役に立たざる、異邦人のあらゆる偶像を神としたればなり。10）一六抑々是等を作りしは人にして、

一六　是等を拵えしは自ら気息を借りおる者なり。実に人は誰も、ただ己に似たる神のほか作ることを得ず。11）一七夫れ、彼は自ら死すべき者にして、悪の手もて死物を作る。蓋し彼はその祀る所の物に優れり、そは彼死すべき者なれども、真に生命あり、然るに是等の物は生命あることなければなり。一八更に彼等は最も卑しき動物12）をも祀

7）ギリシャ語本「儲け多き大市にありとなし」。―8）彼らはその像が僅かの土に過ぎないことを知っているだけに、それを神として売り渡した相手の人を余計に欺くこととなる。

9）エジプトのギリシャ人たち。―10）詩一一三・五。一三四・一六。―11）御自分の御本性によって生き給う天主だけが、生物を造り出すことがおできになる。

―12）エジプト人は、

一九

る、しかも是等は、他の理性なきものに較ぶるも、なお劣れるなり。一九 是等の動物は見るだに善き所を認め得ず、かくて是等は天主を頌うること及び、その祝福を蒙ることより除外せられたり。13)

彼らが祀らなかつた動物よりも、愚かさの点で一層厭うべき動物を祀つた。―13)天主が被造物たる是らに与え給うた御祝福を、是らは偶像礼拝に誤用されたことによつて失つた。

## 第十六章

### エジプト人とイスラエル人とに対する天主の異れる御取扱い

一 一 是等故に、また是等に似たる物に由りて、彼等は相応わしき苦患を受け、動物の大群に絶やされたり。

二 二 されど汝その民にはかかる苦患の代りに、善きに取り計らい、彼等の慾望に適う、風味の新しくして甚だ

三 三 住き食物を与え、彼等のために鶉を備え給えり。1) 三 されば、かの者等は寔に、食物に飢えながら、己に示されし且遣されたるもののために、2) あるべき食慾をさえ失

**第十六章** 1)民一一・三一。―2)エジプト人はその動物崇拝のために蛙の災害で罰せられた（出七・二六以下参照）。

四　いたりしに、汝の民は暫時缺乏に堪えたる後、未だ曾てあらざりし食物を味いたり。四 蓋し暴虐を加えし者の上に避くべからざる滅亡の来ることは当然なりしかども、この人々にはただ如何にその敵の亡ぼされたるかを示されしのみなりき。五 実に彼等は動物の荒れ狂いてかかりし時、曲れる蛇に

五　咬まれて斃れぬ。3) 六 されど汝の御忿怒はいつまでも続くことなくして、彼

六　等は懲戒のためにただ暫時の間患難を与えられ、汝の律法の誡を想い起す

七　べき救済のしるし4) を得たり。七 即ちこれを仰ぎし者は癒されしが、そは

八　その見しものによるに非ず、万人の救主にて在す汝によりてなり。八 このことによりてまた汝は、すべての悪より救うものは汝にて在すことを、我

九　等の敵に示し給えり。九 夫れ、かの者等は蝗と蠅とに咬み殺され、その生

命を救う術もあらざりき、そは彼等かくの如くにして絶やさるるに応わし

一〇　かりしが故なり。5) 一〇 然るに汝の子等は、毒龍の牙もこれを殪すこと能わ

一一　ざりき、蓋は汝の御憐憫彼等に臨みて、これを癒したるなり。一一 抑々彼等

3) 民二一・六
4) 青銅の蛇。
5) 平生は人間に死ぬ程の害を与えぬ動物がエジプト人をひどく害したのに、それ自体有毒な動物がイスラエル人を殺さなかった。―出八・二四。一〇・四。默九・七。

の試錬を受けしは汝の御言を想い起さんがためにして、その速に癒されしは、
一二 彼等が忘却の淵に陥りて、汝の御祐助を用うる能わざるに至らざらんためなり。一三蓋し彼等を癒したるは、薬草にもあらず、膏薬にも非ずして、主よ、万
一三 物を癒し給う汝の御言にこそあるなれ。一三主よ、実に汝は生と死との上に権能
一四 を有ち給い、人を死の門に導き下り、また導き上り給う。[6] 一四されど人は悪意に
一五 より殺すことあれど、その霊去るや戻すを得ず、取り去られし魂を呼び返す
一六 術も知らず。一五汝の御手より遁るること能わざるなり。一六蓋は汝を知ることを
一七 好まざりしかの悪しき者等、汝の御腕の力に鞭打たれ、曾て知らざる大雨と雹
一八 と俄雨とに悩まされ、また火に焼き尽されたればなり。[7] 一七茲に最も驚くべき
一九 は、如何なるものをも消す水の中にて火[8]の一層勢を得しことなり。是は世界、義人のために復讐したるなり。一八その火は時として衰えしが、是、悪しき者に遣されたる生物の焼けずして、彼等天主の審判により己かかる責苦を受くることを見て悟らんためなりき。一九その火はまた時として、水中にありながら

6) 申三二・三九。母上二・六。土一三・二。
7) 第七の禍をさす。出九・二二—二五参照。
8) 雷火

二〇　何処にても常の勢に優りて激しく燃え上れり、そは悪しき地より生じたる物を滅ぼさんためなりき。二〇これに引きかえ汝の民は、汝天使の糧もてこれを養い、労せずして作りしパンを天よりこれに賜いしが、そはあらゆる美味とあらゆる風味の佳さとを兼ね具えたりき。9)

二一　実に汝の賜いし物は、10)汝が如何に汝の子等に慈愛深く在すかを示し、人各々の嗜好に応じ、各々の望むがままに変れり。11)

二二　されど雪と氷とは火の力に堪えて融けざりき。これ彼等、火が雹の中に燃え、雨の中に閃きて、敵の産物を焼き滅ぼすことを知らんためなりき。12)

二三　かく之はまたも、義人の養われんために、己が力を忘れしなり。13)

二四　即ち造られしもの造り主なる汝に仕え、不義なる者に向かいてはこれを苦しめんとて盛に燃え、汝に依頼み奉る者のためには幸あらしめんとて和ぐなり。

二五　されば物14)はその時にもさまざまに形を変え、汝にこれを願い求めし人々の意に応じ、

9) 出一六・一四。民一一・七。詩七七・二五。約六・三一。
10) 汝（天主）から送られたマンナというもの。—11) 出一六・三一に記してある味は決まった味であって、ほかの味を望まければ変らなかった
12) 出九・二四。
13) マンナは雪か氷のような外観であったが（出一六・一四）、煮焼きしても溶けなかった（出一六・二三）。—14) マンナ。

二六　すべての物を養い給う汝の恩恵に仕えしが、二六是、主よ、汝の愛し給う汝の子等が、地より生ずる産物のみ人を養うに非ずして、汝の

二七　御言こそ汝を信ずる者を保ち給うことを知らんためなりき。二七蓋は火にて滅ぼすことを得ざりしもの、微かなる日光に温めらるるや、

二八　忽ちに融けたればなり。二八是、日出ずる前に起きて汝を讃え、黎明に汝を拝すべきことを、すべての人に知らしめんためなりき。15)

二九　二九実に感謝の心なき者の希望は冬の氷の如く融けて消え、無用の水の如く流れ去るべし。16)

## 第十七章

エジプトの暗黒

一　一抑々、主よ、汝の審判は大にして、汝の御言は口に説き難し。さ

二　れば教訓を受けんとせざりし魂は1)謬れり。二即ち不義の輩、この聖なる民を圧え得べしと思いたりしに、却つて暗黒と長き夜との絆

15) ギリシャ語本「天主の御前に出ずべき」。天主の思慮深き御摂理を感謝する心で早朝から祈りの義務を果たさない人の希望もかくの如く溶けて消えてしまう

第十七章　1) 天主に反抗するエジプト人

三　にて縛められ、己が家の内に閉ぢ込められ、永遠の摂理より除かれし者となりて臥したり。2) 三　しかして彼等、秘かに罪を犯しつつも、3) 隠れ得るならんと思いたりしに、忘却の黒き面紗の下に隔てられ、恐れ戦き、いたく驚き惑いたり。

四　実に彼等の身を隠したる洞穴も、彼等を恐怖より護らざりき、そは物音上より聞え来りて彼等を怖ぢ惑わしめ、悲しげなる人の姿4) 現れて彼等を恐れ戦かしめたればなり。

五　また如何なる強き火も彼等に光を与え得ず、星の明るき閃光も物凄き夜を照らし得ざりき。

六　ただ彼等に凄まじき光現れぬ、かくて彼等曾て見たることなき面の恐ろしさに打たれ、その見たるものを一層悪しく思いたり。

七　是に於いて彼等の魔術は嘲笑を受け、彼等の智慧の誇は罰せられて面目を失いぬ。5)

八　蓋は病める魂より恐怖と不安とを逐い出さんと約束したる者、笑止にも自ら恐怖に満たされて病みたればなり。

九　即ち彼等を怖じ惑わしむる恐ろしきもの、一つとして非りしに　彼等は動物の過ぎ行くと、蛇の爬る音とに愕かさ

2) まる三日続いた第九の禍　出一〇・二二以下。
3) 人知れぬ行為で罪を犯した者は、暗闇で罰せられた
4) 多分とりわけ殺されたイスラエルの小児らや男の人々の姿。
5) 出七・二二

一〇　れ、6）死なんばかりに恐れ戦きて、如何にすとも遁れ得ん術なき空気をさえ、見んとはせざりしなり。一〇是、悪は怖じ恐るるが故に、自ら罪あることを証し、良心は不安に駆られて絶えず悪しきことあらんと予期すればなり。

一一　実に恐るるは、熟慮の授くる救助の途を、棄つることに他ならず。

一二　一二しかして心の中に希望を抱くこと少ければ少きほど、悩を齎す知られざる原因を、一三ますます大と思うなり。一三されど冥府の深き底より襲い来りて、7）人の全く何事をもなし得ざる夜に、同じ眠に就けるかの者等、8）

一四　一四或は物の怪に怯えて悩まされ、或は心の絶望に絶え入りたり、蓋は予期せざる恐怖、

一五　俄に彼等に臨みたればなり。一五更に彼等の中のある者、地に倒れたりとせんに、彼は桎梏もなきに恰も獄舎に閉じ込められたるが如し。

一六　一六或人農夫、又は、牧夫、又は野に働く者にして、かく不意に襲われたりとせんか、是遁れ得ざる災禍を蒙りしなり。

一七　一七実に彼等は皆一条の暗黒の鎖にて繋がれたり。そよぐ風、或は枝の茂れる樹の間に鳴く鳥の美し

6）動物はみな異常な自然現象に愕かされた。—7）その夜はまるで冥府から出て来たかと思われるほど、恐ろしかつた。

8）しかしこの眠りは健康な眠りではなくて、休まらぬ力づかぬ、恐怖に満ちたものであつた。

一八　き声、或は激しく流れ下る滝の勢、一八或は転び落つる岩の凄まじき響、或は見えざる所を馳せ廻りて戯るる獣の跫音、或は猛獣の咆ゆる力強き声、或は最高き山々より呼び返す谷、是等は彼等をして恐怖のあまり気を失わしむ。

一九　一九実に全世界は明るき光に照され、人皆沮まれずその業を

二〇　営み居たりしに、9)二〇ただ彼等のみは、後に彼等を襲うべき暗黒の前兆なる重き夜、これを垂れこめたり。10)やがて彼等には、暗黒よりも已自らこそ堪え難きものとなりしか。

## 第十八章

### エジプトにおける長子の殺戮——コレの叛逆に当りてアーロンが代願したる効果

一　一されど汝の聖者1)には最も大なる光ありて、彼等エジプト人の声を聞

二　けども、その姿を見ず、彼等は同じ苦悩を受けざりしが故に、汝を讃め

三　奉れり。2)二またた前に苦しめられし者、今や苦しめられざることを感謝し、差別のなおも続かん恩恵を請いたり。三されば彼等は、知らざる途の案

9)エジプトがかように苦しんでいる間も、世界の他の所は太陽その他の光を受けていた。

10)間近に迫れる死と劫罰との暗黒。

第十八章1)イスラエルの人人。

2)出一〇・二三—イスラエル人は暗黒の間エジ

四　内者として、燃ゆる火柱を賜わり、なお汝は彼等に不便なからしめんとて陽を出し、その旅を安らかならしめ給えり。3)

五　四 寔にエジプト人は光を奪われ、暗黒の獄舎に閉込められて然るべき者なりき。そは彼等、律法の不滅の光を世に与うべき汝の子等を閉込め置きたればなり。五 彼等義人の子等を殺さんと企みしかば、ただ一人の子棄てられしも、彼等を罰せんために救わるるや、汝彼等の子等を数多奪い給い、また大水の中に彼等を皆諸共に亡ぼし給えり。4)

六　六 即ちその夜5)のことは我等の父祖に予め知られ居たり、是彼等がその信頼する誓約の如何なるものなるか6)を確かに知りて、更に意を強うせんためなりき。

七　七 かくて汝の民は義人の救拯と悪人の滅亡とを受けたるなり。

八　八 即ち汝は仇なす者を罰し給いし如くに、召し給える我等には光栄を加え給えり。

九　九 蓋は善き人々の子プト人の苦しみを目では見なかつたが、その恐怖の叫びを聞いて、自分達の救われたことに対して天主を賛美した。—3)出一四・二四 詩七七・一四。一〇四・三九。—4)出一・一六。二・一四・二七。—彼らはかの子らをナイル河の水で溺死させたが、紅海では自分たちが死んだ。—5)エジプトの初子が死んで、イスラエル人がそこを出る夜。出一・四以下参照。—6)モイゼは天主の代表者としてヘブレオ人にそのことを予言していた。出一二・二一—二九。

たる義しき者等、密かに犧牲を捧げ、7）心を合せて、正義の律法を守り義人として幸福をも不幸をも等しく受くべきことを決意し、既に父祖を讃うる歌を歌いたればなり。一〇然るに敵の叫声は乱れて響き、子等の死を悼む慟哭の声は聞え渡れり。一一しかして僕も主人と等しく罰を受け、民たる人も王と同じく苦しみたり。8）一二かくていずれも同じ死様をなせる無数の死者を擁え、実に生き残れる者はそれを葬るにすら足らざりき、そは国民の重立てる人々死に失せたればなり。一三夫れ、彼等曩には魔術に惑わされて、何事につけても信ずることなかりしが、今その長子等が死に絶ゆるや、始めてこの民の天主のものたるを認むるに至れり。一四そは万の物、音なき靜寂に包まれ、夜も更け行きて半に及びし頃なりき、一五汝の全能なる御言は、9）猛き戦士の如く、天より、王座より10）滅亡の地の真中に降り、一六汝の厳なる命令を奉じ、鋭き剣となりて立ち、すべてのものに死を満しけるが、地に立ちな

7）小羊を。エジプト人に知られぬよう自分達の家のなかで。―8）出一二・三〇。―9）死の天使の姿による天主の御命令。

10）この箇所は御降誕後の日曜のミサの入祭文で、天主の第二位（λόγος）の御託身に適用される。但し相違する所は、人を罰するためでなく、却つて救うためにそれが行われる点。

一七 から上は天にまで達けり。一七 折しも不吉なる夢に現れし幻影、俄に彼等を愕か
一八 し、予期せざりし恐怖彼等に臨みぬ。一八 彼等は此処彼処に倒れて半ば死したる
一九 様となり、その死の由つて来る所を暁らしめたり。一九 是、彼等を愕かしたる幻
二〇 影、彼等がその禍を蒙る故を知らずして亡ぶることのなからんために、予めこ
二一 れを示したるなり。二〇 また義しき者[11]も次いで死の試錬を受け、荒野に於いて
群衆の間に混乱起りしが、[12]汝の御忿怒は永く続かざりき。二一 蓋は咎むべき所な
き一人の人[13]急ぎ来りて民のために願いしに因りてなり。即ち彼は祈祷と言う
その奉仕の楯をかざし、香を焚きつつ祈願をこめて御忿怒に抵り、汝の下僕た
ることを示して、災難に終を告げしめたり。二二 されど彼が混乱に打ち勝ちしは
体力によるに非ず、武器の力によるに非ず、父祖の誓言と契約とを申し立てて
理由となし、その懲したる者を、[14]言によりて屈服せしめたるなり。二三 即ち彼
等既に相重りて仆れ死人の山を築きし時、彼その間に立ち現れ、襲撃を遮り、
その生者に至る進路を断ちたるなり。二四 実に彼の纏える長き衣は全世界を示

11) イスラエルの人人
12) モイゼに対するコレの謀叛。民一六・四一以下。
13) アーロン。
14) 死の天使。

二五

し、15) その四列の宝石には父祖の栄光刻まれ、彼の頭上の冠には汝の御稜威鏤められたりき。二五 されば勦す者も是等のものには16) 屈して恐れたり、蓋は御忿怒17) はただ試錬のみにて足りければなり。

## 第十九章

天主のエジプト人を赦し給わざりし理由——天主のイスラエル人に対する恩恵

一 されど天主を蔑する者には、終に至るまで1) 御震怒容赦なく下りぬ。蓋は彼2) 彼等のやがて為さんとする所を予め知り給いたればなり。

二 即ち彼等は彼等の去り行くを許し、しきりに之を急き立てたりしかど、やがて後悔してその後を追

15) アーロンの衣がどういう点で世界を象徴しているのかはわからない。胸あてには、イスラエル十二族の名を刻んだ十二の宝石が嵌めてあつた（出二八・一五—二一）。これによつてアーロンはイスラエル全民族の代表者と認められていた。—16) この聖なる飾りに対すると、天主の報復の天使も恐れたように退いた。—17) 二〇節と同じような言葉。

**第十九章** 1) イスラエルに対するように一時的ではなく、かれらが紅海で滅びるまで。—2) 天主。

三 えり。 三 蓋は彼等なお喪に服し、死者の墓畔にて嘆きおりし間に、ま
たも愚なることを思い立ち、己が願いて急き立て、去らしめし者をば
さながら逃亡者なるかの如くに追いかけたるなり。3) 四 即ち彼等に相応
四 わしき運命は、4) 彼等をかかる極にまで至らしめたり。しかも彼等は己
等の上に起りしことを忘れ果てしが、是懲罰のなお足らざる所を、後
五 の罰によりて補わんが為、 五 汝の民は不思議に通過するを得るも、彼
等は新なる死にあわんが為なりき。 六 蓋は、造られし物いづれもその
六 類に従い、汝の命を奉ぜんとて、新たなる状態にせられ5) たるにて、
七 是、 汝の子等の恙なく護られん為なりき。 七 即ち雲彼等の陣営を蔽
い、6) 前に水ありし所に乾ける陸地露れ、紅海の中に障碍なき道出で、
八 深き淵は緑の野となり、 八 民皆汝の御手に護られ、汝の奇蹟と徴とを
見つつ、彼処を通り過ぎしなり。 九 実に彼等は牧場にある馬の如く喰
九 み、小羊の如く跳び廻りて、主よ、彼等を救い給いし汝を讃め称えた

3) 出一四・五。
4) ファラオとその臣民一同の剛情頑固。出一四・四参照。
5) 被造物がみな己の性質を変えて、奇跡に役立つた。
6) イスラエルの人人が紅海を通る時、雲はそのうしろにかかりイスラエル方は明かるいのに、エジプト方を暗くした出一四・一九参照

一〇　り。7)　一〇蓋は彼等なおその他郷に居りし間に起りし事、即ち地は畜獣の類の代りに蠅を出し、河は魚の代りに夥しき蛙を

一一　吐き出したるを、憶え居たればなり。一一されど彼等最後に、慾に引かれて美食を求めし時、新しき種類の鳥を見たり。8)

一二　一二即ち彼等の慾を満たさんとて、海より鵜飛び立ち来りしなり。さて罪人には罰下りしが、是に対しては予め雷霆の力9)

一三　によりて兆徴与えられざりしにあらず、彼等がその罪悪に応じて苦悩を受けしは蓋し当然なりき。一三蓋は彼等の与えし冷

一四　遇は、何よりも憎むべきものにして、10)実にかの人々は見知らぬ旅の者を迎え入るるを欲せざりしのみなるが、この人々は恩を受けし客11)を奴隷になしたればなり。一四しかのみならず、かの人々は旅の者を迎うることを喜ばざりしに由りて、

一五　また他の譴責を受けたるに、12)　一五この人々は始め歓び迎えな

7) 彼らは牧場にいる馬や小羊のように喜んで讃美歌を歌った。出一五・一—一九参照。

8) 出一六・一三。民一一・三一。本一六・二一。

9) 詩七六・一七以下。

10) エジプトに下つた禍の正当なことを、記者はかつてソドマが知らない他所人にしたよりもひどくエジプト人がヤコブの家を虐待した事実によつても立証する。創一九・一以下参照。

11) ヨゼフがエジプトを救つたから。—12) ソドマ人に対しては、審判の緩和が行なわれるであろう。

から、同じ法律の保護を受けおる人々を、最残酷なる責苦もて苦しめしなり。一六されど彼等は盲目もて罰せられたり、恰もかの人々が、義しき人の戸口にて不意に暗黒に包まれ、各々わが門に入る路を探したる如くなりき。13)

一七　実に元素がその本性を変えられしは、さながら一楽器に於いてその音色は変えられても、本来の諧調は全く保たれたるに似たり。

一八　是はかの時起りしことを観て、明瞭に断定し得るなり。一八即ち陸の生物は水の生物に変えられ、14)泳ぐ物は陸の上に移りぬ。15)

一九　火は水の中にて己が力以上の力を現し、水は之を消す本性を忘れ果てたり。二〇然るに焔は、容易く殺し得べき生物その中を歩めども、その肉を害わず、16)また氷の如く融け易きかのいみじき糧をも、融かさざりき。蓋は、主よ、すべての事に於いて、汝は汝の民を大ならしめ、之に栄あらしめて、彼等を軽んじ給わず、何時にても何処にても援け給いたればなり。

13) 創一九・一一
14) 記者は大胆な喩を以て、イスラエル人と共に紅海を渡つた獣を水の生物という。またこの生物は雨の禍の間水の生物と言うこともできる。
15) 蛙。―16) 本一六・一八参照。

# 集会書

この書の原典には、「シラクの子なるイエズスの智慧」、もしくはそれを略称して「シラクの智慧」という題名が付いている。しかし初代キリスト教会の時から、エクレジアステイクス、即ち集会書と称して来た。本書がこの名を得たのは、これが求道者および新信者に教えるための本の一つで、しかもその重要なものであつたからである。

集会書は西紀前百八十年頃ヘブレオ語で書かれ、西紀前百三十年頃ギリシャ語に飜訳された。本書は日常生活を、天主の御掟によつて律すべきことを教え、いろいろな点で箴言に似ている。

序の言は原著者でなく、ギリシャ語に訳した人が附加したものなので、正典の中に入れられていない。

## 序の言

我等には、律法、預言者等、その他之に続ける人々[1]によりて大なる智慧数多示されたり。是故にイスラエルは、その教訓と智慧とに対して、称えらるべきものなり。其は之を語りし人々、必ずや達人たりしに相違なきのみならず、また他の者等も、[2]語る

序の言　1)上記のもの同様聖書の記者たる人達、即ちダヴィド、サロモンなど。2)異教徒、またはユデア教に改宗したギリシャ人達。

に書くに、之によりて学び得る所、多かるべきを以てなり。

わが祖父イエズス、心を専らにして律法、預言者等、その他我等の祖先より我等に伝えられし諸書を精読したる後、自分も教訓と智慧とに就きて、些か錄す所あらんと思えり、其は学び知らんと欲する人々をして、それによりて教えらるる所あり、益々意を注ぎて、律法に従い生くる確信を得しめん為なりき。されば我汝等に勧む、好意を有ちて来り、注意して精読せよ。しかしてまた、我等もとより智慧の梯をそのまま伝えんと欲すれども、詞の用法に足らずと見ゆる所あらば、之を容赦せ。

蓋はヘブレオ語は、之を他国語に飜訳するや、その持味を失えばなり。3)

しかのみならず、律法そのものも、預言者等も、またその他の人々の著書も、原語にて述べられたる時4)とは少からざる相違あるなり。抑々我はプトレメオ・エヴェルジェテス王統治の第三十八年に、5)エジプトに到りてより、時久しく彼処に居りし間に、其処にて、価値少からず侮る

他説によれば、世界の各地に散りゆき、もはやヘブレオ語を解しなくなつたイスラエル人。—3)すべての飜訳におけると同様。—4)即ち原文と訳文とをくらべると。—5)プトレメオ・エヴェルジェテスは西紀前一七〇年から一一七年まで統治していた。されば訳者は西紀前一三二年にエジプトへ行つて早速飜訳に着手したのである。

べからざる教訓の書の遺れるを見出せり。茲に於いて我は、些か勉め励みてこの書を飜訳する労を取ることの、善くして必要なるを思い、或期間、この目的を果たさんために、屢々夜も眠らず精励し、この書を出して、主の律法のままに生きんと志す者の如何に振舞うべきかを、熱心に学ばんと欲する人の用に宛てんとせり。

## 第一章

### 智慧の起源とその価値

一 凡て智慧は主なる天主より出で、恒にその御許にありたり、即ち代々の前よりあり。[1] 二 誰か浜の真砂を、雨の滴を、世の日数を算えし者あらんや。誰か天の高さを、地の広さを、滄海の深さを測りし者あらんや。 三 誰か、万物に先立ちて存し給う天主の御智慧を究めし者あらんや。 四 智慧は万物よりも前に創造られ、洞察する智力は代々の前よりあり。 五 高きに在す天主の御言は智慧の泉にして、その歩みは永遠の誡命なり。 六 智慧の根本は誰にか啓示されたる、またその深き謀計は、誰か之を知りたる。 七 智慧の教訓は誰にか啓示され、誰

第一章 1) 王上三・九。四・二九。

にか顕されたる、またその歩みの多様なる、誰か之を暁りしぞ。
八　最高き全能の創造主、権能あり甚だ畏るべき王にして、その位
九　に坐し、主宰し給う天主は唯一体在すのみ。是こそ聖霊により
て2)智慧を創造り、之を見、之を数え、之を量り給いし者なれ。
一〇　しかして彼はその造り給いしすべての物、肉あるすべての物の
上に、3)その与えんと欲し給うだけ、智慧を注ぎ、己を愛する人
一一　々に之を授け給えり。二主を畏るるは光栄にして誇るべきこと、
一二　怡楽にして歓喜の冠4)なり。一三主を畏るるは心を愉快ならしめ、怡
一三　楽、歓喜を与えて、寿命を長からしむべし。5)一三主を畏るる者に
一四　は、終に幸あるべく、その死する日に当りて祝福あるべし。一四天
一五　主を愛するは尊むべき智慧なり。6)一五この智慧が現れたる者は、7)
一六　之を見その偉大なる作用を知りて、之を愛す。一六主を畏るるは智
慧の始なり、8)そは、忠信なる者にありては、9)その母胎内にある

2)「聖霊によりて」という語は、ギリシヤ語本にはない。―3)創造の時、万物をその目的に応じて造りかつ整え給うて。―4)祭日に花の冠をかぶつた昔の習慣から採つた喩。5)出二〇・一二。箴三・二など参照。―6)愛は信心や畏懼よりも高度の智慧。―7)智慧は己が現われた者に、愛を与える。―8)詩一一〇・一〇参照。―9)天主に忠実な人々。

一七 時に創造られ。10) そは選まれたる婦等と共に歩み、義しき者忠信なる者に
一八 知られたり。11) 一七 主を畏るるとは、知識による信心なり。一八 信心は心を守に
一九 りて義しからしめ、愉悦と歓喜とを与えん。一九 主を畏るる者には幸あるべ
二〇 く、その臨終の日に祝福あるべし。12) 二〇 主を畏るるは智慧の満てるにして、
二一 その満てるは結果より知らる。二一 これはその全家に己が産みし物を、倉庫
二二 にその宝を、満たす。二二 主を畏るるは智慧の冠にして、平安と救霊の好果
二三 とを溢るるばかりに与う。二三 彼はこれを見、且数え給えり、13) されど両者
二四 ながら天主の賜物なり。二四 智慧は知識と洞察する智力14) とを分ち与え、己に
二五 縋る者の栄誉を高からしむ。二五 智慧の根本は主を畏るることにして、その
二六 枝は寿命長きことなり。二六 智慧の宝庫の中には、了悟あり、知識による信
二七 心あり、15) されど罪人には智慧も憎むべきものなり。二七 主を畏るる念は罪
二八 を駆逐す、二八 実に敬畏なき者は、義とせらるるを得ず、即ちかかる者の気
二九 昂りて憤怒るは、その身を滅ぼすなり。二九 忍耐強き者は定められたる時19)

10) 天主に忠実な者は、小さい時から智慧を得る。
11) 箴一・七。九・一〇。
12) 一七—一九節はただラテン語本にしかなく、繰返しである。殊に一九節は一三節の反復。
13) 九節参照。
14) 四節参照。
15) 一七節参照
16) 天主が救うをよしと見給

三〇　まで堪え忍ぶべく、その後再び喜悦を与えられん。17）

三一　は然るべき時まで己が言を述ぶるを差控う、衆くの口唇、その思慮

三二　深きを語り合わん。三智慧の宝庫の中には、規律の教あり、三三され

三三　ど天主を崇むるは、罪人の憎む所なり。三三子よ、汝もし智慧を欲ま

三四　ば、正義を守れ、然らば天主汝に之を与え給わん。三四夫れ、主を畏

三五　るるは智慧にして、また躾なり、しかして主に悦ばるるは、三五忠信

三六　及び柔和なり。主は之を有つ人に宝を満たし給わん。三六主を畏るる

三七　念に抗うなかれ。また二心を有ちてその御許に近づくなかれ。三七人

三八　々の眼前にて善を装うなかれ、また汝の唇によりて躓くなかれ。

三八　これに注意せよ、これ汝が倒れて汝の魂に恥辱を招くことのな

三九　からんため、三九且天主が汝の秘密を発き、汝を集会の只中にて打倒

四〇　し給うことのなからんためなり。四〇そは汝悪意をもちて主に近づき

汝の心に詭計と虚偽と充満ちたればなり。18）

う時まで。—17）ギリシャ語本には単に「かれ（忍耐強き者）は暫くの間その言葉を祕めおかん。」とある。—18）ギリシャ語本には、註一二で述べた所のほか五、七、一四、一五、二三、二六各節がなくまた他の節も部分的に欠けていて、本章はただ三十節しかない。それ故ヴルガタ訳によるのと、ギリシャ語本によるのとでは、引用が一致しないわけである。

# 第二章

## 試錬についての心得

一　子よ、進みて天主に仕えんとせば、正義と敬畏とに立脚し、試錬に
二　対して汝の霊魂を準備せよ。1) 汝の心を卑うして堪忍べ。汝の耳を傾
三　けて了悟の言2)を承けよ。患難の時に慌つるなかれ。三 天主の負わせ
　　給うを堪え忍べ。天主と結びて堪え忍べ、これ汝の生命最期の時に延
四　ぶることあらんためなり。四 凡て汝に負わさるることを甘受し、苦し
五　みの時に堪え忍び、汝の恥辱の時に3) 忍耐を守れ。五 そは金銀は火の
六　中にて試さるれども、4) 嘉せらるる人は恥辱の炉の中にて然せらるれ
　　ばなり。5) 六 天主に信頼せよ、さらば彼汝を再び迎え給わん。また汝の
七　道を直くし、彼に希望を置け。彼を畏るる念を保ちて、それと共に老
八　いよ。七 汝等主を畏るる者よ、堪え忍びてその御憐憫を待て、汝等倒
　　れざらんために、その御許より離れ去るなかれ。八 汝等主を畏るる者

第二章　1) マテオ四・一、二。提後三・一三。―2) 苦しみの有益なことに関する言葉。3) 汝にとつて、自分が落ちぶれるようなつらい状態の変化が来る時。4) 聖書のなかに屢々出てくる比較。5) 智三・六。

九　よ、彼に信頼せよ、さらば汝等の報酬の空しくなることなからん。九汝等主を
一〇　畏るる者よ、彼に希望を置け、さらばその御憐憫来りて汝等を悦ばしめん。
一〇　汝等主を畏るる者よ、彼を愛せよ、さらば汝等の心光を得べし。一一子等
よ、諸々の類の人を観て、誰も主に希望を置きて破滅びたる者のあらざること
一二　を知れ。一二実にその御誡命を絶えず守りて棄てられたる者誰かある。また
一三　彼を呼び求めて彼に軽視められたる者誰かある。一三それ、天主は慈愛深く
憐憫に満ち給えば、なやみの日に罪を赦し給わん、7）しかして凡て真実に彼
一四　を求むる者の保護者にて在す。一四二心、汚れたる唇、悪をなす手、また地上
一五　にて二つの途に踏み迷う罪人は禍なるかな。8）一五心たゆたいて9）天主を信頼
一六　せざる人は禍なるかな、そはかかる人は彼に護られざればなり。一六忍耐を失
一七　い直き道を棄て、曲れる道に迷い入りし者は禍なるかな。一七主の審理を始め
一八　給わん時、彼等何をかなすべき。一八主を畏るる者はその御言を信ぜざること
一九　あらじ、彼を愛する者はその道を守らん。10）一九主を畏るる者は彼に嘉せらる

6）詩三〇・一。
7）苦しい時の忍耐で、罪が償われ、従つて赦される。
8）王上一八・二一
9）天主に固く依り縋つていない人々
10）約一四・二三。

ることを追求め、彼を愛する者はその法にて満たさるべし。[11]　二〇主を畏るる者は己が心を整え、その御眼前にて己が霊魂を聖ならしめん。二一主を畏るる者はその御誡命を守り、その御訪問の時まで[12]忍耐を保持ちて、二二云わん、我等もし悔悛せずば、人の手に非ずして、主の御手に陥るべしと。[13]　二三蓋し彼の偉大なるに従いて、その有し給う御憐憫も亦然るなり。[14]

## 第三章

孝行、謙遜、及び慈善に就ての教訓

一　一義人の集会は智慧の子等にして、その特徴は服従と愛となり。[1]　二子等よ、汝等父の判断を聴きて、その如くに為せ、三さらば汝等救わるべし。実に天主は子等に父を敬わしめ、子等が母の判断を求むるよう定め給えるなり。四天主を愛

[11] この聖なる掟を絶えず默想し且実行するによつて。[12] 主が御憐みを以てまた彼らを顧み給うまで。[13] 天主を畏れる人は天主の手よりも人間の手に落ちる方を、一層心配する。[14] 本章も第一章と同様に、ギリシャ語本では節の数が少く、ただ十八節しかない。

第三章　[1] 本節はギリシャ語本になし。

する者[2]は罪を償い、身を慎しみて之を避くべく、日常祈りて聴容れらるべし。五 己が母を敬う者は財宝を積む者の如し。六 己が父を敬う者は、子等によりて楽しみを得べく、その祈る日には聴容らるべし。七 己が父を敬う者は長寿を享くべく、[3]父に服う者は母の慰安となるべし。八 主を畏るる者は親を敬い、己を生みし者に仕うること恰も主人に対する如くにせん。九 行為に言に、忍耐を尽して、[4]一〇 汝の父を敬え、[5]一〇 さらば彼の祝福汝に臨みて、その祝福最期の際まで留まらん。一二 父の祝福は子等の家を固うす。されど母の呪詛はその基まで根扱にす。[6]一三 汝の父の恥辱となる事をなして誉を求むるなかれ、蓋は彼の恥辱は汝にも誉たらざればなり。一三 蓋し人の誉はその父の誉より出で、誉なき父は子の恥辱なり。一四 子よ、汝の父の年老いたるを扶養せよ、その生ける間之を悲しましむるなかれ。一五 しかしてもしその智力衰えなば、寛容を示し、汝の壮なる

2) ギリシャ語本「父を敬う者」。第四誡を守ると、ただこの世での祝福のみならず、罪の赦されることまでも約束されている。―3) 天主は第四誡を宣布することによって、正式にこれを約束し給うた。出二〇・一二参照。4) ギリシャ語本になし。―5) 申五・一六マテオ一五・四。可七・一〇。弗六・二6) 創二七・二七。四九・二以下。

に由りて之を軽んずるなかれ。実に父に対する善行は忘れらるることあらざるべし。一六 実に汝母の罪過を忍ばば、善き報を獲べし。一七 また正義によりて汝の家興るべく、患難の日に汝思い出ださるべし。かくて汝の罪は晴れたる日の氷の如くに融け失せん。[7] 一八 父を棄つる者は名を汚すこと如何ばかりぞや。また母を怒らしむる者は天主に呪わるるなり。一九 子よ、汝の業を柔和に行え、さらば汝人に尊敬せらるる上に、愛せらるべし。二〇 汝偉大なれば偉大なるほど、益々万事に己を謙遜ならしめよ、さらば天主の御前に恩寵を得べし。[8] 二一 そはただ天主の御力のみ偉大にして、彼は謙遜なる者によりて誉を得給えばなり。二二 汝にとりて高きに過ぐる事を志すなかれ、また汝の力及ばざる事を探り究めんとするなかれ。但天主の汝に命じ給える事、それを常に思い、且その多くの御作に好奇の心を抱くなかれ。[9] 二三 蓋は隠されたる事を己が眼もて見るは、汝にとりて必要ならざれば なり。二四 必要ならざる事につきてあまり穿鑿するなかれ、また多くの事に好

7) 四節参照。
8) 腓二・三。故に傲慢は天主の誉を横取りすることである。―
9) 汝の私行に必要でないこと。―箴二五・二七。

二五　奇の心を抱くなかれ。10）二五蓋は人の智力を超えたる事の多きは、
二六　汝にも分明なればなり。二六己が謬れる推察に躓かされ、わが心を
二七　虚しき事に引留められたる者も亦多し。二七心の頑固なる11）は最後
二八　に不幸に逢うべく、危険を好む者は之に陥りて亡びん。二八二途を
二九　辿る心にては成功を見ざるべく、心の曲れるはその為に倒れん。
二九心の邪悪なるは苦しみの重荷に悩むべく、罪人は罪に罪を累ね
三〇　ん。12）三〇傲る者の会は癒ることなし、蓋は罪の木彼等の衷に根を
三一　張れるに、彼等更に気づかざればなり。三一智者の心は智慧により
三二　て悟らる。善き耳はひたすら望みて智慧を聴かんとす。三二叡智あ
三三　り聰明なる心は罪を避け、正義の業に成功を獲ん。三三水は燃上が
三四　る火を消し、施与は罪を禦ぐ。13）三四また天主は情を施す者を眷顧
　　み、後に至りても之を忘れ給わず、されば彼はその倒るる時にも
　　確乎なる扶助を得ん。14）

10）二二節後半の反復。
11）謙遜な心で危険の警告に聴き従わぬ人。
12）一つの犯罪は、その結果として他の犯罪をも誘発する。―13）ギリシャ語本「償う」。但四・二四。土四・一一。雅二・一三参照。
14）本章も前同様ギリシャ語本では節数が少なく、三十一節しかない。欠けているのは、一、二八、三二各節。

# 第四章

慈善を行い、智慧を愛すべしとのすすめ

一　子よ、貧しき者に施すべき時、詐く[1]なかれ、また貧しき者より汝の眼を背向くるなかれ。[2]二　飢えたる人を蔑むなかれ、また窮乏の裡にある貧しき者を苦しむるなかれ。三　乏しき者の心を悲しましむるなかれ、また困窮せる者に与うるを躊躇うなかれ。[3]四　難める者の懇願を拒むなかれ、また乏しき者に汝の面を背向くるなかれ。五　忿怒[4]ゆえに乏しき者より汝の眼を背向くるなかれ、また汝に乞い求むる者を棄ておきて、汝の背後にて呪詛うことを為さしむるなかれ。六　蓋は霊魂の苦しきに由りて汝を呪う者の祈祷は聴容れらるべく、彼を作り給える者彼に応え給うべければなり。七　貧しき者の集群に向かいては親切を示し、長老に向かいては汝の霊魂を卑うし、偉大なる人に向かいては汝の頭を低く下げ

**第四章**　1)ラテン語の defraudare は「欺く」の意。それは困窮者に対して施しをする義務があるから。―2)ギリシャ語は「乏しき者の目を、待たしむべからず」。―土四・七。3)箴三・二八参照。4)貧者の、或は天主の。

八　よ。5) 八貧しき者には快く汝の耳を傾け、汝の負債6)を返還し、柔和に
九　穏かに、彼に答うべし。九不義を蒙れる者を高ぶる者の手より救い出
一〇　だせ、しかして汝の霊魂に悔を残すなかれ。7) 一〇裁く時には、父なき
一一　子等を憐むこと慈父の如く、彼等の母には夫の如くなれ。一一さらば汝
　　至高者の従順なる子の如くなりて、彼母親にもまして汝を愛憐しみ
一二　給うべし。一二智慧はその子等に生命を吹きこみ、己を求むる者を歓び
一三　迎う、しかして先に立ちて正義の道を進まん。一三これを愛する者は生
一四　命を愛す、覚めてこれを求むる者はこれに嘉せられん。一四これを有す
一五　る者は生命を嗣がん。天主はその入る処を祝し給わん。一五これに仕う
一六　る者は、聖なる御者に従うべし、天主はこれを愛する者を愛し給う。
一六これに聴従う者は諸民を裁かん、これを見まもる者は、常に安んじ
一七　て在らん。一七これに依頼む者はこれを嗣がん、彼の子孫は鞏固にならん。
一八　一八そは試錬の時に彼と共に歩むが故にして、先ずこれが彼を選ぶ

5) ギリシャ語本には、「貧しき者」も、「長老たちに向かいては汝の霊魂を卑うし」もない。それで本節の意味は、「朋輩に対しては親切を示し、目上に対してはつつましやかなれ」。

6) 愛における。

7) ギリシャ語本「汝の裁かざるべからざる時には、心臆するなかれ」。

一九　なり。8）一九これは彼に畏懼と戦慄と試錬とを齎し、
その躾けの患難9）に逢わせて彼を苦しめ、彼の思念
を験し、その霊魂を信頼するに至るまで然するな
二〇　り。二〇然る後これは彼に力を与え、一路その許に至
二一　りて、之を楽しましむべく、二一また己が秘密10）を彼
に露し、正義の知識と了悟とを之に山と積上げん。
二二　二二されど彼もし迷いなば、これは彼を棄て、その
二三　敵11）の手に付さん。二三子よ、時12）を見て悪を避け
二四　よ。二四汝の霊魂の為に真実を云いて恥ずべからず。
二五　二五蓋し罪を齎す恥辱あり、また誉と恩寵とを齎す恥
二六　辱あり。13）二六汝の面目を害う人の面を憚るなかれ、
二七　また虚偽を云いて汝の霊魂を害するなかれ。二七汝の
二八　近き者倒れたる時は之を憚らず、14）二八救うべき時に

8）一八―二二節には、智慧が己に従う人々に対して常に行なうことが述べてある。―9）それはただ一時の試錬に過ぎない。―10）一層深いさとり。―11）ギリシャ語本「滅び」。―12）自分に対して有利順調な時。―13）両者に関しては本四一・二〇参照。正当なことをしたり犯した非を償つたりすることを恥ずる者の、恥入りは罪である。しかし自分の過ちを恥じてこれを改める者の恥入りは、栄誉になる（聖大グレゴリオの言葉）。―14）他人が不幸にも罪に陥つたら、これを再び引き立てるよう、訓戒することを恥じてはならない。むしろギリシャ語によれば、「目上を憚つて、罪を犯してまでこれに気に入ろうとするな」の意。

二九　は、諫言を控えずして、汝の智慧の美しきを隠すべからず。二九是、智慧は舌
によりて、思慮と知識と規律とは思慮ある言によりて、また堅き意志は義を
三〇　行うによりて、認められるればなり。三〇如何様にもあれ、真理の言に背きて語
三一　るなかれ、却つて汝の無知を示す虚言を恥じよ。15）三一汝の罪を告白すること
三二　を恥ずるなかれ。罪となる折にはいずれの人にも屈服するなかれ。三二勢力あ
三三　る人の面を冒すべからず、1）河の流に逆うべからず。三三汝の霊魂の為に、力
を尽して義の為に闘え、死に至るまで義の為に闘え。さらば天主汝の為にそ
三四　の敵を征服え給わん。三四汝の舌を用いるに早まるなかれ、また汝の業をなす
三五　に弛緩と遺漏とあるべからず。三五汝の家の者を悩まし、汝の下なる者を虐げ
三六　汝の家にありて獅子の如くなるなかれ。三六汝の手を、受くる時に差伸べ、与
うる時に閉ずべからず。

15）二五節参照。
16）裁判官あるいは裁く権を有するその他の人が、汝を取り調べる時、いつわりの弁解をするな。

# 第五章

富を恃むべからず、僭越の振舞をなすべからず、舌を慎しむべし

一　不義の所有物に心を留むるなかれ、また「我には充分に生涯の備えあり。」と云うなかれ。蓋は報復の時、患難の時には何の用をもなさざるべければなり。1)

二　汝にその力ありても汝の心の慾望に順うなかれ、2)

三　また、「わが力あることといかばかりぞや。」もしくは「誰か能く、わが行為に対して、我を制するを得んや。」と云うなかれ。蓋は天主必ず報復し給うべければなり。

四　「我は罪を犯せり、されどいかなる災厄にか逢いたる。」と云うなかれ。蓋は至高者は気長に在せども報復し給えばなり。3)

五　罪の赦されたるに全くは安んずるなかれ、しかして罪に罪を累ぬるなかれ。4)

六　云うなかれ、「主の御憐憫は大いなり。彼はわが罪の多きをも憐み給わん。」と。5)

七　蓋は憐憫も忿怒も、彼より来るは速かにして、その御忿怒は罪人等を見守れるが故なり。6)

八　主に立帰るを猶予するなかれ、

第五章　1)一〇節参照。―2)他人の権利を無視して。―3)延期は廃止にあらず　4)我々が聖寵の状態にあるかいなかを定め得るのは、我々自身でなくて、ただ天主御独りだけ　5)これは僭越であろう。―6)箴五・二一。

九　一日一日と延ばすなかれ。蓋はその御忿怒は俄に来りて、彼報復の時に汝
一〇　を亡ぼし給うべければなり。一〇不義の財に憬れて心を労するなかれ、蓋しそ
一一　は患難の日報復の日に、汝を益することなからん。[7] 一一あらゆる風に吹きま
わさるることなかれ、あらゆる道を行くことなかれ。実に罪人はいずれもか
一二　くなして、その二枚舌[8]を知られたるなり。一二主の道と、汝の真理と認め
一三　たる所と、知識とに確く立ちて、平和と正義との言を汝に伴わしめよ。一三曉
一四　るを得んため柔和しく言を聴き、智慧をもて真の答をせよ。一四汝もし曉る力
あらば、他人に答えよ。されど然らずば、汝の口に手を当てよ、是、思わざ
一五　るに分別なき言を出して、恥辱を得ざらん為なり。一五思慮ある者の言には誉
一六　と栄とあり、されど思慮なき者の舌は躬を滅ぼす。一六告げ口する者と称ばる
一七　ることなかれ、また汝の舌に躓かされて、失敗することなかれ。一七蓋し、盗
人[9]には恥と後悔と来り、二枚舌には最悪しき評判立ち、また告げ口する人
一八　には憎悪と、怨恨と、恥辱とかかるなり。一八小なる者にも、大なる者にも、

7) 箴一一・四、二八。
8) ある時はそう言い、別な時には別なことを言うこと
9) 悪しざまに言うことで、他人の名誉を奪う人。

同様に正義をなせ。

## 第六章

### 真の友と偽りの友——智慧の効果

一 他人に対して、友となる代りに敵となるなかれ。悪しき者は非難と侮辱とを受くべく、

二 嫉み、二枚舌を使う罪人はいずれも皆然り。

三 汝の心に牡牛の如く思い上るなかれ、然らずば、[1]汝の徳、愚かさによりて徒労となり、汝の葉を喰い、汝の実を亡ぼして、汝は荒野にある枯木の如く取り残さるるに至らん。

四 実に悪しき霊魂は、その持ち主を亡ぼし、之を敵の笑柄となし、且之を不敬なる者の類に墮せしむべし。[2]

五 柔和しき言は友を殖やし、敵をも宥む。鄭重なる話しぶりは善き人に多くの好果を齎す。

六 多くの人と和ぎ睦め、されど汝が事を諮る者は、千人の中にただ一人たるべし。

七 汝もし友を得んとせば、試みたる後に之を得よ。容易く之を信ずるなかれ。

八 蓋し、己が利を図る一時的の友あり、かかる者は患難の日には留まらざるべし。

第六章
1) 羅一二・一六。腓二・三
2) 「かつ之を不敬なる者の類に墮せしむべし」という語はギリシヤ語本にない

九　九また翻りて敵となる友あり、あからさまに憎み、争い、罵
一〇る[3]友あり。一〇また食卓を共にしながら、患難の日に留まざ
一一る友あり。二友もし節を守ること堅くば、これを汝にとりて己
　　自身の如くにし、彼をして汝の家人に対し、遠慮なく振舞わ
一二しむべし。[4]一二彼もし汝に対して卑り、汝の面前より身を隠さ
一三ば、[5]一三汝には心合いたる善き友情あるなり。一三汝の敵より遠ざ
一四かれ、また汝の友にも用心せよ。一四忠実なる友は堅き防禦な
一五り。之を得たる者は宝を得たるなり。一五忠実なる友に比ぶべき
　　ものは絶えてあらず、いかなる重さの金銀も、その忠実の善き
一六には値せず。一六忠実なる友は生命と不滅との妙薬[6]なり、主を
一七畏るる人々之を得べし。一七天主を畏るる者は、同じく善き友情
一八を有すべし、そはその友も彼の如くなるべければなり。一八子よ、
　　汝の若き時より教訓を受けよ、さらば白頭に至るまで智慧を得

3) 汝の恥辱となるような汝の弱さと欠点を。
4) 彼が汝の下僕達を自分のもののように見なすことを許せ。―5) 真の友人はこちらに主役を勤めさせるため自分は脇役にまわる。ギリシャ語本では一一節は「汝が順調なる間は、彼も汝の如くにして汝の家人と交る」。一二節は「されど不幸汝を見舞えば、彼は汝に背を向け、汝の目の前には最早現れず」。―6) この世後の世に対する助け。

一九　ん。一九耕し且種播く者の如くにしてこれに近づき、その好果を待て。

二〇　二〇蓋し、汝その耕作には労すること少くして、7)速にその果を食するを

二一　得べし。二一無学なる人々には智慧の不快なることいかばかりぞ。されば

二二　心なき者は之が許に留まらじ。二二これは彼等にとりて重き試し石8)の如

二三　くなるべし、されば彼等は程なく之を抛たん。二三実に教の智慧はその名

二四　に応わしけれど、9)多くの人に明らかならず。されど之を知りたる者に

二五　ありては、これは天主の御眼前に至るまで永続するなり。二四子よ、聴き

二六　て賢き忠告を受けよ、わが勧告を斥くるなかれ。二五汝の足をこれの足枷

二七　に、汝の頸をその鎖に入れよ。二六汝の肩を低くして、これを負え。その

二八　絆を嘆くなかれ。二七汝の心を尽してこれに近づき、汝の力を尽してその

二九　道を守れ。二八これを探ねよ、さらばそは汝に顕わるべし。しかして汝之

三〇　を捉えなば、放すなかれ。二九蓋は汝最後に至りて、之により安息を得べ

　　く、そは変じて汝の喜悦となるべければなり。三〇かくて汝の為にその足

7) 得られる好果に較べれば、智慧に近づく労など些々たるもの

8) 若者の力試しによく重い石を持ちあげさせた

9) ヘブレオ語の用法では、この語が「智慧」と「祕密」とを意味することがある。多くの人には智慧は神秘な教のように不可解。

三一　梏は強き保護物、堅き基となり、その鎖は光栄の衣とならん。三二実に人生の美
三二　はこれにあり、その絆は益ある繋縛なり。三三汝之を着て光栄の衣となし、之を
三三　躬に戴きて喜悦の冠10）となすべし。三三子よ、汝もし我に意を留めんとせば、学
三四　ぶならん。しかして汝の心を用いんには、汝賢き者となるべし。三四汝もし耳
三五　を傾けんには、教訓を会得すべく、聴くことを好まば賢き者となるべし。三五思
　　慮ある長老等の集える中に立ちて、心より彼等の智慧に与せよ、そは汝が天主
　　の語り給う所を悉く聴き得て、讃うべき箴言を逸することなからんためなり。11）
三六　三六また汝もし思慮ある人を見ば、朝未明にその許に行き、汝の足もてその門口
三七　の階段を踏み耗らすばかりなるべし。三七汝の思念を天主の御掟に潜め、及ぶ限
　　り絶えずその御誡命を考えめぐらせ、さらば彼汝に心を賜い、智慧を望む念
　　汝に与えられん。12）

10）本一・一一およびその註参照。
11）本八・九。
12）詩一・二。

# 第七章

## 宗教上及び道徳上の義務

一 悪しき事をなすなかれ、さらばそは汝を襲わざるべし。二 義しからぬ者より離れよ、さらば悪しき事汝より離れん。三 子よ、不義の畦に悪の種子を播くなかれ、さらば汝その七倍を刈り取ることなからん。1) 四 人の上に立つことを主に求むるなかれ。また名誉の位を王に求むるなかれ。五 汝、天主の御前にて己を義しとするなかれ、そは彼心を知り給えばなり。また王の前にて智者と見せんとするなかれ。2) 六 汝力もて不義を挫く能わざるに、裁き人たらんと努むるなかれ。然らずば恐らくは汝権勢ある者に面して怖じ懼れ、汝の公平を害うことあらん。七 市の民衆に対して不義をなすなかれ、民の中に身を置くなかれ、3) 八 また二重の4) 罪に陥るなかれ、蓋は一つたりとも罰せられざるはなきを以てなり。5) 九 汝心に臆するなかれ。6)

第七章 1) 聖書に隨分度々使われている譬喩。百四・八。箴二二・八。加六・八など参照。 2) 百九・二。伝七・一七。路一八・一一。 3) へつらいや不当な要求に対する譲歩によつて。 4) 非行を繰り返せば、ますます罰を受くべきものとなる。 5) 本一二・七。 6) ギリシヤ語本「なんじの祈り

一〇　一〇祈ることと、施与をすることとを、なおざりにするなかれ。二云
一一　うなかれ、「天主はわが供物の多きをみそなわさん、わが最高き天
一二　主に献ぐる時、彼わが供物を受納め給わん。」と。一三心に苦しめる
一三　人を嘲笑うなかれ。蓋はすべてをみそなわして、低うしまた高うし
一四　給う天主在せばなり。7)　一三汝の兄弟に対して虚偽を構うるなかれ。
一五　また汝の友に対してもかくの如くなすなかれ。一四いかなる虚偽をも
一六　云わんとするなかれ。かかることを繰り返すは善からざればなり。
一七　一五長老等の集える中にて多く語ることなかれ、また汝の祈る時に言
一八　を繰返すことなかれ。8)　一六労多き仕事、および至高者に定められた
一九　る農耕の業を厭うなかれ。9)　一七放埒なる者の群に加わるなかれ。
二〇　一八御忿怒10)を忘るるなかれ、そは来ること遅からじ。一九汝の心を深
く謙らしめよ、不敬なる者の肉に対する報復は火と蛆となればな
り。11)　二〇金銭を滞らしめたりとて汝の友に非道をなすなかれ、また

のうちに」。即ち汝の罪によつて祈りの時に勇気を失うな。

7) 母上二・七。

8) マテオ六・七の意味で。シラクは、口先だけの祈を排斥しようとする。祈りに重要なのは、言葉の多いことではなくて心がけである。

9) 創二・一五。

10) 天主の御罰。

11) 蓑五六・二四。および可九・四五と比較せよ。

二一　黄金の為に愛する兄弟を軽蔑すべからず。12）　二二　汝が主を畏れて迎えたる、汝の分別に富むよき妻と別るるなかれ。実にその淑徳の美しさは、黄金にも優るなり。　二三　忠実に働く僕や、己が生命をも献ぐる奉公人を、虐ぐるなかれ。13）　二三　思慮に富む下僕を、汝の霊魂の如く愛せよ、之に自由を与えずして己むなかれ、14）　また之を乏しきままにて去らしむるなかれ。　二四　汝に家畜ありや。之に注意し、もし益あらば之を汝の許に飼いおけ。　二五　汝に男の子等ありや。之を教え躾け、その小さき時より矯め直すべし。15）　二六　汝に女の子等ありや。その体に注意し、16）　之に晴れやかなる面を示すなかれ。　二七　娘を嫁がしめよ、さらば汝は大事を成したるなり。但之を思慮ある人に与えよ。　二八　汝の心に適える妻あらば、之を捨つるなかれ。されど厭わしき者には身を任するなかれ。17）　汝の心を尽して、二九　汝の父を敬い、また汝の母の嘆息を忘るべからず。18）

12）ギリシャ語本は「友を金銭と、兄弟をオフイルの黄金と、引替えにするなかれ。」オフイル産の黄金は最も純粋で貴重とされていた　13）利一九・一三。　14）出二一・二にある規定。―　15）我儘を抑える教育。―　16）純潔に暮らす教育。―　17）賢人はただ、離婚の権利を使わないこと（二一節参照）従つて結婚する時用心すべきことをすすめるだけ。―　18）土四・三。

三〇　三〇汝彼等によらずしては生れざりしことを記憶し、その汝に爲したる如く、之に報いよ。三一　汝の霊を尽して主を畏れ、その司祭等を敬え。

三二　三二汝の力を尽して、汝を作り給いし者を愛し、その僕等を棄つるなかれ。

三三　三三汝の霊を尽して天主を崇め、司祭等を敬い、肩もて己が身を潔めよ。19)

三四　三四汝に命ぜられたる如く、初穂と潔めの牲との中より、彼等にその分を与えよ、また汝の怠慢に対しても、少しく献げて己を潔くせよ。20)

三五　三五汝の納むる肩と、潔めの犠牲と、聖物の初穂21)とを、主に献げよ。三六　また汝の償いと祝福との全からんために、貧しき人に汝の手を伸べよ。三七　すべての生ける者の眼前に恵を施せ、また死せる者にも恵を惜しむなかれ。

三八　三八泣く人々を慰むるに吝かならざれ、また嘆く人々と共に歩め。22)　三九　病める者を見舞うことを怠るなかれ。蓋し是等の業によりてこそ、汝の愛は固めらるるなれ。23)　四〇　いかなる事をなすにも、汝の終焉24)を憶え、さらば汝永久に罪を犯すことなからん。

19) 申一八・三。
20) 汝が富者の供物をささげることができないなら。—利二・三
21) 「潔めの犠牲—聖物の初穂」とは、ナザレ人の誓願をさす。民六・二—二一参照。—22) 羅一二・一五。
23) マテオ二五・三六。—24) 公教要理第一部はこのすすめで終ることが多い。

# 第八章

智と徳とに関する種々の教訓

一　一権勢ある人と争うなかれ、然らずば恐らくは汝その手に陥らん。

二　二富める人と諍うなかれ、然らずば恐らくは彼汝に対して訴訟を起さん。[1] 三蓋は金銀は多くの人を滅ぼし、王の心にまで至りて、之を変うればなり。[2] 四弁舌の巧みなる人と争うなかれ、これ彼が汝の一族のこうるなかれ。[3] 五無学なる人と交わるなかれ、これ彼が汝の一族のことを悪しざまに云わざらんためなり。[4] 六罪より離れたる人を蔑むなかれ、また之を責むるなかれ。我等はみな懲らしめらるべき者なることを憶え。[5] 七人の年老いたるを軽んずるなかれ、[6] 実に我等の中にも、老ゆる者あるなり。八汝の敵が死せるを喜ぶなかれ。我等も皆死し、人の之を喜ぶを欲まざることを知れ。九賢き長老等の談る所を軽んぜずして、その箴言を思いめぐらすべし。[7] 一〇蓋は汝彼

第八章　1) マテオ二五・二六。—2) 本三一・六。—3) 汝の語る所は、彼にとつて新しい話の種となる　4) 汝が悪くならないように。汝がそうなれば、教育の仕方が悪かつたからとて、汝の父母の恥辱になる。—5) 哥後二・六。加六・一。—6) 利一九・三二参照。　7) 本六・三五。

一一　等より、智慧と了悟の教と、不平なく大なる者に仕うることとを学ぶべけれ
一二　ばなり。一二長老等の談る所を聴き遁すなかれ、蓋は彼等その父祖より学びた
一三　るにて、一三汝彼等より了悟と、必要なる時に答を与うることとを学ぶべけれ
一四　ばなり。一三罪人等を責めて、8）その炭を燃やすなかれ、また汝彼等の罪の火
焔に燃やさるるなかれ。一四中傷を好む者に面して逆らうなかれ、これ、彼
一五　が汝の口によりて、汝を陷れんとする者の如く坐することのなからんため
一六　なり。9）一五汝より権勢ある者に貸すことなかれ、もし貸したらば、失いたる
一七　ものと見なせ。10）一六汝の資力に超ゆる保証をなすなかれ。もし保証をなしたら
一八　ば、己が返すべきものと思え。一七裁判官を是非するなかれ、彼は義しきに
一九　循いて裁けばなり。11）一八向う見ずなる者と道連れになるなかれ、恐らくは彼
汝に累を及ぼさん。即ち彼は己が欲するままに行き、汝は彼の愚かさにより
て共に滅びん。12）一九怒り易き人と争闘をなすなかれ、また向う見ずなる者と
荒野に行くなかれ、彼にとりては血は物の数にもあらざるにより、助くる者

8）ヴルガタ訳の附加した言葉。
9）本章四節参照。
10）本二九・四。
11）彼が正当に判定するものと仮定してある。
12）創四・八。

二〇 なくば、彼汝を打ち倒さん。13) 二〇愚なる者に事を諮るなかれ、
二一 彼等は己が心に適う事にあらずば、愛する能わざるなり。
二二 三見知らぬ人の前にて相談するなかれ。14) 汝は彼の何事を惹
二三 起すかを知らざれば なり。三相手を択ばず、汝の心を打明く
るなかれ、恐らくは彼汝に仇を以て報い、汝を悪しざまに云
うことあらん。15)

## 第九章

女性及び危険なる会話に関する注意

一 一汝の胸に倚る女1) に対して嫉妬するなかれ、これ、彼女
が汝の悪しきに倣い悪意を汝に対して示さざらんためなり。2)
二 二女に汝の心を支配せらるるなかれ、これ、その汝の権に干
渉して、3) 汝に恥辱を蒙らしむることなからんためなり。
三 三多情なる女を顧るなかれ、恐らくは汝その係蹄に陥らん。

13) 箴二二・二四。—14) ギリシヤ語本「見知らぬ人の面前にて祕密なる事を相談するなかれ」。—15) 本章もギリシヤ語本では節数が少く、十九節しかない。

第九章 1) 汝の妻。2) 貞節を疑うような譴責をすると、妻を怒らせ、実際にその罪を行わせる懼がある。—3) 夫は天主の御定めによつて、家長である。

四　舞姫[4]とあまり交わるなかれ、また之に耳をかすなかれ、恐らくは汝

五　その手管に身を滅ぼすことあらん。処女に見とるるなかれ、[5]恐らく

六　は汝その美しきに躓かさるることあらん。[6]娼婦に些かも汝の魂を奪

七　わるるなかれ、これ汝が己が身をも嗣産をも滅ぼさざらんためなり。

八　城市の往来にありて四囲を見まわすなかれ。またその巷を宛もなくさ

九　まよい歩くなかれ。八　着飾りたる女には汝の面を背向けよ、また見知ら

一〇　ぬ女の眉目美きに見とるるなかれ。[7]九　女の眉目美きには、身を滅ぼした

一一　る者多し、[8]また之によりて情慾は火の如く燃え熾るなり。一〇　娼婦たる

一二　女はいずれも皆路の上の糞土の如く踏まるべきなり。一一　他所の女[9]の眉

一三　目美きに心を奪われて、墮落したる者多し。蓋はその会話は火の如く燃

一四　やせばなり。一三　他所の女と決して座を共にするなかれ、また之と酒宴の

一五　席[10]に肘突きて身を横たうるなかれ。一四　なお葡萄酒を飲み乍ら之と言を

一六　交わすべからず、恐らくは汝の心彼女に傾きて、汝己が血の為に[11]滅亡に

4) 舞姫は昔においても放埒な生活をするという評判を取っていた。―5) 百三一・一参照。
6) 創六・二。
7) 創三四・二。母下一一・四。一三・一。マテオ五・二八。
8) サムソン、ダヴィド、その他例証は沢山ある
9) 妻でない女。
10) 休息するために寝そべる長椅子。―11) ギリシ

一四　陥ることあらん。一四旧き友を捨つるなかれ、蓋し新しきは彼の如くならじ。一五新しき友は新しき葡萄酒なり、古くなりて始めて味わいよく飲むを得べし。一六罪人の栄と富とを羨むなかれ。いかなる破滅彼に来るべきか、汝之を知らざればなり。12)

一七　不敬なる者の黄泉に至るまでも嘉せられざるべきを知りて、義しからぬ者の非道を悦ぶなかれ。13)

一八　殺す権ある者より遠ざかりてあれ、さらば汝死の懼れなきかとの疑いに悩まさるることあらじ。一九また汝もし彼に近づかば、いかなる慾をも犯すなかれ。恐らくは彼汝の生命を奪うことあらん。二〇死の近きを知れ、汝は係蹄の只中を行き、悲しめる者14)の武器の上を歩みつつあればなり。二一汝の能う限り用心して汝の隣人を避け、智慧ある者、思慮ある者と相談せよ。二二義しき人々を汝の客とし、天主を畏ることを汝の誇りとせよ。二三また汝の精神にて天主を思い、凡て汝の談話を至高者の御訓諭に向けよ。二四工芸品は工人の手によりて、民の侯等はその言の賢きによりて、また長老等の言は思慮深きに

ヤ語本「汝の情慾により て」。―12)士九・三五。母下一五・一〇。

13)かれらの懲罰は、死なぬ内すでにこの世から始まる

14)負傷者および戦死者。ギリシャ語本「汝は（囲まれたる）町の周壁の上を歩む」。

二五　よりて、賞讃を博せん。二五弁舌の巧みなる者はその城市にて畏るべき者たり、言の軽卒なる者は厭うべき者たるべし。5)

## 第十章

権力ある人々の善徳悪徳——傲慢の甚だ悪しきこと

一　一智ある裁判官その民を裁くべし、思慮深き者の支配は動揺なか
二　るべし。二民を裁く者の如く、その臣僕等も亦然り、城市を治む
三　る者の如何なるかによりて、その中に住む者も亦然り。1)三賢なら
四　ざる王はその民を滅ぼすべく、治むる者の思慮深きによりて諸市
五　に住民満つべし。2)四地を治むる権は天主の御手にあり、彼好き時
六　に有能なる支配者をその上に起たせ給わん。五人の繁栄は天主の
七　御手にあり。彼その尊厳を書記3)の面に置き給わん。六汝他人の
いかなる不正をも心に留むべからず、また不正の所為もて何事を
も行うなかれ。七傲慢は天主にも人にも嫌わる、また国国の民の

15)本章はギリシヤ語本では十八節しかない。

第十章　1)箴二九・一二。—2)王上一二・二一三。—3)ここでは役人という一般的な意味。

八　不義は、悉く憎むべし。八支配権がこの民よりかの民に移るは、不義、
九　不正、非道、及びさまざまの欺瞞の為なり。4)九されど貪慾なる者より罪
一〇　深きはなし。土と灰と何とて高ぶるや。一〇金銭を愛するより悪しきことはなし。実にかかる者は己が霊魂までも売物となす、そはその生ける間に己が臓腑を投げ捨てたればなり。5)一一権力はすべて命短し。長き病は医師を悩ます。6)一二医師は短き病を根治す、王も亦かくの如く、今日ありて明日死すべし。一三それ、人死するや、蛇、獣、及び蛆を受けつがん。一四人の傲慢の始めは天主を離るることなり。7)一五即ちその心が己を造り給いし者より離るることなり。あらゆる罪の元始は傲慢なれば、之に止まる者は呪詛に満たさるべく、そは終に彼を滅ぼすに至らん。8)
一六　一六この故に主は悪しき者の集団を恥かしめて、彼等を全く滅ぼし給いしなり。一七天主は高ぶる侯等の位を覆して、彼等の代りに柔和なる者を
一八　坐せしめ給えり。一八天主は傲慢なる国民の根を枯らして、是等の国民の

4) 但四・一四。
5) 金をもうけるためには、いかなる危険をも冒す。―6) 人間は死後土になるばかりでなく、まだ生きている内にも滅びに襲われることがある
7) 人間が天主の御旨よりも自分の意志を先にして。―8) 箴一八・一二。

一九　中の謙遜なる者を植え給えり。9）一九　主は異邦人等の国々を覆して、之をその基まで滅ぼし給えり。二〇　彼は是等の中の或ものを枯らし、之を亡ぼして地上よりその記念を絶やし給えり。二一　天主は傲慢なる者の記念を滅ぼし、心根謙遜なる者の記念を遺し給えり。10）二二　傲慢は人の為に造られたるにあらず、憤怒は女より生れし者の為に造られたるにあらず。11）二三　天主を畏るる人々の裔は誉を得べし、されど主の誡命を破る者等の裔は恥辱を蒙るべし。二四　兄弟等の中において、その長は敬うべき者なり、主を畏るる者の御眼に映ずる所も亦かくの如し。二五　富める者、誉ある者、また貧しき者の誇りは、主を畏るることなり。二六　義人の貧しきを蔑むなかれ、罪人の富めるを崇むるなかれ。二七　偉なる者、裁判官、及び権力ある者は敬わる。されど天主を畏るる者より偉なるはなし。二八　思慮深き奴隷には自由なる者等も仕えざるべからず、聰明にして躾よき人は懲戒を受くるも呟やかじ、無知なる者は敬わるることなからん。12）二九　汝の業をなして思い上るなかれ、

9）詩四三・三参照。―10）サムエルの母も同様なことを言つた。母上二・八を見よ
11）この憎むべき悪を始めたのは、人間自身であつて天主ではない。
12）箴一七・二

三〇 また患難の時にたゆとうなかれ。13) 三〇働きてすべてに豊かなる者は、
三一 誇りてパンに事缺く者にまさる。14) 三一子よ、汝の霊魂を温和に保て、
三二 その価値に応じて之を尊重せよ。15) 三二己が霊魂に逆らいて罪を犯す者
を、誰か義とせんや。己が霊魂を恥かしむる者を、誰か尊ばんや。
三三 三三貧しき者のその躾けと敬畏とによりて尊ばるるあり。またその富ゆ
三四 えに尊ばるる人あり。三四されど貧しくして尊ばるる者、もし富あらば
更にいかばかりぞ。富めるによりて尊ばるる者は、貧を恐れよ。

## 第十一章

万事に謙遜と中隔とを守るべきこと

一 謙遜なる者の智慧はその頭を抬げしめ、之を偉なる人々の中に坐せ
二 しむべし。1) 二眉目美しとて人を讃むるなかれ、また外観によりて人を
三 侮るなかれ。2) 三蜂は飛ぶものの中にて小さけれども、その生産す物は
四 甘さ此上なし。四いかなる時にも汝の衣服を誇りとすべからず、また

13) 困る時には、どんなに身分の高い人でもぐずぐずせず、働くべきである。 14) 箴一二・九。 15) 謙遜と正しい自尊心とは、両立しないものではない。

第十一章 1) これに対する例は、エジプトのヨゼフとダニエル。 2) 母上一六・七。

汝の栄誉を受くる日に思い上がるべからず。感ずべきはただ至高者の御業のみにして、しかもその御業は赫々たれども隠れて見えざればなり。3)

五　意の侭に振舞う君主数多位に即きたり、また思いもかけざる者王冠を戴きたり。4)

六　権勢ある者数多いたく屈辱を受けたり、また栄ある者他人の手に付されたり。5)

七　問い糺さぬ間は、何人をも咎むるなかれ、問い糺したる後当を得たる譴責を与えよ。

八　聞き終らぬ間は、一言も答うるなかれ、また他の談話を遮るなかれ。6)

九　汝に関係なき事に就きて争うべからず。

一〇　子よ、多くの事業にあらず、また審判の時罪人と座を共にすべからず。

一一　携わるなかれ、汝もし富みたらんには、責を免かれざらん。蓋し、汝追えども追いつかず、逃ぐれども遁るるを得じ。7)

一二　苦しみながら、天主を蔑する故に、却つて益々窮乏に陥る人あり。8)

一三　また気力なくして援助を求め、甚だ才能に乏しく、赤貧に沈める人あり。

一三　されど天主の御眼は仁慈もて之をみそなわし、彼を卑賤より起し

3) 哥後一〇・一〇。雅二・二。徒一二・二一、二二。　4) ダヴィドが召されたことを思い合わせよ。―　5) 母上一五・二八。帖六・七。―　6) 箴一八・一三。

7) 賢人はあまり多くの事に同時に着手しないようにいましめる。―提前六・九。

8) 伝四・八。

てその頭を抬げしめ給えり。されば多くの人之に感嘆して、天主を誉め奉れり。一四 吉凶も、生死も、貧富も、天主より来る。9)

一五 智慧も、規律も、律法の知識も、天主の御許にあり。愛も、善人の道も、その御許にあり。10)

一六 迷妄と暗黒とは、罪人と共に創造られたり。11) また悪事を喜ぶ者は悪の裡に老いん。12)

一七 義人には天主の賜物恒に存す。彼より出るものは永遠の好果を收めん。一八 節約して富を致す者あり、之彼の報賞の分にして、一九 すなわち彼は云う、「我わが為に安息を得たり、今こそ我独り己が財産によりて食わめ。」と。二〇 しかして時の過ぎ行き、死の近づきて、他の一切を遺したるまま、13) 死せざるべからざることを知らず。二一 汝の契約を守り、14) 之に鑑み、汝に命ぜられたる所を行いつつ老いよ。二二 罪人

9) 百四二・一〇。―10) 百一・二一

11) 罪の結果かれらに附き纏つて離れない。―12) 一五、一六両節はギリシヤ語本になし。―13) 自分ではそれを受用せずに。路一二・一九参照。―14) ラテン語 testamentum は或人は天職と訳す。即ち一度天職を選んだ以上は、たとい自分が苦労の多い生活を送らなければならぬのに、悪をなす者が財物に恵まれているのを見ても、忠実にそれを守るべきである。また他の人々、例えばフイリオンは alliance アルンントは Bund と訳しイスラエル人が天主と、天主がかれらと互に結んだ契約をさすと解している。

二三　等の所行に執着せずして、天主に依頼み、汝の地位に留まれ。二三夫れ、
二四　貧しき者を忍ちにして富ましむるは、天主の御眼に易きことなり。二四天主
二五　の御祝福は義人に報いん為疾く来り、その降るや速かに実を結ぶ。二五云う
　　なかれ、「我に何の要ありや。また今より後我に如何なる幸福ありや。」
二六　と。二六云うなかれ、「我には我独りにて足れり、今より後何の不幸かあら
二七　ん。」と。二七幸福の日には不幸を忘るるなかれ、不幸の日には幸福を忘る
二八　るなかれ。15) 二八蓋し、死する日において、人各々にその道に応じて報ゆる
二九　は、天主にとりて易きことなればなり。16) 二九一時の不幸は大なる安楽をも
三〇　忘れしむ、人の終焉にはその所行露れん。三〇死せざる間は何人をも讃むる
三一　なかれ、これ、人はその子女によりて17) 知らるればなり。三一あらゆる人を
　　悉くは汝の家に導きいるるなかれ、蓋は欺く者の陥いれんとすること多
三二　ければなり。三二実に高ぶる者の心は胃の腐りて悪臭を発する如く、鵂鶹の
　　籠に入れらるる如く、小鹿の係蹄にかかる如くにして、また窺う者がその

15) 本一八・二五。―16) 死の日から、天主はこの世でその御正義に添わないように見えていたことを、直し始め給う。
17) かれがかれらに与えた教育と模範とによつて。

三三 近き者の倒るるを見守る如し。18）三三即ち彼は陰に謀りて善きを悪しきに転えんとし、選まれたる者にも玷をつけんとするなり。三四ただ一つの火の子より火事となることあり、ただ一人欺く人ある故に多くの血を流すに至ることあり、かく罪を犯す人は密に血を流さんと謀るなり。三五悪人に用心せよ、蓋は彼悪事を企めばなり、恐らくはその汝に幾久しき恥辱を齎すことあらん。三六汝もし己が許に他所者19）を入れなば、彼紛糾を起して汝を陷いれ、汝の所有物を奪い取らん。

18）ギリシヤ語本「高ぶる心はかごのなかのおとり、の鷸鴟の如く、また滅びを窺い待つ見張る者の如し」。他の譬喻はギリシヤ語本になし。

19）「他所者」とはイスラエル民族でない者。かような者と一緒にいて親しくすることは、天主に対する忠誠を危うくする懼れがあるので、禁じられていた。

## 第十二章

義人に善をなすべく、悪人を信頼すべからざること

一 汝善を行う時には、その行う相手の誰なるかを知れ、さらば汝の善行は大いに感謝せらるべし。二義人に善をなせ、さらば汝大なる報酬を得ん。たとい其人よりにあら

三　ずとも、1) 主よりは必ず之を受けん。三 蓋し、悪にいそしむ者2) と施与をなさざる者3) とには善き事なし、そは至高者は

四　罪人を憎み、悔い悛めたる者を憐み給えばなり。四 憐憫深き人に与えよ、されど罪人をば扶助くるなかれ。主は不敬なる者と罪人とに仇を復し給うべきも、報復の日まで彼等を保存し給わん。4)

五　五 善人に与えよ、されど罪人をば顧みるなかれ。5) 六 謙遜なる者に善をなせ、されど不敬なる者には与うる

六　なかれ。彼にパンを与うることを差し控えよ、そは是により

七　てその汝よりも強くなることなからん為なり。七 蓋し、汝かかる者にいかなる善をなすとも、6) その三倍の悪を得べし。

八　実に至高者は罪人を憎み、不敬なる者に仇を復し給わん。

八 順境にありては友を知る能わず、逆境にありては敵隠

九　るる能わず。九 人の順境にある時その敵悲しみ、逆境に

**第十二章**　1)その人が報いることができないか、またはそうする前に死んでしまつたために。―2)記者は悪人が善人の恩惠を悪用して恩人に害を与えようとすると仮定している。―3)ギリシャ語本「恩に対して感謝せざる者」。以下はギリシャ語本になし。―4)加六・一〇。―5)罪人もわれらの兄弟であるから、やはり愛すべきである。しかし罪人であるが故を以て、依然罪に留まらせるために、人を助けてはならない。―6)汝は恩に仇を以て報いられるであろう。

一〇　ある時その友知らる。一〇汝の敵をいつまでも信ずるなかれ、蓋はその悪
一一　意銅の錆ぶる如くなればなり。7）二たとい彼謙り身を屈めて歩むと
一二　も、汝意を用い、慎しみて之を避けよ。一二彼を汝の傍に立たしむる
なかれ、また汝の右に坐せしむるなかれ、恐らくは彼汝の地位を窺い、汝
の座を奪わんと図るに至りて、終に汝わが言に思い当る所あり、わが談
一三　話に胸を刺さるることあらん。一三誰か魔術師の蛇に咬まるるに、またす
べて野獣に近づく者に、同情せんや。義しからぬ人と交わりて、その罪
一四　に捲きこまるる者も亦かくの如し。一四彼は一時汝と共にあらん、されど
一五　汝もし下り坂に向かわば、彼は踏み止まらざるべし。一五敵は唇もて甘き
一六　言を語れども、心にては汝を穽に陥れんと陰に謀るなり。8）一六敵は眼より
一七　涙を流せども、時を得ば血に飽かざるべく、一七災厄汝に臨む時は、汝そ
一八　こに先ず彼を見出すべし。一八敵は眼より涙を流せども、助くる如く見せ
一九　かけながら、汝の足の下を掘るべし。9）一九彼は頭を振り、手を拍ちはや

7）ギリシャ語本「かれに対しては、さびたる鏡を拭う如くにせよ。」昔の鏡は金属であつたから、錆の出ることがあつた。
8）耶四一・六、七。
9）かれは汝を倒して汝のほろびを図る。

し、さまざまのことを呟きて、その顔を変えん。10)

## 第十三章

仲間を選ぶ為の注意など

一　一瀝青に触るる者は之に穢され、高ぶる者と交わる者は
二　傲慢に陥らん。1) 己より貴き者と交わる者は躬に重荷2)
三　を負わん。また汝より富める者と附き合うなかれ。三土
四　鍋いかにして鉄釜に敵するを得んや。3) 蓋し衝き当たら
　　ば、粉々に砕けん。四富める者は不義を行いて、しかも
五　なお咆え猛らん。4) されど貧しき者は虐げられて、しか
五　もなお沈黙を守らざるべからず。五汝物を贈らば、人汝
六　を用うべく、汝有たざる時は、人汝を見棄てん。六汝の
七　有てる時は、人汝と共に生活して、汝を裸にし、しかも
七　なお汝の為に嘆くことなからん。七人己に汝の必要なる

10) 前に泣いたのに、今度は喜ぶ。

第十三章 1) induet superbiam は直訳すれば「傲慢を着る」。ギリシャ本は「彼に似たる者とならん」。―申七・二。―2) 自分の力にとつて重すぎる負担。―3) ギリシャ語 ζυγόν は土の鍋、λεβής は鉄の鍋か釜。―4) しかしそれが気になるので、激怒に陥る。

八　時は、汝を欺かん。即ち笑顔を作りて希望を与え、汝に善きことを語りて云わん、「汝何をか要むる」と。八しかして珍味により汝を誘惑わし、かくて汝よりその二三倍を奪い取るに至り、5)終には汝を嘲笑わん。その後

九　は彼汝を見るや離れ去り、汝に向いてその頭を振らん。6)九天主に対して謙

一〇　り、その御手を待ち望め。一〇汝誘惑わされて愚なる所行をなし、恥辱を蒙

一一　ることなからんため為に用心せよ。一一汝の智慧を低く見ることなかれ、これ汝

一二　が他に制せられて、愚なることに誘われざらんためなり。一二汝もし権勢優

一三　れる者より招かるることあらば、辞退せよ。蓋は彼是によりてますます汝

一四　を招くべければなり。一三厚かましく押しかくるなかれ、これ、汝が逐いは

一五　らわることなからんためなり。また彼より遠ざかるなかれ、これ、汝の

一四　忘れらることなからんためなり。一四彼と対等に語らんと欲するなかれ、

一五　またその多くの言を信ずるなかれ。蓋は彼多く語りて汝を試験し、微笑み

一五　て汝の秘密を探り出さんとすればなり。一五その苛酷き心は汝の言を蓄え、

5) 貧しい者は狡猾な金持から、美酒の杯を貰わないよう、始終気をつけなければならない、あとで二倍も三倍もこき使われるから。

6) ばかにして　本一二・一九参照。

一六　彼容赦なく汝に不義をなし、また鉄鎖に繋がん。一六汝、己を慎しみ、汝の聞くところに努めて注意せよ。そは汝己が滅亡の際を歩みおればなり。一七汝何事かを聞かば、恰も夢の如く見做して、警戒すべし。一八汝の生くる日の限り天主を愛し、彼を呼び奉りて汝の救霊を求めよ。一九いずれの動物も己が同類を愛す、7)かくの如くいずれの人も亦己に近き者を愛す。二〇あらゆる肉ある物は己が同類と結び、あらゆる人も己が同類と交わる。二一いつの時にか狼の小羊と交わることあらんや、罪人も亦義人と然らん。8)二二聖なる人9)なんぞ犬と交わることあらんや。富める者貧しき者に何の関係あらんや。二三荒野の野驢馬は獅子の獲物なり。かくの如く貧しき者もまた富める者の食い物なり。二四謙遜は傲慢なる者に憎まる、かくの如く、貧しき者もまた富める者に忌み嫌わる。二五富める者よろめかばその友に支えられん。されど貧しき者倒るるやその知人にさえ押しのけられん。二六富める者は欺かれたりとて、之を助くる者数多あり。彼横柄に語りたれど、人々之を義しとせり。二七貧しき者

7) 自然界を見ればわかる通り、異類のものは一緒にならぬ。

8) 哥後六・一四。

9) ギリシヤ語「ハイエナ」。狼の一種

二八　は欺かるれば、なおその上に非難せらる。思慮あることを云いたりとて、之を容るる者なし。二八富める者語れば、みな默して、その云いし事を雲

二九　の辺にまで賞め揚ぐるなり。二九貧しき者語れば、人々「是は何者ぞ」と

三〇　云い、彼躓けば、彼等之を倒さんとす。三〇良心に罪なくして富あるは善

三一　し。10) また貧窮は天主を蔑する者の口にかかれば極めて悪しきものな

三二　り。三二人の心はその面相まで変えて、善くも悪しくもなす。11) 三三善き心

のしるしなる善き面は、見出すに難くして、然するに努力を要せん。

## 第十四章

### 貪慾の悪しきこと―慈善を行い智慧を愛せよとのすすめ

一　一福なるかな、己が口より出す言に過失なく、罪科の後悔に責められざ

二　る人。1) 二幸なるかな、己が心を悲しましむべきことなく、希望を絶たざ

三　る者。三貪慾にして吝嗇なる人には、富ありても益なし。また吝しむ人

四　には黄金ありても何にかせん。2) 四自ら志して不義により積む者は、他

10) 富そのものは別に悪いものではない。―11) 人は暫くの間偽り装うことができても、やがて本当の精神が心の鏡である顔に現われる。

第十四章　1) 本一九・一七。　2) かれはそれを自分のためにも他人のためにも

五　人の為に集むるなり、その財産によりて他人豪遊をなさん。五己にすら悪しき者、他の何人に善からんや。彼はその財産によりて楽しむことなかるべし。六己が為にすら吝しむ者より悪しきはなし。その悪の報いは次の如し。七彼たとい善を行うも、そは知らずして、3)また厭々ながら行うなり。八かくて彼終に己が悪しきことを曝露すに至る。八吝しむ者の眼は悪し。彼はその面を背けて、4)己が魂を軽んず。九貪慾なる者の眼は不義の分に飽くことなし、彼は己が霊魂を枯らし尽すまでは飽くことなかるべし。一〇悪しき眼は悪に向い、己が食卓に就きても、パンに飽くことなく、饑じげに、且悲しげなるべし。一一子よ、汝もし有てるならば、よく己が身をいたわり、応わしき供物を天主に献げよ。一二死の猶予せざること、また黄泉の定め、5)の汝に示されたることを憶え、蓋は人の必ず死すべきこと、是この世の定めなればなり。一三汝、死せざる間に汝の友に善をなし、汝の資力に応じ手を差し伸べて貧しき者に施せ。6)一四佳き日を空しくせず、7)汝に恵まれた

使わない。
3) 真の善はそれを行なう心がけにある。
4) かれの援助を要する者から。
5) 我々がみな死なければならないというよみの定め。
6) 本四・一。土四・七。路一六・九。
7) 天主に感謝しつつその幸福を受けよ。

一五　る好き機を些かも遁すべからず。一五汝が苦しみ骨折りて得たるものを、
一六　他人に遺して籤取りにせられざらんや。一六与うるも受くるも、汝の霊魂
一七　を義ならしめよ。一七汝死せざる間に、正義を行え、そは黄泉にありては
一八　糧8)を得ることなければなり。一八凡て肉ある者は草の如く老い朽ち、ま
一九　た青木に生い出る葉の如し。9)一九生い出るもあり、落つるもあり。血肉
二〇　ある類もまたかくの如くにして、果つるもあり、生るるもあり。二〇すべ
　て朽つべき作は終に滅ぶべく、その作者もまた之と共に失せ去るべし。
二一　二されど優れたる作はよしとせられ、その作者もまた之によりて誉を得
二二　ん。二二福なるかな、飽くまでも智慧を重んじ、10)己の義を考えめぐらし、
二三　天主のみそなわすことを心に思わん人、11)二三己が心にその12)途を考え、
　その奥義を暁りたる人、さながら追跡する者の如く13)これを追い行き、
二四　その道に踏み止まる人、二四その窓より覗き見、その戸口にて立聞する
二五　人、14)二五その家の傍に憩い、その壁に杭打ちつけて、その手近に己が小

8) この世の財産
9) 賽四〇・六以下。雅一・一〇彼前一・二四。
10) 「智慧」とはいわゆる墮落の反対で、善徳というほどの意味
11) 詩一・二。
12) 智慧の。
13) 狩人が苦心して獲物の足あとを探しつつ追つてゆくように。
14) 徳に達するためあらゆる手段を尽くす。

二六　二七

屋を建てん人。彼の小屋にはいつまでも幸息らわん。
二六 彼は己が子等をその蔭に置き、その枝の下に留まらん。二七 彼はその蔭に蔽われて、暑さを免かれ、15) その光栄の中に息わん。

15) 木の喩を続けて、詳しく説明する。

## 第十五章

智慧はただ義人のみの得る所にして悪人はこれを得る能わず

一　二　三　四

一 天主を畏るる者は善事をなさん、1) また正義を守る者はこれ2) を獲べし。二 これは敬うべき母の如く彼を出で迎え、初々しき新嫁の如く3) 彼をもてなさん。三 即ち彼に生命と悟とのパンを食せしめ、有益なる智慧の水を飲ましめん。かくてそは彼の衷に強めらるべく、彼は動かさるることなからん。4) 四 またそは彼を支えて滅ぶることなからしめ、之をその隣人等の中にて5) 高

**第十五章** 1) ギリシャ語本「この無上の宝を得るために、必要なる措置」。2) 智慧。—3) ギリシャ語 τοῦκ παρθένος「処女の妻」。—4) ここで智慧について一般に言ってあることはとりわけ永遠の智慧たるキリストの住み給う教会に当たる。教会はその子等を永遠の生命のパン（約六・三五）で養う。—5) かれら以上に。

五　き者となし、
六　霊を満たして、光栄の衣を着せん。
七　み、彼をして永遠の名を嗣がしめん。
八　慮ある人々はこれに逢うべく、愚なる人々は之を見ざらん、そは傲慢と
九　欺瞞とを離るること遠ければなり。
一〇　虚偽多き人々はこれを意に留めざるべし、されど誠ある人々はこれと共にありて、天主の御検閲[7]の時まで向上せん。
一一　九讃美も罪人の口にするは聞きよからず、一〇これ、智慧は天主より出で、天主の讃美は智慧に伴い、誠ある者の口に溢るべく、君主は彼に之を賜うべければなり。[8]
一二　二汝云うべからず、「我にこれなきは、天主の致す所なり。」と。実に彼の憎み給う所、汝之をなすなかれ。[9]
一三　三云うなかれ、「彼、我を迷わしめたり。」と。蓋は不敬なる人々は彼に要なければなり。
一四　一三主は迷妄[10]の全く厭うべき所を憎み給う。これは[11]彼を畏れ奉る者に愛せらるることなからん。一四天主は元始より

6) 愚なるとは「背徳の」というほどの意味。箴八・一三参照
7) 天主の御審判
8) 天主はかれをして智慧の賛美を宣べ伝うるを得しめ給う。
9) 汝はかれの憎み給うことをしないなら、智慧を得るであろう
10) 道徳上の迷妄即ち罪。
11) 迷妄。

一五　人を造り、之を自ら思慮(12)をなす者と定め給えり。
一六　その上彼は誡命と掟とを与え給えり。汝もし誡命を守りて、嘉せらるべき忠誠をいつまでも尽さんと欲せば、
一七　そは汝を守らん。(13)　一七　彼は汝の前に水と火と(14)を置き給
一八　えり、汝の欲する方に手を差し伸べよ。　一八　人の前には生
死、善悪(15)あり、その望むところのもの、彼に与えられ
一九　ん。(16)　一九　これ、天主は、智慧深く、力強くして、絶えず
二〇　すべての人をみそなわし給えばなり。(17)　二〇　主は之を畏れ
二一　奉る者に御眼を向け、人の所行を悉く知り給う。(18)　二一　彼
は誰にも不敬なる振舞を命じ給いしことなし、また誰に
二二　も罪を犯す許可を与え給いしことなきなり。　二二　そは彼誠
なき無用の子等の衆きは望み給わざればなり。

12) 人間の自由意志。―13) マテオ一九・一七。約八・三一、三二。
14) 従順な人々に対する大なる御約束と、悪をなす者共に対する劫罰の御威嚇と。―15) ギリシヤ語本には、善悪という語がない。―16) 耶二一・八。―17) 主はすべての業を知り給うが故に、それ相当の報いを与えることがお出来になる。
18) 詩三三・一六。来四・一三。

# 第十六章

悪しき子の多からんよりは子なきにしかず—天主の正義と憐憫とに就きて—

主の道はきわめ難し

一　汝、不敬なる子等が殖えたりとて、1)之を喜ぶべからず、また彼等に天主を畏るる念なくば、之を楽しむべからず。二　彼等の生けるを恃みとするなかれ、また彼等の労働くを宛にするなかれ。三　蓋は不敬なる子女千人より、天主を畏るる者一人の方よければなり。四　また子なくして死するは、不敬なる子等を遺すに弥勝る。五　一人の賢者によりてその祖国に住む者殖えん、されど不敬なる者の民族は棄てらるべし。六　かかる事は幾多わが眼の見し所、しかもわが耳は是等よりも更に大なる事を聞けり。七　罪人の集会には火燃え上り、2)不信なる国民には御義怒発せん。3)八　往古の巨人等4)はその罪の赦免を願い求めず、己が力を恃みて滅ぼされたりき。九　また主はロトが宿りし処5)を容赦し給わず、そこの人々をその言の高ぶれるに由

第十六章　1)子の多いのは祝福と考えられていた。2)民一六・一以下にあるアビロン。3)本二一・一〇。—4)ノエが悔悛を説きすすめに遣された人々。5)ソドマ。

一〇　りて呪い給えり。　一〇彼等を憐み給わず、己が罪を誇れる国民を
一一　悉く亡ぼし給えり。一一また己が心を頑固にして相集まれる歩兵
六十万[6]に対しても、然なし給えり。もし一人にても頸剛くして
一二　なお且罰せられざりし者ありしならば、奇というべし。[7]一二夫れ、
彼には御憐憫も御義怒もあり。大いに願いを聴容れ給えども、ま
一三　た御忿怒をも注ぎ給う。一三その懲治もその憐憫と等しく大にして、
一四　人をその所行に応じて裁き給うなり。一四罪人その奪いし物により
て免かるるを得じ、[8]されどまた憐憫を垂れ給う者への忍耐も報
一五　いらるること遅からじ。一五凡て憐憫の各々の人に施さるるは、そ
一六　の業の功に従い、またその歩みの賢さによるなり。[9]一六云うなか
一七　れ、「我身を隠して天主を避けん。さらば誰か至高き処より我を
思い出る者あらん。一七我は多くの民の中にあれば、識らるること
あらじ。かくも涯なき被造界の中にありては、わが魂果して何

6) エジプトを出た時二十歳以上であつて、叛逆ゆえに荒野で亡びたすべてのイスラエル人出一二・三七など参照
7) 民一四・二九。一五・五一。―主は悔悛する者を憐み給うが、同様にまた悔悛せぬ者に当然の罰を下し給う、それはいずれも聖にましますによつて。
8) 罪は、天主に献げるのが当然の服従を、奪い取るようなもの。
9) 羅二・六。

一八　ぞ。」と。一八見よ、天を、諸天の天を、底知れぬ淵を、全地を、また是等の中
一九　にある物を、そは主の御眼前にて揺らぎ動かん。一九同じく山も丘も、地の基も、
二〇　天主之をみそなわさん時は、震い慄くべし。二〇しかも心10)は是等の一切に気付
二一　かず、却つてその心はいずれも皆、天主の了知り給う所なり。二一彼の道は、人
二二　の目に見えざる疾風の如く、誰か之を曉る者あらんや。二二実にその御業は多く
　　は隠れたり。その正義の御業も、誰か之を告げ得る者、または之に耐え得る者
　　あらんや。蓋し或人々よりは契約遠く離れたれど、11)末の日にはすべての人間
二三　い紛さるべし。二三心浅き者は空しき事を思い、智慧冥くして迷える人は愚なる
二四　事を思う。二四子よ、我に聽きて、了悟を与うる教を学べ、汝の心を傾けてわが
二五　言に注意せよ。二五さらば我公義しき教を説き、智慧を語ることに努めん。され
　　ば汝の心を傾けてわが言に注意せよ。実に我は公義しき精神もて、天主が元始
　　よりその御業に注ぎ給える徳能を説き、真実もて、その御知識を告げ知らすな
二六　り。二六天主の作り給えるものは元始よりその叡慮によれり、彼は是等の成立よ

10) 罪を犯そうとする人の。
11) イスラエル人と天主との契約ならびに主の御掟と御約束とを知つている人は少い。

二七・二七 りその役割を区別ち、12) その類に従いてその始めを定め給えり。彼は是等の働きに秩序を与え給えり。是等は飢えたることなく、二八 疲れたることなく、しかもその働きをやめたることなし。二八 また是等は一つとして、いつまでもその隣にあるものを障ぐることなからん。13) 二九 彼の言を信ぜざるべからず。三〇 然る後天主地をみそなわして、之にその数々の善き物を満たし給えり。三一 生ける物はいずれも皆その面にありて14) これを顕せり。かくて彼等は再び地に帰り行く。15)

## 第十七章

### 天主の創造と人に対する御支配

一 天主は土もて人を創造し、御自分の御像に肖りて之を造り給えり。1) 二 しかして再び之をそれ2) に帰らしめ、また御自分の如く之に力3) を着せ給えり。三 日数と時とを彼に与え、且地上にある諸

12) 各被造物にそれぞれの役割を振りあて給うた。—13) 創一・一以下殊に一〇、一二両節など参照。天主はそれをよしと観給うた。

14) ギリシャ語本は「すべての生けるものは、地の面を蔽えり。」

15) 死んで。

第十七章 1) 創一・二七。五・一。—2) 士。

3) 殊に悟性と自由意志

四　物の支配権を之に賜えり。四彼はこれに対する畏懼をすべての肉に加え、
五　之を禽獣の主たらしめ給えり。五また彼よりして、彼に似たる輔者を創造
　　り、4）思慮や言語、眼や耳、ならびに考え出す心を彼等に与え、知識智力
六　を之に満たし給えり。六彼等に精神の知識を具備えしめ、その心に識別
七　力を満たし、之に善悪を示し給えり。七彼は彼等の心に御眼5）を注ぎ給え
八　り、そは彼等に御自分の御業の偉なることを示し、八彼等をして聖なる御
　　名を讃えしめ、その奇しき御業を崇めしめ、以て御業の偉なることを宣べ
九　伝えしめんが為なり。九その上彼は彼等に教訓を垂れ、彼等をして生命の
一〇　規範6）を伝えしめ給えり。一〇また彼等と永久の契約を立て、7）彼等に御自
一一　分の正義と御定めとを示し給えり。一一是において彼等の眼はその御光栄の
一二　大なるを見、8）彼等の耳はその御声の尊厳なるを聞きたり。即ち彼等に曰
一三　いけるは、「慎しみてすべての不義を避けよ。」と。一三かくて彼等の各人
　　に、その近き者に関することを命じ給えり。一三彼等の道は常にその御前に

4）創二・一八
5）シラクは理性のことを「天主の御眼」と言う。
6）ヘブレオ人達に真の生命を得させたモイゼの律法。
7）創八・二一
8）ただ創造の御業についてのみならず、なかんずくシナイ山で。

一四　あり、そは彼の御眼に隠れなし。一四彼はいずれの国民の上にも治む
一五　る者を置き給いしが、一五イスラエルは明らかに天主の分とせられた
一六　り。9)　一六彼等のすべての所行は恰も陽の如くその御眼前にあり。そ
一七　の御眼は絶えず彼等の道を見守り給う。一七契約は彼等の不義により
　　ても取消されざりき、されど彼等の不義は悉く天主の御眼前にあ
一八　り。一八人の慈善は彼にとりて印璽10)の如し、されば人の慈悲心を瞳
一九　の如くに守り給う。一九さてその後11)起ちて、彼等各々の頭上にその
二〇　報を与え、彼等を地の底に陥入れ給わん。12)　二〇然れども悔悛する者
　　には義の道を示し、力乏しき者を強めて耐え忍ばしめ、彼等の為に
二一　真理13)をその受くべきものと定め給えり。二一主に立帰りて、汝の罪
二二二三　を棄てよ。二二主の御面前に祈りて、躓き14)を少からしめよ。二三主に
二四　立帰りて、汝の不義を離れ、その憎み給うことをいたく忌み嫌え。
　　二四天主の正義と審判とを知れ。しかして已に課せられたる本分と、

9) 天主御自身がイスラエルの君主。
10) 印鑑付指環は中東では非常に高価なものであつた。―11) 善悪に対する報いは、いつも同時に行われるとは限らない。
12) 「地の底」とは死者のすみかで、これは地下にあるといつも民間では信じられていた。―マテオ二五・四一。―13) 真理と正義とにかなつた運命。―14) 罪の機会

二五　至高き天主に祈ることを堅く守れ。二五行きて世の聖なる者[15]の方に加わり、生きて天主に讃美を献ぐる者に与せよ。[16]

二六　不敬なる者の迷妄の中に留まるなかれ、死せざる間に讃美せよ。無きに等しき死者よりは讃美もまた失せ去る。

二七　汝生ける間に天主を讃美すべし。生きて健かなる間に讃美すべし。しかして彼を讃め、その御憐愍を称うべし。二八主に立帰りし者に対するその御憐愍と、その御仁慈とは、いかに宏大なるかな。二九夫れ、人にすべての具わることなし、そは人の子は不死にあらずして、[17]彼等は悪の空しき中にありて喜べばなり。[18]三〇陽よりも輝かしきもの何かある。されどそれも暗むことあるべし。[19]また血肉の考え出すことよりも悪しきもの何かある。されどそれも罰せらるるに至らん。三一陽は天の高き処の軍勢を見守る。[20]されど人は皆土と灰となり。

15) 天主の選民。
16) 詩六・六。賽三八・一九以下。―17) これは霊魂の不滅を否定するのではなく、ただ人間が死ぬに決まつた者であるという意味に過ぎない。
18) それ故罪に陥りやすい。―19) 輝く天体の太陽からしてすでにその光を暗まされることがある以上、まして弱い人間には同様な懼れが大いにある。―20) 隊長のように。

一　二　三　四　五　六　七　八　九

# 第十八章

天主の御業の偉大なること—己が欲情に仕うるなかれ、その他

一 永遠に活き給う者、すべてを悉く[1]創造り給えり。義しとせらるべきは独り天主のみにして、彼は永久に敗るることなき王にて在す。二 誰かその御業を談るを得ん。三 抑々誰かその偉大なる御業を探ね究むるを得ん。四 また誰かその偉なる徳能を告ぐるを得ん。また更に誰かその御慈悲を談るを得ん。五 天主の偉大なる御作は、一も減ずる能わず、一も加うる能わず、また解する能わず。六 人の終えたる時、彼始め給わん。[2] 彼のやめ給う時、人当惑せん。七 人何者ぞや。その徳は何ぞや。[3] その善は何、またその悪は何ぞや。八 人の日数は多く見て百年なり。そは海の水の一滴の如し。この短き年を永遠の一日に比ぶれば、さながら浜の真砂に似たり。[4] 九 この故に天主は彼等[5]に

第十八章　1) 例外なく。2) 人間は天主の御業を眺めて、これが究極と思うと、解くことのできぬ新たな謎にぶつかる。3) ラテン訳者は χαρις と読み誤まつたのでギリシヤ語本の χαρις すなわち効用が徳となつている。即ち「かれは天主のためにどういう役に立つか」という意味。—4) 詩八九・一〇。—5) 人間。

一〇　対して忍耐深く在し、その上に御憐憫を注ぎ給う。一〇彼は彼等の心の自惚
一一　の悪しきを見、その末路の悲惨なるを知り給えり。一一是によりて彼等に対
一二　し御慈悲に充ち溢れ、之に公正の道を示し給えり。一二人の憐憫はその近親
一三　者に向う、されど天主の御憐憫は肉あるすべての物に及ぶ。一三彼は憐憫あ
一四　りて、教え、諭すこと、さながら牧者の羊群に対する如し。一四彼は、憐
一五　憫の教訓を受け容れその御規定にいそしむ者を、憐み給えり。一五子よ、善
　　をなす時、呟くなかれ。また凡て与うる時、悪しき言もて、悲しむる
一六　なかれ。一六露は暑熱を和らぐるにあらずや。言の贈物[7]に優ることもまた
一七　かくの如し。一七視よ、よき言は贈物に優るにあらずや。されど義とせらる
一八　る人にはこの両つながらあり。一八愚なる者は言鋭く詰責り、教養なき者
一九　は物を贈りても、眼を泣き疲れしむ。一九裁く前に汝のため正義を用意せ
二〇　よ。[8]語る前に学べ。二〇病の前に薬を用いよ。裁く前に汝自身を調べよ。
二一　さらば汝天主の御眼前にて御恵を得ん。[9]三病[10]の前に自ら謙り、弱れ

6) 約一〇・一一以下にある善き牧者の喩を参照せよ。
7) 冷い態度で施された恩。
8) ギリシヤ語本なし。
9) 哥前一一・二八。
10) 傲慢ゆえに下ろうとする天罰

二二　る時に汝が日頃の行為を示せ。二三汝常に祈ること11)を何にも障げらるべからず。また死に至るまで正義に励むことを憚るべからず。そは天主の御報賞永久に存すればなり。12)

二三　祈る13)前には汝の霊魂を整備え

二四　よ、天主を試みる人の如くならざれ。二四終の日における御義怒と、御

二五　面を背向けて報復い給う時とを憶え。14)

二五　豊かなる日には貧しきを、

二六　富める日には貧しさの不自由を、憶え。15)

二六　朝より晩まで時は移り変

二七　るべし、しかして是等はみな天主の御眼にいと速かなり。16)

二七　賢き人

二八　は何事にも懼れ慎しみ、過てる日には注意して怠慢を避けん。二八智き

二九　者はいずれも智慧を知る、されば之を獲たる者を讃称えん。二九言を出

三〇　すに思慮深き者は、また賢明に行動う。彼等は真理と正義とを悟りて

三一　箴言や卓説を雨の如く降らす。三〇汝慾情に従うなかれ、我意を離れ

三二　よ。17)三一汝もし己が霊魂にその欲するものを与えなば、そは汝を敵の喜ぶ所となさん。三二大なる宴会にも、小なる宴会18)にも、参りて楽し

11) ギリシャ語本「誓を然るべき時に果たすこと」。
12) 路一八・一。撒前五・一六。
13) ギリシャ語はここでもまた「誓う」と言っている。
14) 本七・一八。
15) 本一一・二七。
16) 天主は思い上がつた享楽を苦しみで罰し給うのに、長くはかかり給わぬ。—17) 羅六・一二、一三。一三・一四。—18) 酒宴。

三三 むなかれ、蓋は常に罪を犯す機会となればなり。三三 汝借金して[19]他と張り合い、自ら貧窮に陥るべからず、終には汝の嚢中に一物もあらずなるべし。蓋し汝已が生を厭うに至らん。

## 第十九章

讒謗その他舌の罪に対するいましめ—眞の智慧と偽の智慧

一 働くとも、酒のみては、富むことあらじ、また小さき事を軽んずる者は次第に零落せん。

二 葡萄酒と女とは賢き者をも離れしめ、[1]思慮ある者にも非難を蒙らしむ。[2]三 また娼婦に愛着する者は悪人にならん。腐敗と蛆と、彼を受け取らん。[3]かくて彼は大なる見せしめにせられ、その霊魂は員数[4]の中より取り除かるべし。

四 信ずることの早き者は、その心軽卒にして、損を蒙らん。

五 罪を犯して已が霊魂を害する者は[5]その上に恥辱を受くべし。[6]

五 不義を喜ぶ者は譴責められん、懲治を厭う者は生命短かからん。

[19]ギリシャ語本「借金して酒宴を開き、以て……」。

**第十九章** [1]善より。[2]創一九・三三。王上一一・一。—[3]体が恥ずべき病におかされる[4]生ける人々。[5]「信ずることおよび罪を犯すこと」は第三節の娼婦に当たると解すべきである。—[6]書九・一五以下。二二・一一以下。

六　また空談を嫌う者は悪意を消すなり。7) 六 罪を犯して己が霊魂を害

七　する者は後悔すべく、悪事8)を喜ぶ者は恥かしめらるべし。七 意

地悪くして情なき言9)を再び云うなかれ、さらば汝損を蒙らじ。

八　八 友にも敵にも、汝の考えを語るなかれ、また汝に怨ありても

九　之を明かすなかれ10) 九 蓋は彼汝に聞くや、汝に用心し、恰も汝の

罪を庇う如く見せながら、汝を厭い、汝に対して常にかくなすべ

一〇　ければなり。一〇 汝もし汝の近き者に対して不利なる言を聞きたり

一一　とせんか、之を汝の衷にて死なしめ、その汝を破りて漏るるなか

一二　らんことを期せよ。一二 愚なる者が言を聞くや、之を漏らすまで苦

一三　しむは、子を産むに当りて呻き悩むに似たり。11) 一三 愚なる者の心

一三　に入りたる言は、腿の肉に立ちたる矢の如し。一三 友を諫めよ、12)

これ、彼が暁らずして「我然為さざりき」と云うことのなからん

ため、また彼もし然為したる時は、累ねてなすことのなからんた

7) 讒謗者は、汝がその話に耳を傾けないと、やめる。―8) とりわけ二、三、両節にある悪事をさす。―9) 汝が他人について聞いたこと

10) 友が汝を信用しなくなり、また敵が汝の過失を知り、それを利用して汝を破滅に至らしめることを防ぐ、自然的分別の方針。―11) 残らずしやべつてしまうまでは落付かない。

12) かれについて何か悪いことを聞いたら。

一四　めなり。13）　一四近き者を諫めよ、或は彼云わざりし場合もあらん、されど云
一五　いたる時は、それにより再び云わじ。一五友を諫めよ、蓋は罪を犯すこと
一六　屢々あればなり。一六またいかなる言をも悉くは信ずるなかれ。舌の過失に
一七　て、心より出でしにあらざるものあり。一七夫れ、己が舌もて過失を犯さざ
一八　りし者誰かある。近き者を詰責る前に先ず諫めよ。14）　一八また至高者を畏る
一九　る念を容れよ、これ、すべての智慧は天主を畏るるにあり、天主を畏るる
二〇　は智慧により、15）律法を志すは全き智慧によればなり。一九されど悪を知る
二一　は智慧にあらず、また罪人の思慮は聰明にあらず。二〇悪にして、憎むべ
　　きあり、愚者にして、全く智慧なきがあり。二一智慧16）少く、思慮に欠くる
二二　も、敬畏の念ある人は、思慮に富みながら、至高者の法を破る者に優る。
二三　確かに賢くして、しかも不義なるがあり。二三また耳に痛き言を出し真理
　　を語る者あり。悪しき意もて遜りながら、その内に欺瞞に満てる者あり。
二四　また大に謙遜して甚だしきまで自ら卑下する者あり。また面を伏せて、

13）利一九・一七。マテオ一八・一五。路一七・三。
14）雅三・三。
15）ギリシャ語本になく、前にある言葉の繰返しである
16）天主を畏敬する所の智慧（一一・二〇、二二、各節参照）ではなく人間の知識による智慧。

二五　知られざる事を見ざる如く装う者あり。二五彼、力弱きに妨げられて罪を犯さずと雖も、
二六　もし悪をなすべき機会を得ば、すなわち悪をなさん。二六人は外見によりて知らる、思慮
二七　深き者は、相対えばその面によりて知らる。二七身の服装、歯の笑い、人の歩み方は、そ
二八　の人となりを語る。二八傲慢無礼なる者の怒れる時には、その詰責の当らざることあり。
　　また是と認め得ざる判断あり。なお沈黙を守る者あり、是こそ賢明なれ。

## 第二十章

### 愚者と智者との比較―口舌の罪

一　譴責むること、および告白する者の語るを妨げざることは、怒る
二　に優る、そもいかばかりぞや。二閹者の情慾は、若き女を凌辱しめ
三　ん。1)三暴力によりて不公平なる裁判をなす者もまたかくの如し。2)
四　四譴責を受けて、悔悛の情を示す者は、いかによきかな。蓋はかく
五　してこそ汝故意の罪を免るべければなり。3)五沈黙を守る者あり、是
六　は智者と認めらる。また臆面なく語る者は、厭うべき者なり。六語

第二十章　1)本三〇・二一。―2)罪ある者を激昂して責めては、こちらの望む目的が達せられない。3)かようにして罪が償える。換言すれば「罪赦されん」。

るべき意見なきに由りて[4]沈默を守る者あり。また適当なる時を知る故に沈默を守る者あり。七賢き人は時の来るまで沈默を守らん。されど放言して憚らぬ思慮なき者は、時を顧みず。八多くの言を用うる者は己が霊魂を害うべく、不義によりて権力を己が有とする人は憎まるべし。

九不徳なる[5]人の悪事に成功することあり、されどその得たる所は、損失となるなり。一〇何の利益をも齎さぬ贈物あり、また二倍にして報いらるる贈物あり。一一栄えても衰うることあり、また卑賤より頭を抬ぐる者あり。一二少き代価を以て多くを購う者あり、されど七倍[6]を支払うなり。一三智慧ある者は言によりて他に愛せらるるに至らん。されど愚なる者の好意は空しくなるべし。一四無智なる人、物を贈りても、汝に益あらざるべし。蓋は彼の眼、七倍の返礼を望めばなり。一五彼は少く与えて、多く罵らん。その口を開くや火を吐く如し。[7]一六人あり、今日貸して明日催促す。かくの如き人は厭うべし。一七愚者には友なからん。またその

4) 沈默がいつも智慧ある印とは限らない。

5) 「不徳なる」という形容詞はギリシャ語本にはない。

6) 「何倍も」の意。聖書によく出てくる言い方。王下五・一〇。マテオ一八・二二など参照。

7) 人々の前で獅子吼する人のように。

一八　善き業にも感謝せらるることなからん。一八蓋は彼のパンを食する者等、8)
一九　舌に虚偽あればなり。人は幾度、また幾人、彼を嘲笑うならん。一九蓋は
彼保存すべき物をも、又保存すべからざる物をも、然るべき分別もて分
二〇　け与えざるが故なり。二〇虚偽を云う舌の滑りて失言するは、甚だしの路に
て倒るるが如し。悪しき者の倒るるもまたかくの如く速かに来らん。
二一二二　三愛嬌なき人は、締りなき者の常に口にする空しき談の如し。三愚者の
口より出る金言は聞き棄てにせられん、蓋は適当なる時に之を云わざれ
二三　ばなり。二三貧しきに妨げられて罪を犯さざる者あり、安楽ならば彼刺戟
二四　せられん。二四羞恥心より9)己が霊魂を亡ぼす者あり。即ちかかる者は
無分別なる者に譲歩して之を亡ぼすに至らん。また他人に気兼して身を
二五　亡ぼすに至らん。10)二五羞恥心より友に約束して、故なく之を己の敵と
二六　する者あり。11)二六虚言は人における甚だ恥ずべき汚点にして、締りなき
二七　者の常の口にする所なり。二七盗人12)は、常に虚偽を云う人に優る。され

8) 家人。―9) 不当な要求を斥ける勇気がなくて
10) 最後の一文はギリシャ語になし。ヴルガタでは同じことが繰り返してある。
11) あとで約束を守らないから。
12) 盗人は困つて盗むが、嘘つきは悪意もしくは不正直から虚言を吐く。

二八　ど共に滅亡を受けん。　二八虚偽を云う人の行動には褒むべき所なし。
二九　彼等の身には恥辱絶えず附き纏わん。二九13）智慧ある者は言によりて出世すべく、思慮ある人は偉なる者に嘉せらるべし。
三〇　三〇己が土地を耕す者は穀物の山を堆く築くべく、正義を行う者14）は崇められるべし。また偉なる者に嘉せらるる者は、不義を免るべし。
三一　三一土産物や贈物は裁判官等の眼を眩ましし、その口を唖の如くにして、
三二　罰することを得ざらしむ。15）三二隠れたる智慧と、見えざる宝と、
三三　是等は兩つながら何の益かあらん。16）三三己が愚さを包む者は、己が智慧を隠す人に優る。17）

## 第二十一章

### 罪に対する注意

一　一子よ、汝罪を犯したりや。さらば累ねてまた然なすなかれ。1）
二　却つて汝に赦免の与えらるるよう、以前の罪の為に祈れ。二蛇の

13）ギリシャ語本ではここに題の如く、箴言としてある。—14）ヴルガタ訳の附加したもの。—15）出二三・八。申一六・一九。
16）本四一・一七。
17）自他の益となるように、天主から与えられたものであるから。

第二十一章　1）真の改悛は善き決心とその遂行によつて表われる。

面前より逃げ去る如く、罪を避けよ。汝もし之に近寄らば、そは汝を捕え
三 ん。 四 その牙は獅子の牙にして、人々の生命を奪うなり。 五 凡て不義は両
五 刃の剣の如し。その傷は癒やす術なし。 暴言と非行とは富を無くす、甚
だ富める家も傲慢によりて亡びん。かくの如くにして傲る者の財産は残り
六 なく失せ果つべし。 六 貧しき者の願いはその口より出でて、かれの耳[2]に
七 達し、判決速かに之が上に下らん。 七 懲らしめらるることを厭う者は罪人
八 の足跡を踏み行くなり、されど天主を畏るる者は、己が心より立帰らん。
八 権勢ある者は尊大なる舌によりて遠方まで知らる。されど思慮に富む者
九 は彼によりて躓くことあるを知る。 九 他人の費用によりて己が家を建つる
一〇 者は、冬の為に己が石を集むる者に似たり。[3] 一〇 罪人の集団は麻屑を積み
一一 重ねたる山の如し、彼等の終末は火焔なり。[4] 一一 罪人等の道は、石砌きて
一二 平坦なり。されどその果には、冥府と、暗黒と、苦罰とあり。 一二 正義を守
一三 る者はその意義を悟らん。 一三 天主に対する敬畏の極致は、智慧と了悟とな

2) 傲慢な者の耳。他の説によれば、彼らの願いは高ぶる者に聴き入れられないので、天主の御耳に。―3) 冬に建築するとその建物は堅固でない。一説では、「薪の代りに石を集む」。―4) 本一六・七。

一四 り。一四善に智からざる者は教を受けじ。一五されど悪意に充ち満てる智慧あり。
一六 その苦き毒のある所、明達あることなし。一六賢人の知識は洪水の如く溢れん、
一七 その智謀は生命の泉の如く尽きじ。一七愚者の心は割れたる器の如くにして、全
一八 く智慧を貯うる能わず。一八賢き人はいかなる智慧の言を聞きても、之を讃え、
且己に適用す。放縦なる者は聞きても悦ばずして、之を背後に投げ棄てん。
一九 一九愚なる者の談話は道行く時の重荷の如し。実に良識ある者の唇には気品ある
二〇 べし。二〇聰明なる者の口は、集会の時に5)語ることを求められ、人々心の中に
二一 てその言を思いめぐらさん。二一愚なる者には智慧も破れたる家の如し。鈍き者
二二 の知識は無意味の言に過ぎず。二二愚なる者には教訓も足に嵌めたる足枷の如く、
二三 また右手にかけたる手錠の如し。6)二三愚なる者は笑う時に大声をあぐ、されど
二四 賢き人は殆ど小声にても笑わじ。二四聰明なる者にとりて教訓は黄金の飾りの如
二五 く、また右腕に嵌めたる腕環7)の如し。二五愚なる者の足は動もすれば近き者の
二六 家に至る。されど経験に富める人は権勢ある者に向うを恥じん。二六愚なる者は

5) 会議の際に
6) これらは邪慾を束縛するから。
7) 昔中東で婦人ばかりでなく男子も着けた装飾品。

二七　窓より家の中を覗き見ん、されど礼ある人は外に佇むべし。二七人戸口にて立聴きするは愚なり。賢慮ある者はかかる事を重き恥辱とすべし。二八思慮浅き者の唇は愚なる事を語らん、されど思慮深き者は

二八

二九　己が言を秤にかけて量らん。二九愚なる者の心はその口にあり、賢き者の口はその心にあり。三〇不敬なる者、悪魔を呪う時、是、実は己が霊魂を呪うなり。[8]

三〇

三一　告口する者は己が霊魂を汚し、且多くの人に憎まるべく、また之と共に居る者も憎まるべし。沈默を守る思慮ある人は尊敬を受けん。

三一

## 第二十二章

孝行、友情などについて

一　怠惰なる者は泥塗れの石を擲たれたり、人みな彼の恥辱に就きて語らん。二怠惰なる者は牛の糞を投げつけられたり、彼に触るる者いずれも皆手を振わん。三躾悪しき息子は父の恥辱なり、またかかる娘は彼の体面を損うべし。四賢き娘はその夫にとりて譲り

一　二　三　四

8) 悪魔に誘われてもかれさえ承諾しなかったら罪に陥ることがないから。ここの「悪魔」を、一般に敵手と解することもできる。「人を呪わば穴二つ」の義。

渡されたる財産なり。[1] 五 破廉恥の女は父と夫とを辱しむるなり。 六 されど恥となることなす者は生みの父を辱しむるざるべく、その孰れにも蔑まるべし。 七 時機を得ざる談話は[2]楽[3]を奏する如し。 八 されど打擲と諭しとはいかなる時にも智慧の所行なり。 九 愚者に教うる人は、陶器の破片を膠にて継ぎ合す人の如し。

かざる者に語う人は、眠れる者をその深き睡眠より起す人の如し。

者に智慧を説く人は眠れる者と語るなり。その者談話の終りに曰く、「是は何人ぞ。」と。 一〇 死せる者のために泣け、蓋はその光失せたればなり。

また愚者のために泣け、蓋はその智力失せたればなり。[4] 一一 死せる者のためにはあまり泣くなかれ、蓋は彼安息を得たればなり。 一二 然れども悪しき者の生は愚者の死よりも悪し。 一三 嘆き悲しむこと、死せる者の為には七日なり。[5] 一四 されど愚なる者や不敬なる者の為には、彼等が存うる間なり。

愚なる者と多く語るなかれ、また浅慮なる者と行を共にするなかれ。

**第二十二章**

1) ギリシャ語本「譲り渡されたる財産として夫を受けん」。 2) 場はずれに長々と教訓するのは当を得たやり方ではない。 3) 楽しい音楽 4) 本三八・一六。 5) 創五〇・一〇。尤一六・二四以下参照。

一五　一五汝迷惑を蒙ることなからんために、慎しみてかかる者を避けよ、さらば
一六　汝彼の罪に染まり汚るることなからん。一六かかる者より離れよ、さらば汝
一七　安らかなるを得て、その愚さに苛立つことなからん。一七鉛に優りて重きも
　　の何かあらん、かかる者には、愚者という外に、いかなる名称かこれあら
一八　んや。一八砂と塩と鉄塊とは、思慮浅く愚かにして不敬なる人よりも、忍び
一九　易し。6) 一九建物の基礎に固く着けたる木の骨組は弛むことなからん。7) 考
二〇　え謀りて堅く思い定めたる心もまたかくの如し。二〇道理を弁えたる人は、
二一　いかなる時にも恐怖によりて思う所を曲げじ。二一高き処にある柵や、費用
二二　をかけずして拵えたる塗壁が、風の面に得耐えざるに似て、二二愚なる者の
二三　想像に怯ゆる心もまた、恐怖の激しきに得耐えざるべし。二三愚なる者の思
　　うばかりにて怯ゆる心も、常に恐るるとは限らざる如く、8) 毎も天主の御訓
二四　諭を守る者とても亦然り。二四眼を刺す者は涙を出し、心を刺す者は悔を起
二五　す。9) 二五鳥に向かいて石を投ぐる者は、之を追い払わん。かくの如く友を

6) 箴二七・三
7) ギリシャ語本「地震の折に」。
8) 愚者は浅慮によって、善人は天主に対する信頼によって。
9) 眼は体の感覚する部分であるが、そのように友に非道なことをすると、ひどい苦痛を感ずる。二七節参照。

二六　罵る者も友情を破る。二六汝友に向かいて剣を抜きたりとて、絶望するなかれ。

二七　蓋は旧に復る途あればなり。友に向かいて、二七汝口を開き之を悲しませたりとて、心配するなかれ。蓋はまた和合することあればなり。但し罵倒、詰責、傲慢、秘密を洩らすこと、及び欺き打つことによる場合は然らず。すべてかかる事あらば、友は逃げ去らん。二八友に対して、その貧しき時にも忠実を守れ、これ、その幸福なる時に、汝もまた楽しむを得んためなり。二九その患難の時にも、渝ることなく彼に忠実なれ、これ、その産を嗣ぐ時に、汝もまた共に受くるを得んためなり。三〇火の前には、炉の蒸気と、火の煙と立ちのぼる。かくの如く血を流す前にもまた悪口と侮辱と脅喝とあらん。三一我は友に挨拶することを恥じざらん。またその面前より身を隠すことをせじ。我たとい彼によりて不幸に逢うとも、耐え忍ばん。三二されど之を聴かん者は、いずれも皆用心して彼を避けん。三三わが口に守衛者を置き、わが唇に堅き封印を施し、是等によりて我の倒るること、わが舌の我を亡ぼすことなからしめん者は誰ぞや。10)

10) 詩一四〇・三。

# 第二十三章

口の罪を避けん為の恩寵を求むる祈―口を慎しむこと及び肉体的快楽に関する注意

一　わが生命を宰り給う父なる主よ、我を是等の1)策謀に陥らしめ給うなかれ、
二　また是等によりて我の倒るることを容し給うなかれ。三　わが思念に鞭を加え、
わが心に智慧の教訓を垂れん者は誰ぞや、そは、彼等が知らざるによりて、
三　我を容赦せず、彼等の罪現るる2)ことなく、三　またわが過失加わり、わが愆
増し、わが罪溢れて、我仇の眼前にて倒れ、わが敵の我に就きて喜ぶことな
からんためなり。四　父にしてわが生命の天主なる主よ、我を彼等の思う壺に
嵌まらしめ給うなかれ。五　わが眼の驕慢を我に与え給わざれ、あらゆる慾を
我より遠ざけ給え。六　我より腹の慾を取り除き、我を肉慾の擒とならしめず、
七　また恥知らぬ慎しみなき心に付し給わざれ。七　子等よ、口の教を聴け、3)之
を守らん者は唇によりて亡ぶることなく、また躓きて最悪しき所行に陥ること
ともなからん。八　罪人は己が空虚を看破られ、傲る者と悪しざまに云う者と

第二十三章　1)前後の関係から見れば唇のはたらき。2)行動に進展する。3)すなわち口、言葉を律するすべ。出二〇・七参照。

九　はそれによりて躓き倒れん。九汝の口をして誓を立つるに慣れしむるなか
一〇　れ。蓋は之によりて倒るること多ければなり。4）一〇また汝の口もて慣に天
一一　主の御名5）を呼ぶなかれ、濫りに聖者等6）の名を用うるなかれ、是、然せ
　　ずば汝罪を免れざるべければなり。一一実に絶えず責に問わるる奴隷が鞭痕
　　の青痣を免れざる如く、誓う者や御名を呼ぶ者も亦、罪を免れて全く潔き
一二　を得ざるべし。一二多く誓う人は不義に満たされ、天罰その家を去ることな
一三　からん。一三彼もし誓を守らずば、その科その身にかかるべく、その上知ら
一四　ざる如く装えば、7）是、二重に罪を犯すなり。一四また彼もし虚言を云いて
一五　誓わば、義とせられざるべく、即ちその家には報充ち満つべし。一五なおま
　　た他に、死に当る言あり、ヤコブの世嗣の中にはかかる言あらざれかし。
一六　一六実に情ある人々はかかる事を悉く己より取除くべし、さらば罪科の中に
一七　伏し轉ぶことなからん。一七汝の口を慎しみなき談話に慣れしむるなかれ、
一八　蓋はその中には罪の言出ればなり。一八偉なる人々の中にありては、汝の父

4）出二〇・七　マテオ五・三三。―5）ヤーヴェの聖なる御名。―6）ここではアブラハムなど旧約の聖人達と考えることもできる。しかしギリシャ語本では、「聖なる御方、即ち天主の御名」。7）誓を軽視すれば。

一九　母を憶え。8）
二〇　恐らくは天主が彼等の眼前にて汝を忘れ給い、汝
二一　己が習慣により愚なることをなして恥辱を蒙り、己が生れしを不幸
二二　としてその生れたる日を呪うことあらん。9）二〇粗暴なる言に慣れた
二三　る人は、一生の間改められざるべし。10）二一罪を犯すこと多きは二
二四　種類の人なり、また今一種類は義怒と滅亡とを招く。11）二二燃ゆる火
二五　の如くに熱する魂は、何かを焼き尽すまでは鎮まらざるべし。二三己
二六　が肉の口を悪しく用いる人は、火12）を燃やし終るまではやめじ。
二七　二四私通する人にはいかなるパン13）も甘し。彼は終まで罪を犯すこと
　　に倦まざるべし。二五己が臥床を他にする人は、いずれも皆己が生命
　　を軽んじて14）云う、「誰か我を見ん。15）二六暗闇我を囲み、壁我を蔽
　　い隠して、我を見る者なし。我誰をか恐るべき。至高者もわが罪を
　　御心に留め給わじ。」と。二七かくて彼はその御眼の一切をみそなわ
　　し給うことを了らず。そはかくの如き、人を恐るる情は天主を畏る

8）上流の人達に、汝が父母から良い教育を受けなかつた者と思われて、親の顔を潰すな。―9）百三・一参照。―10）母下一六・七。―11）二二―二三節は、邪悪な人々の第一の種類。不倫なる者共。―12）官能的快楽の火。13）己が欲望を満足させるあらゆる手段。14）姦通者は死刑に行なわれた。申二二・二二参照。―15）賽二九・一五。

二八　る念を彼より逐い出し、ただ人の眼之を恐れしむるのみなればなり。二八また彼は主の御眼が陽よりも遙かに明るくして、人々のあらゆる道をも、淵の深き所をもみそなわし、人々の心をその隠れたる所までも見ぬき給うことを知らず。二九実に万の物はその創造らるる前より主なる天主に知られたり。かくの如く彼はまた一切をその成りし後にもみそなわし給う。三〇かかる者は城市の広場にて罰せらるべく、16) また仔馬17) の如く逐わるべし。しかして思わざる時に捕えられん。三一かくて彼はすべての人に辱しめられん、そは天主を畏るることを悟らざりしに由りてなり。三二かくの如く己が夫を棄て、他人によりて世嗣を儲くる女もまた、いずれも皆然り。三三蓋は、かかる女は第一に至高者の律法に忠実ならず、第二に己が夫に背き、第三に不義密通して他の男により己が子を儲けたればなり。三四かかる女は、之を集会に引き来りて、18) その子等のことを篤と取調ぶべし。三五その子等は根を張ることなく、その枝は実を結ぶことなからん。19) 三六かかる女は呪わるる思い出を遺し、その恥辱

16) かような悪人はただ天主のみならず人々からも罰せられる。
17) 姦通の憎むべきことをあらわす喩。
18) 利二〇・一〇参照。
19) 智三・一六以下四・三以下参照。

三七 は消ゆることなからん。三七 かくて後に遺れる人々は、天主を畏るるより勝れたることなく、主の誡命を守るより楽しきことなきを知るべし。三八 主に順うは大なる光栄なり。蓋し彼より長き寿命[20]を受けん。

三八

## 第二十四章

智慧の称讃—その起源—その発露—その結果

一 智慧は己によりて称讃を博し、天主によりて誉を得、その民の只中にて歓び誇らん。二 即ち至高者の集会[1]において口を開き、彼の軍勢[2]の眼前にて誇らん。三 かくてその民の只中にて崇められ、聖者等の充ち満てる所にて驚嘆せられ、四 選ばれたる者の群の中にて讃美を受け、祝せられたる者の間にて祝せられて云うべし。五 我は至高者の口より出来りて、[3] 六 あらゆる被造物に先立つ初子たり。[4] 六 我は

一　二　三　四　五　六

20) 長生きは智慧の最も卓れた祝福の一つ。本一・一二、二五参照。

第二十四章　1) 生れつき、ならびに霊的参加によつて、天主の選民に属しているすべての人。2) 天使たち。—3) 世界創造の際の天主の御言葉を暗示する。4) ギリシヤ語本になし。聖パウロは西一・一五で、この言葉をペルソナたる永遠の智慧、天主の第二位、ロゴスに適用している

天において、衰うることなき光のさし昇るようになし、全地を雲の如くに覆えり。[5] 七 我は最高き所に住めり、わが玉座は雲の柱[6]の中にあり。
八 我はただ独り天の軌道を巡回り、淵の深き所まで突き入り、海の波涛
九 の中を歩み、全地の上に立てり。しかしていずれの民、一〇 いずれの国
一一 に対しても、上無き地位にあり、二 徳能によりて、高き者低き者一切の
人の心を踏みつけ、[7] 是等すべての人の中に安息を求めれども、主の遺
一二 産[8]の中に住まらん。 二 その時万物の創造主、我に命じて曰えり。即
一三 ち我を創造り給いし者、わが幕屋の中に憩いて、一三 我に曰いけるは、
一四 〝汝ヤコブの中に住い、イスラエルを嗣産として、わが選びし者[9]の中
に根を張れ〟と。一四 我は元始より、即ち世々の前より、創造られて在り、
一五 世々の後まで失せざるべし。我は聖なる住居[10]にて、彼の御前に仕え奉
れり。[11] 一五 かくて我はシオンに座を堅め、同じく聖なる都に鎮まり、イ
一六 エルサレムにてわが権力を揮えり。一六 我は栄ある民の中に根を張りぬ。

5) 元始に世界を包んだ水蒸気の塊を暗示。創一・二参照。
6) 詩篇作者は時々雲を天主の玉座の如く述べている。―7) 天主は人々の心を導き給う。―8) イスラエル民族。
9) イスラエル人
10) イエルサレムにある聖殿。
11) 箴八・二二。

その嗣産はわが天主の分の中にあり、わが天幕は聖者等の充ち満てる所にあり。一七我はリバノンの杉の如く、12）またシオンの山の糸杉の如く高くなれり。一八カデスの棕櫚の如く、またイエリコに植えられし薔薇の如く、高くなれり。一九野の形美き橄欖樹の如く、また広場の水の辺にある篠懸樹の如く、高くなれり。二〇我は肉桂の如く、また芳しき香膏の如く、香を放てり、精選りたる沒薬の如く、床しき香を放てり。二一しかして蘇合香13）の如く、楓子香の如く、紅螺香の如く、沈香の如く、切らざる乳香14）の如く、わが住居を立て罩めしが、わが薫は混合物なき香膏の如くなりき。二二我はテレビンの樹の如くわが枝を差し伸べたり。わが枝は誉と恩惠となり。二三我は葡萄樹の如く、床しき香を放ち、わが花は誉と美き名との実を結べり。二四我は美しき愛と畏懼と、知識15）と、聖なる希望との母なり。二五道と真理との恩惠はすべてわが衷にあり、生命と徳との希望は悉くわが衷にあり。二六汝等凡

12）智慧が最も立派で貴重な木や芳香を放つ植物に譬えてある。—13）蘇合香、楓子香、紅螺香は、ヘブレオ人の聖なる香の四成分中の三つ。

14）樹皮に切り口を作らなくても、自然に樹から流れ出るもので、すべての中で最も上等。

15）信仰を意味す。故に、三つの対神徳即ち信、望、愛と天主に対する敬畏をさす。

二七　て我を慕う者よ、わが許に来りて、わが実に飽くべし。二七蓋はわが精
二八　神は16）蜜よりも甘く、わが伝うるものは蜜と生蜜とに優れば
二九　なり。二八わが記憶は世々を累ね代々に亘りて常に存す。二九我を食する者は
三〇　更に飢え、我を飲む者はなお渇かん。17）三〇我に聴従う者は亡びざるべ
三一　く、我によりて事を行う者は罪を犯さざるべし。三一我を輝かす者は、18）
三二　終りなき生命を得ん。三二すべて是等の事は生命の書、至高者の証詞、
三三　真理の知識なり。三三モイゼは律法を定めて正義の掟とし、ヤコブの
三四　家の伝うべきもの、イスラエルに対する約束としたり。三四彼19）はその
三五　下僕ダヴィドに向かいて、彼より永久に栄誉の玉座に即き給う、いと
三六　偉大なる王20）を起すべしと約束し給えり。三五是ぞフィゾン21）の如く、
三七　また新たに稔る頃のチグリスの如く、智慧を漲らしめ給う者、三六エウ
　　フラトの如く了悟を溢れしめ給う者、刈入時のヨルダン22）の如く之を
　　増さしめ給う者、23）三七光の如く24）知識を送り、葡萄収穫期のゲホンの

16）ギリシャ語本「われを思うは」。
17）約六・三五。
18）他の人々に智慧を教える人。
19）天主。—20）メシア。
21）フィゾン、チグリス、エウフラト、ゲホンは、地上の楽園を潤していた四つの河。創二・一〇以下参照。—22）パレスチナの主要な河で、楽園の河川に合す
23）約三・一五。
24）シリア語本によれば、寧ろナイル

三八　如く援助を与え給う者、三八最初に智慧を完全に知り給いし
三九　者にて在す。弱き者は之を究むることを得じ。三九これ、その
四〇　の思念は海よりも広く、その思慮は大なる淵よりも深け
　　ればなり。25) 四〇我こそ智慧26)にして、河川を流れ出でしめ
四一　たるなれ。四一我は水量限りなき河の水路の如し。我は河の
　　掘割の如し。しかして水道の如く楽園より出で来れり。
四二　四二我云えらく、〝我はわが園27)の植木に灌ぎ、わが草原の
四三　実に飲み飽かしめん。〟と、四三然るに見よ、わが水路は漲
四四　り溢るるに至りて、わが河流は海に近づけり。四四そは我
四五　すべての人に、教訓を朝の光の如く輝かし、遠方まで28)之
　　を宣べ伝うべければなり。四五我は地のすべての深き所に浸
四六　み入りて、眠れる者を悉く見舞い、主に希望を置く者に皆
　　光明を与えん。四六我はなお、教訓を預言9)の如くに注ぎ出

河の如く。—25)羅一一・三三。
26) ラバヌスはこれにつき説明して曰く、「智慧とは、福音の御教を全世界に注ぎ、これを奉ずる者の心を十分に潤し給うキリストである」と。—27)「天主の園」とは、まず第一にイスラエル民族のこと。これに律法が与えられ、その中からメシアが現れ給うた。しかしこの泉は間もなく大河となり、その永遠の生命の水を地の隅々にまでも及ぼした。—28)このエジプトにおける如く、異教徒の中に散在している同信の兄弟のためにも。
29) 厳密な意味での一予言でなく霊感による聖なる言葉。

四七

して、智慧を求むる者の為にこれを遺さん、かくて聖なる永遠に至るまでその子孫の許を去らじ。四七 汝等、わが労苦したるは、独りわが為のみにあらずして、また凡て真理を探ぬる者の為なることを思いみよ。30)

## 第二十五章

三つの善き事と三つの悪しき事—主を畏るるは真の幸福—悪しき女に就きて

一 三つの事わが意に適えり、そは天主と人との前に是と認めらる。

二 兄弟1)の心合いたる、近き者の相愛する、及び夫婦の互に交情よくする、即ち是なり。

三 次の三種の人はわが霊魂の憎む所にして、その生活は我の甚だ厭う所なり。

四 貧しきに高ぶる者、富みたるに偽る者、2) 及び、老いたるに愚にして思慮なき者。3)

五 汝、若き時に集めざりしものを、老いたる時にいかにして獲んとするや。

六 白髪の人に決断あり、長老の分別を知れるは、いかに美きかな。

七 老いたる人々に智慧あり、栄ある人々に了悟と分別とあるは、いかに美きかな。

八 経験多きは老いたる人々の冠にして、天

30) 本三三・一八。

第二十五章

1) イスラエル人。—2) すばらしい約束をするが、一向それを守らぬ者。—3) 姦淫する者。

九　主を畏るるはその光栄なり。九心に疑うべからざる事九つあり、我之を称
一〇　えたり。また第十の事は我舌もて之を人々に云わん。一〇人その子女を楽し
一一　みとすること、存えて己が敵の覆滅ぶるを見ること。一一幸福なるかな、智
　　き女と共に住む者、己が舌を滑らすことなき者、己に応わしからぬ人々に
一二　仕えしことなき者。[4] 一二幸福なるかな、真の友を見出す者、聴く耳に正義
一三　を説く者。一三智慧と知識とを得たる者はいかに偉大なるかな、されど主を
一四一五　畏るる人に優る者はあらず。一四天主を畏るることは一切の上に位す。一五幸
　　福なるかな、天主に対する敬畏を賜わりたる人。之を持つ人は誰にか譬え
一六　んや。一六天主を畏るるは之を愛する始なり。また信仰の始も之と密接なる
一七　関係あり。[5] 一七最大の苦痛は心の悲愁にして、最大の悪は女の心根悪しき
一八　ことなり。[6] 一八さればいかなる苦痛をも忍ぶべし、ただ心の苦痛のみは然
一九二〇　らず。一九またいかなる悪をも忍ぶべし、ただ女の悪のみは然らず。二〇いか
二一　なる患難も忍ぶべし、ただ憎む者より来る悩みのみは然らず。二一いかなる

4) 本二六・一。一四・一。一九・一六。雅三・二。
5) 一六節はギリシャ語本にはない。しかしシリア語本アラビア語本にはヴルガタ同様ある。
6) 一一節と対照をなしている。

二二　報復も忍ぶべし、ただ敵の報復のみは然らず。二三　蛇の頭より悪しき頭[7]なく、二三　女の忿怒の上に出る忿怒なし。悪しき女と共に住むより、獅子や竜と共に居ることこそ快からめ。[8]

二四　女の悪しきはその面を変え、熊の如くその顔を暗くして、[9]

二五　さながら粗麻布[10]の如きを示す。その近所の人々の只中にて、二五　その夫は呻吟し、声を聞くや[11]控え目に嘆息するのみ。二六　いかなる悪も女の悪しきには及ばず。罪人の運命こそその上に下れかし。二七　舌数多き妻の辯かなる夫におけるは、なお砂坂を登ることの老人の足におけるが如し。二八　女の眉目美きに眼を留むるなかれ、また眉目美しとて女を慕うなかれ。[12]二九　女の忿怒と、虔みなき態度と、恥辱とは大なり。三〇　妻もし上に立てば、その夫に反対す。三一　悪しき女は気を挫けしめ、面を悲しからしめ、心を傷ましむ。三二　夫を幸福ならしめぬ妻は、その手を弱からしめ、その膝を外れしむ。三三　罪は女より始まれり、されば我等は皆、女ゆえに死するなり。[13]三四　汝の水に些かも出口を与うるなかれ、また悪しき女にも外に

7) このヘブレオ語には「頭」および「毒」という意味がある。—8) 箴二一・一九。
9) ギリシャ語本になし。
10) 喪服。默六・一二参照。
11) 他人がかの女の噂をしているのを聞くと。—12) 本四二・六。
13) 創三・六。

三五　出る許可を与うるなかれ。14）三五かの女もし汝の手に縋りて
三六　歩まずば、15）敵の眼前にて汝を辱しむることあらん。三六之
を汝の肉より切り離せ16）これ、かの女の常に汝を虐ぐること
となからんためなり。

## 第二十六章

善き女と悪しき女とにつきて

一　一善き女の夫は幸福なるかな、蓋はその年の数二倍となる
二　べければなり。1）二健気なる女はその夫を喜ばしめ、之が生
三　涯の年を平和に送らしめん。三善き妻は善き分なり。是は
天主を畏るる者の分として、善行の報にと、人に与えらる
四　べし。四人富めるにせよ貧しき2）にせよ、心だに善良なら
五　ば、その面は常に晴れやかならん。五わが心三つの事を恐
六　れたり、また第四の事にはわが面怯えたり。六全市の噂、

14）パレスチナの女達は殆ど外出しない。出る時には覆面する。
15）汝の助け手とならないと。
16）旧約では離婚が許されていた中二四・一参照。

**第二十六章**　1）理由は二節にある。即ち伸よく共に暮らすは、いわば年を二倍するようなもの
2）苦しみが分かたれると、半分の苦しみになるから。

民の一揆、七あられもなき讒言、いずれも皆死よりも堪え難し。八嫉妬深き女3は心の苦しみと憂いとなる。九嫉妬深き女にありては、舌はすべての人を打つ鞭たり。4)一〇悪しき女は、彼方此方に動かさるる一軛の牛の如し。之を捉うるは、蝎5を掴むに似たり。一一酒を好む女は大なる忿怒を招く、6)その恥辱と醜状とは隠すこと能わじ。一二女の多淫はその眼の驕慢なるとにより知られん。一三身をそむけざる娘は、厳しく之を見張れ、恐らくは機会だに得ばその身を汚さん。7)一四いずれにせよ、その眼の虔みなきに注意せよ。彼女汝8)を蔑ろにするも驚くなかれ。一五彼女は恰も渇ける旅人の泉に向うが如くその口を開きて、近傍にある水はいかなるものも之を飲まん、しかしていかなる柵にも凭れて坐し、倦き果つるまではいかなる矢にも矢壺を開かん。9)一六かいがいしき女の愛らしさは、その夫を喜ばし、その骨を肥やすべし。一七その躾は天主の賜物なり。一八聰くして無口なる女、よき

3) これが第四の恐ろしいもの。
4) かの女は夫のことをすべての人に話す。―5) さそり、に刺されると苦痛甚だしく、時には死に至る。―6) かかる女は夫にとつて憤怒のもととなる。―7) 本四二・一一。―8) 親をさす。―9) 自分の快楽慾を満足させるために、あらゆる機会を捉える。

一九　躾を受けたる霊魂には、換うべき物なし。一九聖にして羞らう女は、品よ
二〇　き上にも品よき者なり。二〇たしなみ深き霊魂には、いかなる代価も十分
二一　ならず。二一陽が天主の在す最高き処にさし昇りて世を照らすが如く、善
二二　き妻の美しさもその家の飾りとなる。二二成熟する年頃の面の美しさは、
二三　聖なる燭台(10)の上に光り輝く燈火の如し。二三落着ある女の瞻にて聢と
二四　立てる足は、白銀の台に立てる黄金の柱の如し。二四聖なる女の心にある
二五　天主の誡命は、堅き岩の上なる永久の基の如し。(11)二五わが心二つの事を
二六　悲しむ、また第三の事は我に忿怒を起さしむ。二六そは武人の貧しきによ
二七　りて果つると、道理を弁えたる人の軽しめらるると、二七人の義しきより
二八　罪に移ると、是なり。天主はかかる者を剣に予定し給えり。二八二種の事
難く、また危うしと我に見えたり。商人は怠慢(12)を免れ難く、小売商は
唇の罪を避けて己を義しく保つこと能わざるべし。(13)

10) 聖殿にある。
11) 良き妻の価値を論ずる文の結び。ギリシャ語本にはない。
12) 不正を行うこと。
13) 本節はただヴルガタにしかなく、意味から言えば、次の章に入るべきものである。

# 第二十七章

## 売買および秘密を守ることについての注意など

一　多くの人は貧窮の為に罪を犯す。また富を致さんと図る者はその目を背向く。1)

二　石の合せ目2)の間に枕を打込む如く、売買の間には罪推し入り来る。

三　罪は罪人と共に滅ぼさるべし。3)

四　汝主を畏れて固く身を持せずば、汝の家は速に覆滅びん。

五　篩もてふるう時には、屑後に残るべし、かくの如く人の考うる時には、当惑のみぞ残らん。4)

六　爐は陶工師の器を、患難の試錬は義人等を験す。5)

七　木の手入はその実によりて知らる。

八　人の心の思念より出る言もまたかくの如し。

九　人の未だ言を出ざざる間は、之を讃むるなかれ。蓋は此こそ人の試金石なればなり。

十　汝もし義を追求めば、之を捉えて、誉の衣の如く着、之と共に住むことを得ん。かくてそは永久に汝

---

**第二十七章**　1)正しいこと善いことから、天主から。2)石垣の。―3)罪によつて手に入れた物は、それを得た人と共に亡びてしまう。4)ふるい、でふるうと、穀物の中にどれほどの屑が混つていたかがわかるが、同様に自分について真剣に考えてみると、自分にどれほど欠点があるかが知れる。5)詩一六・三。箴一七・三。智三・六など参照。

一〇 を庇い、審判の日に[6]汝堅き足場を獲べし。一〇鳥は己に似たるものの許に集
一一 まる。かくの如く真理もまた之を行う者等の許に帰り来らん。一一獅子は常に
一二 獲物を窺い待つ、罪もまた不義を行う者に対してかくの如し。一二聖なる人は
一三 日の如く智慧に留まる、されど愚なる者は月の如く変るなり。一三聰からざる
一四 者等の中にありては、時至るまで言を控えよ。されど考え深き人々の中には
一四 絶えず坐すべし。一四罪人等の談話は厭うべし、彼等の笑うは罪の快楽に就き
一五 てなり。一五誓うこと多き話しぶりは頭の髪を逆立たしめ、その不敬は耳を覆
一六 わしむ。一六高ぶる者等の争いには血を流すことあり、彼等の悪口雑言は聞く
一七 に堪えず。一七友の秘密を漏らす者はその信用を失い、己が心の友を獲ること
一八 となからん。一八汝の近き者を愛し、信実もて之と結び合え。一九但し、汝もし
一九 破るは、己が友[7]を滅ぼすに等しければなり。二〇蓋は己が近き者の友情を
二〇 彼の秘密を漏らしなば、之を追い求むるなかれ。二一また汝の友を棄つるは、己
二一 が手より鳥を放つ者の如し、再び之を捕うることを得じ。二二彼を追い求むる

6) 天主の御裁きの日に。
7) ギリシヤ語本は「敵」。意味は「汝は友を敵のように扱った」。

二三　なかれ、そは彼遠く離れたればなり。実に彼は係蹄を遁れ出でたる羚羊の如く逃げ去れり、是その霊魂傷つきたればなり。8）

二四　結ぶ能わず。9）　二三汝最早彼を侮辱にも和解あり、二四されど友の秘密を漏らすは、不

二五　幸なる霊魂に希望の余地なからしむるものなり。二五眴する10）者は不義

二六　を企む、されど誰も之を捨てんとする者なし。二六かかる者は汝の眼に

二七　見ゆる所にては、口に甘きことを云いて、汝の言に感嘆せん、されど

二八　終にはその口を翻して汝の言に躓きを置かん。二七わが憎めることは多

二九　かれど、之にならぶものはあらず、主もまた之を憎み給わん。二八人高

三〇　きに石を投げなばそは彼の頭上に落ち来らん。かく騙し打ちも騙すそ

三一　の人を傷つけん。11）　二九また陥穽を掘る者は、之に陥らん。近き者に対

三〇　して石を置く者は之に躓かん。更に他人に対して係蹄を設くる者は、

三一　之にかかりて滅びん。三〇悪しき謀計は之をなす者の上に回り帰らん、

三一　しかも彼はその何処より已が許に来りしかを知らざるべし。12）　三一嘲弄

8）この説明はヴルガタの附したもの即ちわなで捕えられたかもしかのように。―9）かれの傷に繃帯することができない。

10）偽の友人の動作詩三四・一九。箴六・一三。一〇・一〇参照。―11）ラテン語 divideは「割る」。打傷の時には肉が割れる。

12）天主が罰としてそうはからい給う。二七節参照。

三二　と侮辱とは傲慢なる者のする事なり、報復は獅子の如く彼を待伏せせん。

三三　義人の倒るるを喜ぶ者等は己が係蹄にかかりて果てん。しかしてその死するに先立ち、苦痛彼等を蝕み尽さん。

三四　怒ると猛り狂うとは両ながら憎むべし。罪を犯す人は是等を具えてあらん。13)

## 第二十八章

### 復讐及び喧嘩に対するいましめ—舌の悪用につきて

一　復讐せんと欲する者は、主より復讐を蒙るべく、彼必ずその罪を御心に留め給わん。1)

二　汝の近き者の汝に損害を与えたるを赦せ、然らば汝の罪も、願わば赦さるべし。2)

三　人、人に対して忿怒を藏しながら、なおかつ天主より赦免を求むるか。

四　己に等しき人に憐憫をかけずして、しかも己が罪の赦免を願うか。

五　己、肉に過ぎざる者にして、忿怒を藏しながら、なおかつ天主より憐憫を請うや。誰かかかる者の科の為に執成さんや。

六　汝の終りを憶いて、敵意を棄てよ。

七　蓋は主の

13) 前章同様、この最後の節も意味から言えば次章に入るべきもの。

第二十八章　1) 申三二・三五。マテオ六・一四など。可一一・二五。羅一二・一九。

2) 主禱文の第五の願いを思い合せよ

八　御定めによりて[3]腐敗と死と将に来らんとすればなり。八天主を畏るることを憶えて、近き者を怒るなかれ。九至高者の証詞を憶いて、[4]近き者の過失[5]を蔑むなかれ。一〇争いを避けよ、さらば汝罪を減ずるに至らん。

一一それ、怒り易き人は争いを起し　罪を犯す人は友等に迷惑をかけ、和睦

一二ぎて暮す人々の間に怨恨を撒かん。一三蓋し、火の燃ゆるは森の木の質によ

る、人の忿怒もその権勢によるべし、即ち富あるほどその忿怒は益々激し

一三きを加えん。一三逸まりたる争いは火を燃やし、逸まりたる喧嘩は血を流

一四す。また証する舌は死を来す。[6]一四汝もし火の粉を吹かば、そは火となり

て燃え熾らん。また汝もしその上に唾せば、そは消ゆるならん。しかも両

一五つながら口より出るなり。一五告げ口をする者と二枚舌を使う者とは呪われ

一六よかし、蓋は和らぎて暮す多くの人々を騒がしたればなり。一六更に第三の

一七舌は[7]多くの人々を動揺させ、国より国に散り行かしめ、一七富める人々の

一八堅き城市を滅ぼし、偉大なる者等の家を覆せり。一八そは民の力を分裂せし

3) それを破つた者に報復するため。
4) 敵を救せという掟は、出二三・四、五。利一九・一三にあり。
5) 時々そうするつもりもなく怒りを買つた。
6) これに対しては死刑と定められていた。
7) もう一人の人の舌。

一九　め、強き国々を互解せしめたり。一九この第三の舌は健気なる女等を逐い
二〇　出し、8）彼等よりその労苦して得たるものを奪えり。二〇之に耳を藉す者
は安らぎを得ることなからん、また安んじて交わるべき友を有つことも
二一　なからん。二一鞭による打擲は青痣を生ず、されど舌による打撃は骨を
二二　も砕かん。二二剣の刃にかかりて仆れたる者は多し。されど己が9）舌によ
二三　りて滅びたる者ほどにはあらず。二三幸福なるかな、悪しき舌より害を蒙
ることなき者、その忿怒に陥りたることなき者、その軛を牽きたること
二四　なき者、及びその鎖に繋がれたることなき者。二四実にその軛は鉄の軛
二五　にして、その鎖は青銅の鎖なり。二五その裔す死は最も惨しき死にして、10）
二六　之より寧ろ冥府こそ優れ。二六その続くや久しからず、されどそは義しか
二七　らぬ者の道を支配せん。但し義人等はその焔に焼かれざるべし。11）二七天
主を棄つる者は之に陥らん。そは彼等の衷に燃えさかりて、消ゆること
なかるべし。そは獅子の如く彼等の間に遣され、豹の如く彼等を害わん。

8）妻に対して、離縁状を与えるよう、夫を煽動した。―9）これはギリシャ語本にない。―10）かげ口は最後に死または社会的に葬られる因となる。―11）悪いかげ口は、試錬として天主の許し給う所、しかし天主はその禍が永く続かぬようにして下さるであろう。

二八　二九　三〇

二八 汝の耳に茨の墻をめぐらし、悪しき舌を聴くなかれ。また汝の口に扉と門とを設けよ。12）

二九 汝の金と汝の銀とを融かし合せて、汝の言を量る秤と、汝の口に嵌むる轡とを作れ。

三〇 しかして慎しみて、舌によりて過失をなし、汝を待伏する敵の眼前にて倒るることなかれ、恐らくは汝倒れなば、癒やす能わずして、死に至らん。13）

## 第二十九章

同情して金を貸すことと義を守りて之を返すこと――施与と保証をなすことに就きて

一　慈善を行う人はその近き者に貸すなり、手を伸べて助くる人は掟を守るなり。

二　汝の近き者に、その必要なる時に当りて貸し与うべし。また期限到らば、近き者に返済せよ。

三　言を堅く守り、彼に対して誠実に振舞え、さらば汝は已に必要なるものを常に得べし。

四　借りたる物をさながら拾いたる物2）の如くに

12）ギリシヤ語本「視よ、汝の所有地に茨の垣をめぐらし、汝の金銀を包みまた汝の談話にくびきをかけよ」。

13）この最後の部分はただヴルガタにあるだけ。

第二十九章　1）例えば利子附などに関する掟。

二五・三五以下にある貸

2）それを落とした持主が知らずにいると、ひろつた人の物となつた。

五　思いて、己を助けし人々に迷惑をかけたる者多し。五彼等は受くるまでは与
六　うる人の手に接吻し、約束する時にはその声を和ぐるなり。六されど返済の
七　期限至らば、猶予を乞い、長々しき泣言を云い、非を時運に帰すべし。七し
　　かして返済することを得る場合にも、之を厭い、僅に全額の半を返して、拾
八　い物をしたる如く思わん。八されど然らざる場合には、相手よりその金を詐
九　き取り、咎なきに之を敵とせん。九彼は叱言や悪口を云いつつ返済し、これ
一〇　に報ゆるに、尊敬や善行の代りに侮辱を以てせん。一〇悪意ゆえにあらずして、
一一　貸し与えざる者も多し、是は故なく詐き取らるることを懼れたるなり。一一さ
　　りながら貧しき者に対しては汝一層心を寛大にせよ。彼に施すことを遷延す
一二　なかれ。一二捉の為に3)貧しき者を助けよ、その困窮ゆえに之を空手にて去ら
一三　しむるなかれ。一三汝の兄弟や友の為に金を費せ、之を石の下に隠して徒らに
一四　腐らしむるなかれ。一四至高者の御捉に従いて宝を貯えよ、4)さらばそは汝を
一五　益することと黄金よりも大なるべし。一五汝の旋与物を貧しき人々の心に5)仕舞

3) 申一五・一一以下など参照。
4) マテオ六・一九―二〇参照。
5) 「貧しき人々の心に」の代りに、ギリシャ語本には「穀倉のなかに」とある。

一六　いおけ、さらばそは汝の為に祈りて、汝をあらゆる不幸より救わん。6)
一七　勇士の楯と槍とに優りて、そは
一八　汝の敵に抵抗い戦わん。7)
一九　善き人はその近き者の為に保証をなす、ただ廉恥心を失いたる者は之を棄ておきて顧みざるべし。8)
二〇　保証人の恩を忘るるなかれ、実に彼は汝の為に己が生命を献げたるなり。9)
二一　罪人と潔からぬ者とは、
二二　保証人を避けて逃ぐ。
二三　罪人はその保証人の財産を己が有となす。
二四　また恩を知らぬ心の者は、己を救いし人を棄て
二五　人その近き者の保証をなすも、この者廉恥心を失いたる時は、彼より棄てらるべし。10)
二六　悪しき保証は多くの裕福なる人を亡ぼし、さながら海の大波の如く彼等を動かせり。
二七　そは権勢ありし人々を転々とさまよわしめ、彼等は他国に流浪いたり。
二八　主の御掟を破る罪人は、悪しき

6) ギリシャ語本「そは汝を救い出さん」。—百四・一〇。本一七・一八。—7) 本節がヴルガタでは三つの節数を有しているのはいくつかのラテン語写本に一七・一八、一九の両節がここに繰り返してあるから。—8) 貧者は我らが施しにより給料を支払う雇兵で、彼らは我らのため祈りにより悪魔と戦つてくれる（聖クリゾストモ）。—9) 保証人の恩を忘れるのは、律法に定められた不浄と同様。—10) 支払不能の負債者を入れるべき牢に投ぜられる危険より救つてくれた恩人

二七　保証に陥らん、また多くの事を行わんと企つる者は司直の手にかかるべし。二七 汝の力に応じて近き者を助けよ。また倒れ
二八　ざるよう、已に注意せよ。11) 二八 人の生活において第一に要る
二九　物12)は水とパン、及び陰部を蔽う衣服と家なり。13) 二九 板屋
三〇　根の下にて貧しき食を摂るは、住処なく他人の家にて見事な
三一　る饗応を受くるにいやまさる。三〇 汝少きをも多しとして満
三二　足せよ。しかして出で歩く者なりとの誹り14)を招くべから
三三　ず。三一 家々に客となりて生活すは悲惨なり。客たる処にては
三四　安んじて振舞うことを得ず、また口を開くことも能わざるべ
　　し。三二 彼、15) 恩を弁えぬ者をもてなし、16) 之に飲食せしめん
　　に、17) なおかつ苦き言を聞かん。三三 客よ、行きて食卓を備
　　え、汝の手に有てる物を他人に食せしめよ。三四 わが敬うべき
　　友等の面前より出で去れ。1) 我はわが家を必要とす、兄弟わ

11) 保証して貰つて借りることが要らぬように、分別を以て恩を施せ。—12) 近き者から保証して貰うに及ばぬように、人は生活に必要な物だけで満足すべきである。これは本文にある通りのもの。—13) 陰部を隠すものは衣類の一部。—本三九・三一。—14) 寄食者に対してしばしば浴せられる正当な非難。—15) ギリシャ語本は「汝」。16) この動詞はギリシャ語本にない。—17) 持つて来たものや買い入れたもので。18) かれは自分のもので他人をもてなして後、自分は引きさがらねばならぬ。

三五

が許に宿るなり。」三五 苟も感情ある人にとりて堪え難きは、家ゆえにくさすこと、及び貸主が誹ること、是なり。

## 第三十章

子の教育に就きて—健康は富にまさる—過度の悲嘆は有害なり

一 己が子を愛する者は屢々之を鞭うつ。1) 是、己が晩年に至りて楽しむを得ん為、

二 近き者の戸を叩くことのなからん為なり。2) 二 己が子によく教うる者は、彼ゆえに賞讃せられ、これにより家の人々の中にて誉を得ん。

三 己が子によく教うる者は、敵をして嫉妬ましめ、友の中にて彼により誉を得ん。3)

四 その父死したりとて、さながら死せざる如し。

五 蓋は己に似たる者をわが後に遺したればなり。五 彼、生ける間はこれを見て楽しめり、死する時にも悲しむことなく、また敵の前に恥ずることもなかりき。

六 蓋は、敵を防ぎ家を護る者、友に思を報いる者を遺したればなり。

七 彼は子等の魂の為に4) 己が傷を巻かん、5) ま

第三十章 1) 箴一三・二四。二三・一三。—2) 忘恩の子に拒まれた助けを、求めようとして。—3) 申六・七。4) ギリシャ語本「己が子を甘やかす者は」。—5) あまり溺愛する父親はあとでわが子から数々の苦しみを受

八　た声聞く度にその腹九回せん。八馴れざる馬は馭し難く、我侭なるままに
九　捨て置かれたる子は向う見ずとなるべし。九子を甘やかさば、彼汝を恐れし
一〇　めん。共に戯れなば、彼汝を悲しましめん。一〇彼と共に笑うなかれ、恐らく
一一　は汝嘆き、後に至りて歯咬みすることあらん。一一彼の若き時、之に気侭を許
一二　すなかれ、またその思想[6]を軽視するなかれ。一二彼の若き時にその頸を屈せ
一三　しめ、幼き時にその横腹を打て、恐らくは、彼強情になりて、汝の言に従わ
一三　ず、汝に心痛をかくることあらん。[7]一三汝の子によく教え、彼の為に力を尽
一四　せ、これ、汝が彼の醜き行いによりて、面目を失うことなからんためなり。
一四　貧しけれども健康にして体力強き者は、富みたれども弱くして病に悩む者
一五　にまさる。一五霊魂の健全は正義の聖徳にありて、すべての金銀に優り、強壮
一六　なる身体は無量の富に優る。一六身体健全の富に優る富なく、心の喜悦に優る
一七　快楽なし。一七死は苦き生にまさり、永遠の安息は痼疾あるにまさる。一八味美
一八　き物の閉じたる口に入らぬは、山海の珍味を墓の畔に供うるが如し。[8]一九偶
一九

けねばならぬ。

6) 「性質性向」の義。

7) 本七・二五。

8) 当時からすでに墓の上やほとりに食物を供えた。

二〇　像にとりて供物何の益かあらんや。蓋は食することも嗅ぐことも能わざればなり。9)

二一　二〇主に迫われて10　己が不義の報を受くる者もまたかくの如し。

二二　二一即ち処女を抱きて嘆息する閹者の如く、目のあたり見ながら11)呻くなり。12

二三　二二汝の魂を悲哀に委ぬるなかれ、また思い患いて汝の身を害うなかれ。13)

二四　二三心の楽しみは是人の生命にして、聖徳の尽きせぬ宝庫なり。また人の歓喜は寿命を長からしむ。14)

二五　二四汝己が霊魂をいたわりて、天主を喜ばせ奉り、自らを制えよ。彼の聖徳に15)汝の思を潜めて、悲哀を汝より遠ざけよ。

二六　二五実に悲哀は多くの人を殺す、之にはいささかも益あることなし。16)

二七　二六嫉妬と忿怒とは寿齢を短かからしむ、心配はいまだその時到らざるに老衰を来さん。

二七快活善良なる心は饗宴に際してあらわる、即ちそは之が食物の為に配慮すればなり。17)

---

9) 但一四・六。—10) ここでは病気が罪の罰、すなわち天主の懲らしめとしてある。11) 幸福を。—12) 本二〇・二。13) 箴一二・二五。一五・一三。一七・二二。14) 快活は生命の維持および長壽に貢献する。15) 天主は聖にましますによって、善人を助け給うから。—16) 哥後七・一〇。—17) 高尚な人は、食事の際度を過ごさぬように気をつける。

富に対する欲望に就きて―飲食を節することに就きて

## 第三十一章

一　夜の目も寝ずに富[1]を得んとするは、肉を衰えしめ、その為の心配は睡眠を奪い去らん。二　将来に対する慮りは意見を飜えさしめ、重き病は霊魂を真摯ならしむ。[2]三　富める者は労苦して貨財を集めたり、さればその休息らう時には、己が財に充ち溢れん。四　貧しき者は糧乏しきによりて[3]労働きたり、されど終に至りてもなお貧し。五　黄金を愛する者は義とせられざるべく、腐敗[4]を追い求むる者は之に満たさるべし。六　黄金ゆえに倒るるに至りたる者多し、その美麗は彼等の滅亡となれり。[5]七　黄金は之を斎き祀る[6]者には躓きの木たり。之を追い求むる者は禍なるかな。浅慮なる者[7]、はいずれも皆之によりて亡びん。八　幸福なるかな、富みてなおかつ汚玷なしと認めらるる者、及び黄金を追い求めたる

第三十一章　1)ギリシヤ語は πλουτου すなわち富、ヴルガタは honestatis すなわち面目または高き地位。
2)情欲の力を弱めて。
3)ただ自分だけほそぼそ暮しを立てるために
4)富は時として滅びを招く。―5)本八・三。
6)偶像のようにして。
7)金に執着するような浅はかな者はだれでも

九　ことなく金銭をも財宝をも恃まざる者。九 かかる者は誰ぞ、我
一〇　等彼を讃めん。蓋はその生涯において8)感嘆すべき事をなした
ればなり。9) 一〇それによりて10)験され、全きを得たる者は永久
に栄えん。彼は法を破るべかりしに破らず、悪事をなすべかり
一一　しになざりしなり。11) 一一この故にその財貨は主によりて安し、
一二　聖者等の集会は彼の施与を語り伝えん。一二 汝大なる食卓12)に
一三　就かんか、之に向いて真先に口を開くなかれ。一三「その上にあ
一四　る物は多し」と然云うなかれ。一四 物欲しげなる眼の悪しきこと
一五　を憶えよ。一五 眼よりも悪しく創造られたる物何かある。されば
一六　そは見るに及びて満面に涙すべし。13) 一六 先ず汝の手を差し伸ぶ
一七　るなかれ、恐らくは汝辱しめられて赤面せん。一七 饗宴の時に
一八　は急ぐなかれ。一八 汝自ら近き者14)の好むものを悟れ。一九 汝の
一九　前に出されたる物を、約しき人の如くに受用いよ、これ、多く

8) ギリシャ語本「その民すべての中にて」。―9) このくだりは「富める者」を「人」に変えて、教会から聖務日禱に採用されている。即ちその証聖者の共通文中の讃課の章として。―10) 金銭や財物の使い方で。―11) このくだりは神学上人間の道徳自由を示す典型的な箇所。12) 御馳走がたくさんならべてある食卓。―13) 目のいけない所は、なにかを選び望んでそれが得られない時、泣くことができる点。―14) 他へ。

二〇 食して、憎悪を受けざらんためなり。二〇礼儀ゆえに真先にやめよ。また貪

二一 るなかれ、そは人の気を損わざらんためなり。二一なお、汝もし多くの人の

中に坐せば、彼等に先んじて手を伸ばすことなく、且真先に飲酒を求むる

ことなかれ。15) 二二嗜みよき人は少量の葡萄酒にて足ること如何ばかりぞ。

汝眠れる間もそれによりて不快を覚ゆることなく、苦痛を感ずることなか

るべし。二三不節制なる人には、不眠、呕吐、苦痛あらん。二四節制ある人に

は健かなる睡眠あり。彼は朝まで眠りて、その霊魂もその躬もすがすがし

かるべし。二五更に、汝もし強いられて多く食しなば、中より起ち出でて吐

くべし。16) 然せばそは汝を爽かならしめ、汝已が体に病を来すことなからん。二六子よ、我に聴け、我を軽んずるなかれ、汝終に至りてわが言を暁らん。二七すべて汝の業に速かなれ。さらばいかなる病も汝に来らざるべし。二八パンを吝まぬ者は多くの人の唇の頌うる所とならん、その誠実の証は信頼に値す。二九パンを吝む者に対しては全市怨みの声をあげん、その悪

15) 小アジアの習慣によれば皿にまつ先に手を付けるのは主人役で、客はそのあとでしかそうしなかった。

16) 胃がもたれたと思つたら吐けというのが、昔の医学の勧めであつた。ギリシャ語本になし。

三〇　の証は真実なり。三〇葡萄酒を好む者等に強うるなかれ、蓋は葡萄酒は多くの
三一　人を亡したればなり。17）三一火は鉄の堅きを験す、かくの如く飲み過ぎたる葡
三二　萄酒もまた傲れる者の心を露さん。三二葡萄酒を節するは人々の生活を安らか
三三　ならしむ。汝もし之を程よく飲まば、節制を守る者とならん。三三葡萄酒なき
三四　三五　者にとりて、人生そも何ものぞ。三四生命を奪うは何ぞや。死なり。三五葡萄酒
三六　の元始より創造られたるは、楽しむ為にして、醉う為にあらず。18）三六葡萄酒
三七　は、程よく飲めば、霊魂と心とを喜び躍らしむ。三七醉わざるほどに飲むこと
三八　を節するは、魂をも体をも健かならしむ。三八葡萄酒は飲みすごせば、激昂、
三九　憤怒、及び多くの破滅を招く。三九葡萄酒は飲みすごせば、心を苦からしむ。
四〇　四〇醉えば向う見ずとなりて、浅慮なる者はその為に罪に陥り、また力減じ、
四一　傷害を受くることあり。四一酒宴に臨みては近き者を責むることなかれ。19）ま
四二　たその楽しめる時に之を蔑むことなかれ。四二彼に向かいて侮辱の言を吐くな
かれ、また返済を催促して之を窘しむるなかれ。20）

17）尤一三・四。
18）詩一〇三・一五　箴三一・四。
19）怒りを招かぬために。
20）貸金返済の催促

## 第三十二章

饗宴に対する教訓―事をなすに当りて必ず相談することの利益

一 人々汝を治むる者[1]となしたりとて、思い上るなかれ、彼等の中の一人の如くなるべし。

二 彼等の為に配慮して、然る後坐し、汝の任務を悉く果して始めて席に就け、

三 さらば汝彼等ゆえに楽しみ、感謝の章として冠を受け、集まりたる人々の称讃を獲ん。

四 汝年長ならば、語れ、蓋は、汝にとりて、

五 正確なる知識もて真先に語るは、応わしきことなればなり、但し音楽を妨ぐるなかれ。[2]

六 人もし聴かずば、言を出すなかれ、また時宜を得ざるに汝の智慧を誇示するなかれ。

七 酒宴における音楽の合奏は、黄金の装飾品に鏤められたる紅玉の如し。

八 楽しく程よき飲酒に音楽の旋律あるは、黄金細工に緑玉を嵌めたる印璽の如し。

九 默して聴け、さらば汝その慎しみ深きに由りて好意を得ん。

一〇 若人よ、己の事に就きて殆ど語るなかれ。

一一 汝二度問わるるに及びて、汝の答を出

第三十二章

1) 昔のギリシヤやローマでは、饗応主が饗宴の準備係や運営係に選ばれるのが習慣であつた。

2) 昔の習慣によれば、饗宴を陽気にするために音楽を演奏させた。―約二・八参照

一二　すべし。一二多くの事に、恰も知らざる者の如くになし、默して聽き、かつ
一三　問い質せ。一三大なる人々の中にありては、差し出るなかれ、また老いたる
一四　人々の居る処にては、多く語るなかれ。一四電の前には電光至り、慎まし
一五　の裡には優美あり、されば汝その慎しみ深きに由りて好意を得ん。3）一五起
　　つべき時至らば、躊躇するなかれ、真先に汝の家に馳せ帰り、其処に引き
一六　取り、其処にて楽しみ、一六汝の思うがままに振舞え、4）但、傲り語りて罪
一七　を犯すことあるべからず。一七しかして是等一切の事に加えて主を讃めよ、
一八　主は汝を創造り、その多くの佳き物もて汝を醉わしめ給うなり。一八主を畏
一九　る者はその教訓を受け、また朝未明に彼を求むる人々は祝福を得ん。
一九　法を求むる者は之に満たさるべく、詭計もて事を行う5）者はそれにより
二〇　て躓くべし。二〇主を畏るる人々は正しき判断を得、正義を光の如くに燃え
二一　輝かしめん。二一罪を犯す人は懲治を免れんとして、勝手気侭なる口実を見
二二　出さん。6）二二思慮に富む人はさとしを受くることをおろそかにせじ、異邦

3）かくの如く慎ましやかであれば、話さない内から好意を寄せられる。―4）汝がまだ用事を心にかけるだけ正気であることを示せ。
5）捉を守っているかのように装う。
6）悪欲を通すように、捉を解釈して。

二三 人にして思い上れる者は、畏るべきものをも更に畏れざらん。三 かかる者は、相談する
二四 ことなく事をなしたる後、己が図りし所によりて懲らしめらるべし。二四 子よ、何事をも
二五 相談することなくしてなすなかれ、さらば汝なしたる後に悔ゆることなからん。二五 滅亡
の道を行くなかれ、さらば汝石に躓くことなからん。また嶮しき道に踏み入るなかれ、
二六 そは汝の霊魂を躓かさざらんためなり。二六 汝の子等に注意し、汝の家の者等に気をつけ
二七 よ。二七 汝何事をなすにも、信念もて汝の霊魂を頼め、実にこれこそは誠命を守ることな
二八 れ。二八 天主を信ずる者は誠命に意を向く、彼に依り頼む者は衰えざるべし。

## 第三十三章

天主を畏るるは最良の保証—時も人も天主の掌中にあり—家長に対する勧告

一 主を畏るる者には、悪しき事起らじ。却つて誘惑の時には天主彼を
二 守り、悪より之を救い給わん。二 智者は掟と正義とを厭わず。彼は暴
三 風の中の舟の如くに打砕かるることなからん。三 聰き人は天主の律法
四 に依り頼む。律法は彼にとりて頼むに足るものなり。[1] 四 問に対して明

第三十三章 1) 天主が律法において善人に約束し給うたことをお守りになるから。

らかに答えんとする者は、言うべきことを準備うべし、人はかく依
五 頼したれば、傾聴せん、されば規律を守りて、然る後答うべし。
愚なる者の心は車の輪の如し、またその思念は転る車軸の如し。2)
六 嘲弄する友は、種馬の如し。いかなる乗手の下にありても嘶く。3)
七 すべて太陽より来るに、何とてこの日はかの日に、この光はかの
八 光に、この年はかの年に優るや。そは太陽造られ、法則を守る時、
九 主の知識によりて区別たれたり。しかして主季節とその祝の日と
を変え給いしかば、人々この時に至るまでそれらの日に祝を行え
一〇 り。それらの中には天主が高く大なる日と定め給えるもあり、ま
たそれらの中には主が通常の日の数に加え給えるもあり。かくてす
一一 べての人、アダムの創造られたる泥より、土の中より出で来れり。
一二 主は豊かなる知識もて彼等を区別ち、その道をそれぞれ異らしめ
給えり。4) 三その中には主が祝して高くし給えるもあり、5) またそ

2) 昔にあつては、車輪ばかりでなく車軸も回転した。「愚かの者の考えは始終変るので、頼むに足りない」という意味。
3) 他人の損得を気にかけぬ。―4) 人々の生活事情の不平等は天主の特別な御摂理にもとずく―5) 創九・一五にあるノエ、二五・一にあるアブラハム、二八・一にあるイサーク、およびヤコブなど参照。

の中には主が聖なる者として御傍に置き給えるもあり、6)更にその中には主が呪いて7)低くし、且その分れおる所より8)逐い払い給えるもあり。一三さながら陶工が形造り意の侭にする粘土の、その手にある如し。一四その道は彼の意の侭なり。かく人も之を造り給いし者の手の中にあり、彼は御旨に循いて之になし給わん。一五善は悪に、生は死に対す。かくの如く罪人もまた義人に対す。かく至高者のすべての御作を熟視めよ。両々相対し、一々相対す。

一六我は最後に目覚めたり、恰も葡萄を摘む人々に遅れて、その果を採集むる者の如し。一七我もまた天主の御祝福に希望を置き、葡萄を摘む者の如く、搾酒器を充満せり。9)一八惟よ、わが労苦したるは、独りわが為のみにあらずして、すべて教訓を求むる人々の為なるを。10)一九汝等偉大なる人々及びすべての民よ、我に聴け。また汝等集会の長等よ、耳に留めよ。11)二〇汝の生存うる間は、

6)レヴイの子孫の如く
7)カイン、カム、コレなどのように。―8)バベルの塔を建てた後に
9)聖書記者は、葡萄畑で葡萄を摘み集めて後まだ残っている実がないか調べて見る者のように、自分を見なしている。―10)本二四・四七。―11)聖書では個々の教訓の前に屢々こういう要請がしてある。それは聴き手および読者の注意を新たに促すため。智六・二参照。

二一　汝の上に立つ権を、子にも妻にも、兄弟にも友にも与うるなかれ。12）また
二二　汝の財産を他人に与うべからず、恐らくは汝後悔して、之を願い求むるに
二三　至らん。三　汝の存えて、気息ある間は、いかなる肉をも汝に代わらしむべ
二四　からず。13）三　蓋は汝が己の子等の手に頼るよりも、汝の子等が汝に請い求
二五　むる方ぞ優れば なり。三　すべて汝のなす事において、主導権を有つ者た
二六　れ。二四　汝の栄誉を汚すなかれ。汝の寿命の尽くる日、即ち汝の沒る時に、
二七　汝の譲るべき物を分ち与えよ。二五　驢馬の為には抹と鞭と荷物とあり、奴隷
二八　の為にはパンと懲戒と労働とあり。二六　彼は懲戒によりて働き、休憩を求
二九　む。14）その手を弛めしむれば、彼自由を求む。二七　靴と革紐とは剛き頸をも
三〇　屈せしむ、絶え間なき働きは奴隷を従順ならしむ。二八　心がけ悪しき奴隷
の為には、責苦と足枷とあり。彼が何事をもなさざることのなからんため
に、これを労働に遣せ。二九　実に無為閑散は多くの悪を教えたり。三〇　彼を労
働に用いよ、蓋は彼に応わしければなり。彼もし服わずば、足枷もて之を

12）かれらに全く従属依存することをするな。—13）祖先伝来の財産所有について。
14）ギリシヤ語本「汝の奴隷をして働かしめよ、さらば汝憩いを得ん（彼について安心できるだろう）」。

三一　屈服せしめよ。但しいずれの肉に対しても度を過すことなかれ。無分別に大事をなすべからず。三二もし汝に忠実なる下僕あらば、汝にとりて之を汝の魂の如く見做し、彼を兄弟の如く扱え。15)

三二　そは汝自らの血を以て之を得たればなり。16)　三三汝もし之を不当に責めなば、彼背を向けて逃げ去るべし。三三かく彼起ちて去らば、汝誰に問うべきか、またいずれの道に彼を探ぬべきかを知らざるなり。

15) 腓一〇、一二両節。
16) ここで聖書記者は、一命を賭して捕らえた戦争捕虜のことを眼中に置いている。—本七・二三。

## 第三十四章

夢の空しきこと—経験と天主に対する敬畏との利益

一　聰からぬ人の希望は空しくして頼むに足らず、夢は浅慮なる者等を有頂天ならしむ。二頼むに足らぬ夢幻に意を留むる者は、影を捉えんとし、風を追う者に似たり。三夢に見る物は、是の是に似たること、なお人の映像の人の面前にあるが如し。1)四潔から

第三十四章　1) 鏡はその前に立つ人の顔をそのままに映すが、実在性のない虚像に過ぎない、そのことをさす。

ぬものによりて何物か潔めらるることあらん。また偽る者より何の
五　真理か語らるることあらん。五誤謬の神占、虚偽の吉凶判断、及び
六　悪をなす者等の夢は空し。六また汝の心は分娩する女の如く、幻想
に苦しめらる。2)至高者より遣されたる夢幻にあらずば、之に汝
七　の心を奪わるるなかれ。3)七それ、夢に謬られたる者は多し、彼等は
八　之を頼みて倒るるに至りしなり。八律法の言は虚偽なくして成就せ
九　ん、また智慧は誠ある者の口によりて明らかにせられん。4)九試錬に
逢いたることなき者何をか知る。経験多き人はまた思慮にも富むべ
一〇　し。多く学びたる者は聰明に語らん。一〇経験なき者は知る所少し。
一一　されど多くの事に携わりたる者5)は分別6)を増す。一一試錬に逢いた
ることなき者、如何なる事をか知る。欺かれたる者は巧智に富むべ
一二　し。7)一二我はさまよい歩きて、多くの事と種々の習慣事とを見たり。
一三　一三我時として之が為に死の危険に臨みしが、天主の御恩惠によりて

2) 汝の想像もそのように愚かしい幻を生み出す。―3) 天主から来る夢もある（創二〇・三。三七・五四一・一。民一二・六。母上二八・六）。その場合には別な判断を下すべきである。4) 天主の御掟の謬りなきことが、専ら夢の空しいこと頼みにならないことに対照している。―5) ギリシヤ語「航海したる人は」。6) πανουργία「巧みさ」。―7) 一〇節の反

一四　救われたり。一四天主を畏るる人々の霊はその求め給う所にして、御眷顧により
一五　て祝福せられん。一五実に彼等の希望は彼等を救い給う者にあり、天主の御眼は
一六　之を愛し奉る人々の上にあるなり。一六主を畏るる者は何にも愕かず、また恐れ
一七　戦かざらん、そは主彼の希望にて在せばなり。一七主を畏るる者の霊魂は幸福な
一八　るかな。一八彼誰を仰ぎ望むや、また誰かその力なる。一九主の御眼は之を畏れ
一九　奉る人々の上にあり、主は力ある庇護者、強き支柱、暑熱を防ぐ涼蔭、正午
二〇　の日光を遮る覆布、8)二〇躓きの予防、倒れたる時の援助にて在し、霊魂を高め、
二一　その眼を明かならしめ、健康と生命と祝福とを賜う。二一不義のものの中より献
二二　ぐる人の供物は汚れたり、また義しからぬ者等の嘲弄は嘉せられず。9)二二主は
二三　ただ真理と正義との道を歩みて彼に仕え奉る人のものにて在す。二三至高者は義
二四　しからぬ者等の献物を嘉し給わず、義しからぬ者等の供物を顧み給わず、また
二五　その犠牲の多きに由りて罪を赦し給わじ。10)二四貧しき人々の所有物の中より犠
　　牲を捧ぐる者は、子をその父の眼前にて殺す者の如し。11)二五乏しき者のパンは

復。
8) 詩三三・一六。
9) 箴二一・二七。
10) 箴一五・八
11) 天主は貧者の父。

二六　貧しき者の生命なり。之を彼より騙り取る者は残忍なる
人12)なり。二六汗して13)得たるパンを奪い取る者は、その近
二七　き者を殺すに似たり。二七血を流す者と、日傭取を欺く者と
二八　は兄弟なり。14)二八一人建て、一人毀さば、労苦の外に何の
二九　得る所かあらん。15)二九一人祈り、一人呪わば、天主誰の声
三〇　をか聴き容れ給わん。三〇死者に触れしによりて己が身を潔
三一　ぎし者、再び之に触るる時は、その禊に何の益する所かあ
らん。16)三一己が罪の為に断食し、17)累ねて同じ罪を犯す人
もまたかくの如く、その身を苦しめたりとも何の益あらん
や、誰かその祈祷を聴き容れん。18)

## 第三十五章

天主の御意に適う犠牲—虐ぐる者に対する報復

二一　律法を守る者は奉献を多くす。1)二捉に意を用い、すべて

12)その生きるのに必要なものを奪い取るから、殺すのも同様。13)創三・一九参照。—14)申二四・一四。本七・二二。—15)建つる者とは祈りや犠牲を献げる人毀す者とは呪う人。—16)民一九・一一—一九にある規定によつて。—17)キリストの山上の御説教中の三つにも、祈り、断食施しの三善業が強調してある。その一つを行なつて他を忽かせにすべきではない。—18)彼後二・二二。

第三十五章 1)御捉に従うのは、

三　の不正より遠ざかるは、是、救いをもたらす犠牲なり。2) 即
四　ち不義を離るるは、不義に対する宥めの犠牲を捧げ、罪の為
五　に祈るなり。四 最良き麥粉を捧ぐる者は恩を謝するにて、憐
六　憫を施す者は犠牲を捧ぐるなり。3) 五 不正を離るるは主に嘉せ
七　られ、不義を離るるは罪の為に祈るなり。4) 六 汝主の御眼前に
八　現るるには、空手たるべからず。5) 七 実に是等の事は、すべて
九　天主の御掟なればなり。八 義人の奉献物は祭壇を豊かならし
一〇　め、至高者の御眼前に芳しき香たり。九 義人の奉献物は嘉納
一一　せられ、主その記憶を忘れ給わじ。6) 一〇 快く天主に光栄を帰
一二　せよ、汝の手の初穂を少くするなかれ。一一 すべて献ぐるには
一三　汝の顔を晴れやかならしめ、喜び勇みて汝の十分の一を奉納
　　せよ。7) 一二 至高者に捧ぐるは、その賜いたる所に応じ、汝の
　　手の所得に従い、善き眼もてなすべし。一三 そは主報賞を賜う

主にとつて最も立派な、最も御意に適う献げ物。―詩四九・八―一四など参照。2) 母上一五・二二。―3) 同胞に対する慈善と天主に対する犠牲と同一視してある。4) 罪を赦すのには、遷善の決心が要る。―耶七・三。二六・一三。賽六六・二。5) 出二三・一五。三四・二〇。申一六・一六。―6) 義人が大主の御記憶に留めて頂くために献げる犠牲のこと。利二・二参照。―7) 哥後九・七。士四・九。

一四　者にて在し、汝に七倍[8]を返し給うべければなり。一四悪しき礼物を
一五　捧ぐるなかれ、蓋しかかる物は主之を受納め給わじ。一五また不義の
　　犠牲に望を置くなかれ、そは主審判者にて在し、彼には人の光栄を
一六　顧慮し給うことあらざればなり。[9]一六主は貧しき者に害を加うる人
一七　を承容れ給わじ、虐げらるる者の祈願を聴き容れ給わん。一七彼は孤
一八　兒の祈祷を、また寡婦の嘆き訴うるを、軽んじ給わじ。一八寡婦の涙
　　その頬を流れ下らざるか、その叫び、之を流さしめたる者を責めざ
一九　るか。一九実にその涙は頬より上りて天に至り、願を聴き容れ給う主
二〇　これを喜び給わざるべし。[10]二〇欣びて天主を礼拝する者は承容れら
二一　れ、その祈祷は雲にまでも達せん。二一自ら謙る者の祈祷は雲を貫
　　き徹らん、彼はその達するまで心を安んぜず、至高者のみそなわす
二二　まで後へ退かざらん。二二主もまた猶予せず、義人の為に裁き、義を
二三　行い給わん、即ち最力ある者彼等[11]を勘忍せずして、その背を打ち

8) 聖書に度々出てくる七という数は、「何倍も」の意。シリア語本では一万倍とさえ言つてある。
9) 申一〇・一七。代下一九・七。百三四・一九。智六・八。徒一〇・三四。羅二・一一。加二・六。西三・二五。彼前一・一七。
10) 涙を流させた者に対して怒り給う。本節はギリシャ語本になし。
11) 義人でなく虐げる者。ギリシャ語本「無慈悲なる者共」。

砕き給うべし。二三更に彼は異邦人等に讐を復して、終に傲る者を全く除き去り、義しからぬ者の笏を折り、二四人々の行為の侭に、アダムの所業に従い、12）その僭越に応じて、彼等に報い、二五御民の訴訟を裁き、御憐憫もて義人等を喜ばしめ給うに至らん。二六患難の時における天主の御憐憫は、早魃の時における雨雲の如く喜ばし。

12）ギリシャ語本になし。アダムとはすべての人間のこと。かれらの業は罪であつて、その図る所は天主の御掟に対する不従順。

## 第三十六章

天主の教会の為の祈—善き心、善き妻に就きて

一万物の天主よ、我等を憐み、我等を顧み、我等に御慈悲の光を示し給え。二また汝を慕い奉らざりし諸国の民に、汝を畏るる念を起さしめ給え、これ彼等が汝の外に天主なきを知り、且、汝の偉大を語り伝えんがためなり。三異邦の民に向いて御手を挙げ、彼等に御力の程を示し給え。四実に汝は彼等の眼前にて我等に聖なる者と仰がれ給いし如

五　く、また我等の眼前にて彼等に大なる者と崇められ給わん。1) 五そ
は主よ、汝の外に天主なきことを我等が知り奉れる如く、彼等も
六　汝を知るに至らんためなり。六御徴を新にし、更に奇蹟2)を行い
七八　給え。七御手と御右腕とに光栄あらしめ給え。八御憤りを発し、
九一〇　御怒りを注ぎ給え。九仇を除き去り、敵を打ち懲らし給え。一〇彼
等をして汝の奇しき御業を語り伝えしめんために時3)を早め、終
一一　を忘れ給うなかれ。4) 一一免れたる者は焔なす御怒りに焼き尽され、
一二　御民を虐ぐる輩は滅亡に至れかし。一二我等を除きて他に何者も
一三　なし」と云う、敵の侯伯等の頭を蹂躙り給え。一三ヤコブの支族5)
　　を悉く集わしめ給え。そは彼等が汝の外に天主なきを知り、且汝
　　の偉大なる御業を語り伝えんためにして、また汝、始より然りし
一四　如く、彼等を己が分となし給うべし。一四汝の御名の称ばるる御民、
一五　即ち汝がその長子6)に擬え給えるイスラエルを憐み給え。一五汝が

**第三十六章**　1) 天主は御民に罰を下して以て御自分の聖なることを示し給うたが、異教徒に対しても同様にそうなさる。答。―2) ユデアの昔の歴史に、沢山例が載つているのと同様な奇跡。―3) 報復の時 4) ギリシヤ語本「(太祖たちになし給える)御誓を思い出で給え」。5) 当時彼らは、中東地方、エジプト、ギリシヤ、南欧に流寓していた。―6) 出四・二二を暗示す。

一六　聖所となし給いし都イエルサレム、汝が鎮まり坐す都[7]を憐み給え。一六 得も
一七　云われぬ汝の御言をシオンに、汝の御光栄を御民に、満し給え。一七 始より
　　汝に創造られし者[8]なる人々に御証を賜い、往時の預言者が汝の御名によ
一八　りて告げたる預言を成就し給え。一八 汝を待ち焦るる人々に報い給え、そは
　　彼等が汝の預言者等の頼むに足ることを悟らんためなり。また汝の下僕等
一九　の祈祷を聴き容れ、一九 アーロンが汝の民に与えし祝福に適わしめ、我等を
　　義の道に導き、地に住むすべての者に、汝が世々に亘りて照覧し給う天主
二〇　にて在すことを知らしめ給え。[9] 二〇 胃はあらゆる食物を納む、されど或食
二一　物は或食物に優るなり。二一 口蓋は野獣の肉の味を、聴き心は虚偽の言を、
二二　識別く。二二 曲れる心は他に悲嘆をかけん、されど経験ある人は之に抗わ
二三　ん。二三 女はいかなる男にても満足せざるべからず、[10] されど或娘は或娘に
二四　優るなり。二四 女の眉目美きはその夫の面を晴れやかならしめ、人のいかな
二五　る欲望よりも強き憬れを起さしむ。二五 その舌にもし他を宥め和ぐる力[11]と

7) その御住居としての聖殿
8) 天主に選まれた被造物たるイスラエル人。—9) 民六・二四。
10) 自分で選ぶことができないから。何となれば昔の習慣では、父親が娘に婿を選び与えた。但し男子は自分で嫁選びができた。—11) 女性の性質は、

深き情とあれば、その夫は普通の人の子等に似ぬ幸福者なり。

二六　善き妻を有つ者は、財の有ち始めにして、その女は彼に適う助力者、12) また彼の凭りて以て憩うべき柱なり。二七　垣根なきところ、所有物掠め去らるべく、妻なきところ、人窮乏して嘆息す。二八　堺13) なくして、何処にせよ暗くなりし処に宿る者を、誰か信頼せん。かかる者は、兇器を佩びて市より市へ流れ歩く強盗14) の如し。

舌を用いる時、特に現われる。—12) 創造主の御言葉を暗示す。創二・一八参照。—13) 「住む家」の義。—14) 他の家庭に対して。

## 第三十七章

### 友人及び相談相手を選ぶこと—健康上の注意

一　いずれの友も皆云わん、「我もまた友誼を結びたり。」と。　されど友とは名のみの友あり。死するまでにはこれによりて憂悶生ずるに非ずや。二　即ち仲間や友人の翻りて敵となることあるべし。三　ああ、悪むべき僭越よ、汝抑々何処より生じ来りて、悪意と欺瞞ともて地を蔽わんとはする。四　或仲間は友に歓喜ある時には之と共に喜べども、1) 患難の時には彼に背くに至る。

第三十七章　1) 真正ならぬ友のこと（五、六両節）。

五　或仲間は己が腹の為に2)友に同情し、楯を取りて敵に抵る。六　汝心に汝の友を忘るべからず、己が富むに至りても之を等閑にするなかれ。3)七　汝を陥れんとする者には事を諮るなかれ、汝を妬む者等には汝の計画を秘めおくべし。八　顧問はいずれも皆助言を与う、されど己の為を図る顧問あり。九　顧問に対して用心せよ、予めその求むる所を知れ、蓋は彼先ず己の為を慮るべければなり。一〇　恐らくは彼地に杭4)を打込みて、汝に云わん、一一「汝の取る途や善し。」と。しかも相対して立ち、汝に起る事を見んとするなり。5)一二　不敬なる人と聖なる事に就きて、義しからぬ者と正義に就きて、女とその妬める相手の女に就きて、臆病者と戦争に就きて、商人と取引に就きて、購買者と売却に就きて、怨む人と感謝に就きて、共に談れ。6)一三　また不敬なる者と信心に就きて、不正直なる者と正直に就きて、畑仕事をする者と様々の仕事に就きて、一四　更に年極めの仕事を

2)自分の利益のために。―3)真の友情なら財を分け与えずにおられぬ。―4)足が躓くように。

5)かれは自分が杭に躓かないよう共にゆかない、ただ友人だけを躓かせたいのである。―6)ギリシャ語本「語るなかれ」。ヴルガタの言い方は前後の関係や結びの句一四節から明らかにわかるように、皮肉である。

一五 する者と年末に就きて、怠惰なる下僕と労多き仕事に就きて、共に談れ。

一六 すべて諭る時には、是等の者を意に介くるなかれ。一五ただ誰にもあれ、天主に敬畏を抱けりと汝が知る聖なる人を、絶えず頼りとせよ。一六そは心ばせの如く、7)汝が暗闇にて躓かん時汝の爲に憂うる人たるべし。

一七 一七また汝の身に、よく考え慮る心8)を備えよ、蓋し、汝にとりて之に優るもの、他にあらざるなり。一八聖なる人の心霊は時として、高処に坐して観

一八 望に当る七人9)の見張よりも、よく真相を告ぐることあり。一九なお是等

一九 切の事に加えて、至高者に、その汝の道を真理に向わしめ給わんことを願

二〇 え。二〇凡て事を作すに当りては、真理の言を汝の先導とし、10)何事を行う

二一 にも、揺ぎなき計画を先とすべし。二一悪しき言は心を変らしめん、これより四種の事生ず、善、悪、生、死、即ち是なり。しかして舌こそ常に之等

二二 を宰るものなれ。多くの者に教うる慧しき人にして、己が霊魂を些かも益

二三 することなき者あり。二三多くの者に教うる老巧の人にして、己が霊魂を益

7) 敬虔のほかに、かれが汝に友情を以て結ばれることが必要。

8) 人。すなわち忠友。

9) 聖書によく出てくるように完成の数。

10) ギリシャ語本「いずれの業を始むるにも熟考(λογίζου)をせよ」。

二三 するもあり。三三詭弁を弄する者は憎むべし。彼はすべてに事欠かん。11) 二四 かかる者には主より恩寵の与えらるることなし、蓋は彼、全く智慧を欠けるに出りてなり。二五 己が為を図るに賢き賢者あり、その聰明の成果は称讃すべし。二六 賢人は己が民に教う、その聰明の成果は信頼するに足る。二七 賢人は祝福に満たされ、見る人々之を称讃せん。二八 人の一生は日数限りあり、されどイスラエルの日は算うること能わず。二九 賢者は民の中に誉を得、その名は永久に生くべし。三〇 子よ、汝、生ける間に、己が霊魂を検べ、悪しき所あらば、之に力を添うるなかれ。三一 蓋はすべての事、すべての人に益ありとは限らず、あらゆる事、あらゆる魂12)を悦ばしむとは限らざればなり。三二 いずれの饗筵に臨みても食を貪るなかれ。三三 いかなる食物に対しても度を過すなかれ。三三 蓋は食物の多量によりて病むことあり、貪食は呕吐を催すことあればなり。三四 食い過ぎて死したる者多し、されど節制を守る者は寿命を長からしむべし。

11) 彼はパンを求めてもそれを得るに値せず。
12) 人。

# 第三十八章

## 医師及び医薬に就きて―病気の時の心得と死者を悼む途―労働者及び工人に就きて

一　一 医師は必要なるに由りて之を敬まえ、実に至高者之を創造り給えり。

二　二 そは癒ゆるはすべて天主より来り、彼は王より賜物を受くべければなり。

三　三 医師はその技倆によりて出世し、偉大なる人々の眼前にて賞讃を博せん。

四　四 至高者地より医薬を創造り給えり。されば賢き人は之を厭わず。

五　五 苦き水、木によりて甘くなりしにあらずや。

六　六 そはかかる物の効能の人々に知られんためなり、即ち至高者その奇しき御業により崇められんとて、人々に知識を授け給えるなり。

七　七 是等によりて苦痛を和げ、癒すべし。即ち薬剤師は以て痛みを和ぐる調合剤を作り、効験ある膏薬を調合すべし。その仕事にはしなからん。

八　八 蓋は天主の平安地の面に遍ければなり。

九　九 子よ、汝の病める時には己が身を粗略にせずして、主に祈れ、さらば彼汝を癒し給わん。

一〇　一〇 罪を離れて、汝の手を正しく

第三十八章 1) 薬の調製に対しては、王さえも報酬を与える。 2) 出一五・二五 3) 自然界にある奇効ある薬によりて。―4) 彼はさまざまな調合や工夫によつて新しい薬を求める。―5) 賽三・八・二以下。

一一　し、すべての科を除きて汝の心を潔くせよ。6）一二芳しき香と、記念の小麥粉と、肥えたる供物とを献げて、然る後医師を招くべし。

一二　一三蓋は主彼を創造り給いたればなり。その術必要なるに由りて、之を汝より斥くるなかれ。一三蓋しその手にかかるべき時あり。一四彼等乃ちその天職の為に、7）彼等によりて苦痛鎮まり癒ゆるに至らしめ給わんことを、主に向かいて、切に願うべし。一五己を造り給いし者の御眼前にて罪を犯す者は、医師の手にかからん。一六子よ、死者に対いては涙を流し、大なる不幸に逢いたる如く、嘆き始むべし。しかして分に応じてその屍体を包み、之が埋葬を粗略にすべからず。8）一七次いで誹らるる懼れあるにより、一日の間、彼を悼みて激しく泣き、然る後悲愁を晴らすべし。一八誹らるる懼れあるにより、その人に応じて、或は一日、或は二日、哀悼せよ。9）一九蓋し悲愁は死を早め、力を挫き、心の憂愁は人を頸垂れしむればはなり。10）二〇野辺の送

6）病気が罪の結果であることも時々あるから。一五節参照。
7）イスラエルでは医術を施すのは大抵レヴイ人で、彼らは薬を与えると共に祈禱もした。―ギリシヤ語本「（病者の）命を存らえしめんために」。―8）死者を葬ることはいつも慈善の業とされて来た。今もなおそうである。
9）近親の行なう普通の服喪期間は七日。
10）箴一五・一三。一七・二二。

二一　りをしても悲愁は去らず、貧しき者の生活はその心のままなり。11）

二二　しみに汝の心を奪われずして、之を汝より逐いはらい、最期を憶え。

二三　そを忘るるなかれ、是、再び帰り来ることなければなり。汝かれを益

二三　する所更になくして、己が身を害すべし。二三「汝わが12）運命を憶え。実

二四　に汝の運命もまたかくの如くなるべし。昨日は我が身の上、今日は汝の

二五　身の上にこそ。」二四死者の憩える時、その追憶も休ましめよ。彼の霊の去

二六　る時、彼のことにつきて己を慰めよ。13）二五律法学士の智慧は閑散なる時

二七　に養わる。働くこと少き者は智慧を得べし。二六鋤を執る者、突きて牛を

二八　追う棒を誇となし、己が仕事に沒頭して、牛の仔のことのみ語る者、い

かで智慧に満たさるることあらんや。二七かかる者は畝をすき返すことに

心を傾注がん、その寝もやらず思う所は、牝牛を肥やすことなり。二八また

昼夜を分たず働くいずれの工匠も、建築家も、14）印璽に彫刻を施し、そ

の絵模様に変化を与えんと頻りに勉むる者も、皆然り。かかる者はその

11）ギリシャ語本「その心に逆らう」、即ち望むようではない。「貧しき者の」とは、即ち友人の死によつて貧しくなつた人の

12）死者自身の言葉。―13）母下一二・二一。

14）頭を使う職業でない手仕事の内、著者は特に印刻、鍛冶、および製陶を例としてあげる。

二九　絵模様に心を奪われ、寝もやらずして作品を仕上げん。二九鉄砧の傍に坐して鉄を鍛うることを思う鍛冶もまた然り。火気にその肉を蝕まれ、炉の熱と闘う。三〇その耳には鎚の音断えず、その眼は作るべき器具の模型に注がる。

三一　彼は作品を仕上ぐることに心を奪われ、寝もやらず仕上ぐるまで之を磨く。

三二　坐して製作に当り、足もて旋盤を廻す陶工もまた然り。彼は常に己が仕事の為に苦心し、すべてその工作を数に従いてなす。三三彼は腕もて粘土に形を与え、足もてその塊を捏ね柔らぐ。三四彼は釉薬の完成に心血を注ぎ、寝もやらず窯を潔めん。三五是等の者は皆己が手を頼みとし、いずれもその技術に賢し。三六凡そ是等の者なくんば城市は建たず、三七人々そこに住むことも、そこを逍遥することも能わず、集会にも来らざるべし。三八彼等は裁判官の席に坐することもなく、裁判の制度を知ることもなく、教訓や意見を公けに語ることもなく、箴言の説かるる処に姿を現すこともなからん。三九却つて世の物の創作に執着し、己が技倆を揮うことを願わん。彼等15）はその心魂を傾けて、

15）この最後の文章は、ギリシャ語本では次章の冒頭になつていて、「おのが霊を尽くして至高者の御掟を究むる者はこれと異なる。」と言うのである。

至高者の律法を探り究むべし。

## 第三十九章

賢者の行ふ事—天主はその御業の故に讃め称うべし

一賢者はあらゆる古人の智慧を探ね、予言者等に親しまん。二彼は名ある人々の説を心に留め、また譬話の妙味をも考え究めん。三彼は箴言の奥義を探ね、譬話の秘義に通ぜん。四彼は偉大なる人々の中に入りて仕え、1)君侯の眼前に現れん。五彼は他の民の国々を経歴らん、蓋は人々の中にて善悪を実際に知らんとすればなり。六彼は朝未明より覚めて、己を造り給える主に心を揚げ至高者の御眼前にて祈らん。2)七彼は祈らんとてその口を開き、己が罪科の為に願わん。3)八実に偉大なる主、もし欲み給わば、彼に聰明の霊を満たし、九次いで御智慧の言を雨の如く注ぎ給うべし。されば彼祈祷の時に、主を讃美せん。一〇主は彼の思慮と知識

**第三十九章** 1)真の智者は、偉い人のそばに居ると、いろいろ教を受ける機会が得られるので、そういう人に仕えようとする。—2)智慧を得る手段の一つとして、朝早くから既に天主の御啓示の默想や祈りをしなければならぬ。—3)罪に由り自分の祈願が聽き容れられそうにもないから。

一一　とを導き給うべく、彼は主の玄義を思いめぐらさん。一二彼はその学びた
一二　る知識を公けに表し、主の契約の律法を誇とすべし。一三多くの人々その
一三　智慧を讃め称えん、かくて彼、世々の後まで忘れられざるべし。一三彼の
　　記憶は消ゆることなく、その名は代々より代々に亘りて誦わるべし。
一四一五　一四国々の民その智慧を語り、集会また彼の讃美を告げん。一五彼生存えん
一六　か、千人に優る名を遺すべく、安息わんか、また福利を享くべし。一六我
　　はなお思いめぐらして談らん、我実に熱心に充たされたればなり。4)
一七　一七声ありて曰く、「汝等天主の子等よ、5)我に聴け、水の流の辺に植え
一八九　たる薔薇の如く蕾を出せ。一八リバノン6)の如く、芳しき香を放て。一九百
　　合の如く花を開きて薫を放ち、嘉せらるべく葉を出し、歌もてたたえ、
二〇　主をその御業ゆえに頌め奉れかし。二〇その御名を崇め、汝等の唇の声も
　　て、唇の歌もて、小琴もて、彼を讃美し奉れ。しかしてその讃美に際し
二一　てはかく云うべし、　二一すべて主の御作はいとも妙なり。7)　二二水は御言

4) ギリシャ語本「われは箴言によりて、月の如く満てり」。
5) divini fructus は「天主の実」の義、即ち天主の子等。
6) Libanus の第一義はリバノンの山。第二義はそこの樹木から得られる乳香。
7) 創一・三一。可七・三七。

に応じて堤の如く立ち、御口の語に従いて水の溜池の如くなりぬ。8)

二三　二三そは御命令によりて御旨成り、救い給うに当りて妨ぐるものなければなり。二四すべて肉の所行は御前にあり、一つとしてその御眼には隠れなし。二五彼は世々より世々に至るまで照覧し、その御眼前には奇しき事なし。二六「是は何ぞ」或は「そは何ぞ」と云うべからず。蓋はすべての物それぞれの時機に当りて用あればなり。二七主の御祝福は河の如く9)溢れ漲り、二八乾ける地に洪水の如く満ち渡れり。その御忿怒もまたかくの如く、主を慕い求め奉らざりし国々の民に臨まん。10)二九主水を干し給いしにより、地乾き、その道直くなりて彼等の旅路となりしが、罪人等もまたかくの如く、御忿怒によりて躓きたり。11)三〇善き物は始より善人の為に創造られたり。善き物と悪しき物との悪人の為なるもまたかくの如し。三一人々の生くるに要する主要なる物は、水、火、鉄、塩、乳、小麥粉のパン、蜜、葡萄の汁、油及び衣服なり。12)三二是等は皆、聖なる

8) これは紅海およびヨルダン河を渡つた時の奇跡を思い出して言う。本節後半は創造の時天主の御命令によつて水が集まつたことを考えている。―9) ヘブレオ語本「ナイル河の如く」。
10) 創七・一一。
11) 出一四・二二
12) 本二九・二八

三三　人々には善き物なれども、不敬なる輩や罪人等には悪しき物となるなり。

三三　復讐の為に創造られたる風あり、その怒るや、手酷き責苦を加う。13)

三四　滅亡の時には是等力を注ぎて、是等を造り給いし者の御忿怒を宥めん。

三五　火と雹と、饑饉と死と、是等はすべて復讐の為に創造られたり。

三六　野獣の牙、蝎、蛇、及び不敬なる者に報復して之を絶滅する劍もまた然り。

三七　是等は主の御命令を悦び、地上にありて必要ある時を待構え、14)

三八　その時至らば御言に背くことなからん。

三九　この故に我は始より意を定め、是等の事を思いめぐらし考え慮りて書き遺せり。

四〇　主の御作はすべて善し、いずれの作も時に応じて用あるべし。15)

四一　「これはかれよりも悪し」と云う能わず、蓋は万の物その時に応じて是と認めらるべければなり。

四一　されば今、汝等心を尽し口を極めて、かれを讃め、主の御名を頌え奉れ。

13) 他の説によれば、「spiritus」とは天主が人間の処罰に用い給う天使か悪魔かとにかく霊をさすと。—14) 主が必要とし給うに従い。—15) 創一・三一。可七・三七。

# 第四十章

人生の悲惨を和ぐるは天主の恩惠と主を畏るる念となり

一　すべての人の為に大なる労苦定められ、アダムの裔等に重き軛かかりて

二　その母胎を出でし日より、一切の母[1]に葬らるる日にまで及ぶ。

三　その思いわずらいと心の不安とは、将来の予想と臨終の日とに関係る。

四　光眩き玉座に坐する人より、地の上、灰の中に押しひしがれたる者に至るまで、

五　紫の衣を纏い冠を戴く人より、粗き麻布に身を包む者に至るまで、忿怒、嫉妬、騒擾、不安、死の恐怖、絶間なき憤激や争闘は、

六　また臥床に休む時にも、夜の夢は、その意識を擾す。

七　その休息は少くして殆どなきが如く、それより眠りても、見張する昼に異ならず。

八　その心の幻影に脅さるること、さながら戦闘の日の落人の如し。眼覚めて安堵したる時には、その故なき恐怖なりしに驚くなり。

九　人より畜生に至るまで、凡そ肉体ある物にありては皆かくの如し。罪人等にありては之に七倍[2]す。

第四十章 1) 土のこと。アダムの体が土で造られたから創二・七参照

2) 聖書で屢々そうである如く、七は完成の数。それで「何倍も多い」の意。

一〇　うるに、死亡、流血、争闘、剣難、圧迫、饑饉、破滅、災厄などのことあり。3）

一〇是等は皆義しからぬ者の為に定められたり、

一二　洪水の出でたるもまた彼等ゆえなり。一二すべて土より出でたるものは土に帰り、水は悉く海に戻らん。4）

一三　凡そ賄賂と不義とは失せ去るべく、誠実は世々に存すべし。一三不義なる者の持物は河の如く涸れ、雨降る時の大雷鳴の如く轟き過ぎん。一四己が手を開かば5）楽しむを得べし、されど御掟を破る者は最後に衰うべし。一五不敬なる者の裔は枝6）の繁ることなく、その穢れたる根は岩の顛にありて音を立てん。7）一六あらゆる水の辺、及び河の岸にある青草は、すべての草に先だちて引き抜かるべし。

一七　慈愛は祝福の楽園の如く、憐憫は世々に亘りて存す。一八自給自足する働く者の生活8）は楽しかるべく、汝その中に宝を見出さん。9）一九子等と城市の建設とは人の名を遺すべし、されど咎

3）本三九・三五、三六。
4）本四一・一三。伝一・七。―5）わいろとしての贈物を受取ろうとして。
6）子孫。―7）悪人の子孫は深く根を張ることのできないけわしい岩の上に生えたものに似ている。
8）ヘブレオ語本ではここから対句が十続き、その中に物事が三つずつならべてあるが、これは教訓書によくある書き方で、第三のものが一段と優れていることを示すため。
9）また大いに価値もある

二〇 むべき所なき妻はこのいずれにも優る。二〇葡萄酒と音楽とは心を愉しまし
二一 む、されど智慧を愛するはこのいずれにも優る。二一管と絃とは床しき旋律
二二 を奏ず、されどやさしき舌はこのいずれにも優る。二二汝の眼は愛らしき眉
二三 目と美しきとを慕う、されど種を播きたる畑の青みわたれる[10]はこのいず
二四 れにも優る。二三友と仲間とは機あれば相逢う。されど妻のその夫と共に居
二五 るはこのいずれにも優る。二四兄弟は患難の時に助け合う。されど憐憫[11]は
二六 彼等に優りて救う所あらん。二五金銀は足を確く立たしむるものなり、され
二七 ど好き智謀はこのいずれにも優る。二六富と勢力とは心を高ぶらしむ、され
二八 ど主を畏るるは是等に優る。二七主を畏るれば乏しきことなく、之だにあれ
二九 ば援助を求むるに及ばず。二八主を畏るるは祝福の楽園の如し、人々之にす
三〇 べてに優る光栄を被せたり。二九子よ、汝の生ける間乞食となることなかれ、
実に乞食となるよりは死するこそよけれ。三〇他人の食卓を窺う人は、その生
活、生活と見做すことを得ず。蓋は他人の食物もて己が生命を維げばなり。[12]

10) 何となればこれは快感と共に利益をも与えるが、前二者は快いだけであるから

11) 何となればこれは天主の御祐助を得させ、天主の審判の際に我らの助けとなるから。一七節参照。

12) ギリシャ語本「かれは他人の食物もて身を穢すなり」。

三一 三二 三三 三一されどよき躾けと教育とを受けたる人は、自ら生計を立つ。三二食を乞うは浅慮なる者[13]の口に甘からん、されどその腹には火燃ゆべし。[14]

## 第四十一章

死を憶うこと―汚名と美名とにつきて

一 ああ死よ、汝を憶うことは如何ばかり苦々しきぞ、己が富に安んぜる人にとりて、二 万事順調に運び、且なお食物を攝ることを得る、[1] 憂なき人にとりて。三 ああ死よ、汝の宣告は喜ばしきかな、窮迫せる人にとりて、力衰えたる者にとりて、四 老朽ちたる者にとりて、万煩いある者にとりて、また忍耐を失える絶望せる者にとりて。五 死の宣告を恐るるなかれ。汝の前にありたる者と汝の後に来るべき者とを憶え、この宣告は主よりあらゆる肉に下さるるなり。六 至高者の御意に適うにあらずして、また何事か汝に臨まんや、その十年たると、百年たると、若しくは千年たると、七 蓋し冥府には生涯を数

13) ヴルガタの「imprudentis」はギリシヤ語「破廉恥なる者」に相当するimpudentisの書き違えであろう。―14) 飢えの激しさ。

第四十一章 1) 健康のしるし。

八　うることなきなり。2) 八 罪人の子等3)は憎むべき子等なり、不敬な
九　る輩の家と交わる者等もまた然り。 九 罪人の子等の嗣げる家産は
一〇　滅ぶべく、彼等の裔は絶えず恥辱を受くべし。 一〇 不敬なる父は、
一一　その子等の怨み嘆く所とならん、そは彼によりて彼等汚名を被せ
一二　られたればなり。 一二 禍なるかな、汝等至高き主の律法を棄てし不
一三　敬なる人々。 一三 汝等は生るる時にも呪詛の中に生るべく、死する
一四　時にも汝等の受くべきものは呪詛たるべし。 一四 すべて土より出で
一五　たるものの土に帰る如く、不敬なる者も呪詛より滅亡に至らん。4)
一六　人々を悼むはその肉体に対してなり。5) されど不敬なる者の名
一七　は滅び去るべし。 一五 美き名の為に意を用いよ、蓋は是こそ、幾千
の貴き大なる宝に優りて、永く汝の許に存すればなり。 一六 善き生
涯は日数に限りあり、されど美き名は永久に残るべし。6) 一七 子等
よ、安んじて7)規律を守れ。蓋し隠れたる智慧と、見えざる宝と、

2) あの世で問題になるのは、この世における生涯の長さではなく、ただ生き方だけ。
3) 心がけの点でも父に似ている。―4) 本四〇・一一。―5) 罪人の死骸（八節参照）に対しては哀悼服喪を行なうが、それでもかれらの名は消滅する。―6) 何となれば徳は天主の御もとにおいても美名を得るから。―7) なんじらが放埒の責を問われないように。

一八　このいずれにも何の益する所かある。8）一八己が愚鈍を隠す人は、己が
一九　智慧を隠す9）人にまさる。一九されば、われわれが今口より出さんとする事を
二〇　恥辱とせよ。二〇蓋し、万事に羞恥の念を有つはよからず、またすべて
二一　の事すべての人に確かに10）悦ばるとは限らざるなり。二一父母11）に対し
二二　ては私通を、諸侯及び権勢ある者に対しては虚言を恥じよ。二二君主及
二三　び裁判官に対しては慾を、集会及び民に対しては不正を、二三同僚や友
二四　人に対しては不義を、また汝の住める処にては、12）二四天主の真理とそ
二五　の契約との故に盗みを、なおパンの上に肘を突くことを、13）出納に当
二六　りては人を欺くことを、二五汝に挨拶する者等に対しては沈黙を、更に
二七　娼婦に目を注ぐこと、親戚に顔を背くることを恥じよ。二六汝の近き者
二八　に面を背くるなかれ、また一部分たりとも物を取りて、之を弁償わざ
　　ることを恥じよ。二七他の人の妻に目を注ぐなかれ。またその婢女を訪
　　ぬることなく、之が臥床に近づくことなかれ。14）二八友等に対しては侮

8）本二〇・三二。
9）言葉や行為に現わさない。—10）当然、本当に。
11）ここでは、その過失を罰すべきであると思う人々をさす。—12）盗みをすると、その人は住んでいる所で名誉や好い評判を落とし、その地で信用を全く失なってしまう。—13）貧者に対する無情冷酷
14）マテオ五・二八

辱の言を恥じよ。物を与えし後に非難することなかれ。15)

## 第四十二章

恥ずべからざる事―天主の御業の讃美

一　秘密なる話を打明けられたる時、聞きたる事を再た他に云うなかれ、さらば汝真に恥ずる所なく、すべての人の眼前に寵愛を得べし。汝、次の事を恥ずべからず、人を顧慮して罪を犯すなかれ。1)

二　至高者の律法とその契約、2)

三　不敬なる者を裁く判決、3)

四　同僚や旅人等との談話、4)

五　友等の遺産の贈与、四　秤と分銅との正確、5)

六　収入の多少、五　買うと売るとの不正、子等を屢々懲らすこと、悪しき奴隷を血の流れ出るまで鞭打つこと。6)

悪しき妻に対しては、封印する

15) そうでなければ、折角物を与えても善行にならない。

第四十二章　1) 利一九・一五。申一・一七。一六・一九。箴二四・二三。雅二・一。―2) 本書はまず、異邦人の中で暮らしているユデア人のために書かれたので、この教訓は殊に重要である。―3) かれに罪がない場合には無罪の宣告も。―4) 親戚他人、すべての人に対する平等の判断と言明。殊に訴訟において然り。―5) ヘブレオ語本「はかりの塵を掃除し、エファや分銅にする石を拭うこと」。―6) 子どもの躾けについては、本三〇・一―一三、下僕の

七　こそよけれ。7) 人手多き所にては、戸を閉鎖し、凡て汝の交付す物は、数を算え、量を計り、かつ出納は悉く記しおくべし。八 浅慮なる者、愚なる者を教うること、及び若者等より責めらるる老人8)を庇うことを恥ずるなかれ。さらば汝、万事に心得ある者とせられて

九　すべての人の賞讃を博せん。九 娘は父の人知れぬ心配の種なり。之が為の愚念は彼の睡眠をさえ奪う。即ちその若き時には、空しく老い朽ちずやと案じ、夫と同棲するに及びては、憎まれずやと案じ、

一〇　一〇 処女の時には、汚されて、父の家にありながら身重になることあらずやと案じ、夫と同棲するに及びては、操を破らずや、或は石女ならずやと、案じわずらうなり。9) 一一 撿束なき娘に対しては、厳しく監視を加えよ、然らずば、彼女汝を敵の笑柄、城市の談柄、民の非難の的となるに至らしめ、民の集える処にて汝に恥辱を蒙らしむべし。一二 何人の艶姿にも目を留めず、女等の中に住まるなかれ。

取扱いについては、本三三・二五―三三を見よ。―7) 悪しき妻は家に閉じこめておくべきである、これは言わば封印を施すようなもの。

8) 一説では、若き人々と争う老人を、いましむることを恥ずるなかれ。―9) 子のできないことは、旧約時代には恥辱で天主の御罰と考えられていた。

一三　一四　蓋は衣服より蠹生じ、女より人の不義生ずればなり。一四　男より不義10）を加えらるるは、女より厚遇せられ、または女より恥辱と非難とを蒙るにまさる。一五　我次に主の御業を偲び11）わが見しところを告げん。主の御言によりて、その御作成れり。一六　陽は光り輝きて万物を俯瞰し、主の栄光その御作に満てり。一七　全能の主が御光栄の為に永く在らしめんとて、堅く据え給いしそのすべての妙なる御作を、主は聖者等12）をして語り伝えしめ給いしにあらずや。一八　彼は淵と人々の心とを探り究め、その企図をも見ぬき給えり。一九　実に主は一切の知識を知り、世の徴をみそなわし、過ぎたる事と来るべき事とを告げ、隠れたる事の跡を顕し給えり。二〇　いずれの思念も彼には見遁さるることなく、いかなる言も彼には隠るることなし。二一　彼は御智慧の大なる御作を美しく飾りなし給えり。彼は世々の前より世々に至るまで在し、増すことなく、減ることなく、他の者の献策を13）

10）ヴルガタのiniquitas（不義）とは、虐待のこと。
11）四三章の終りまで続く、万物の創造維持者たる天主に対するこの讃歌は、内容から言えば三九・一六―四一に関連している。―詩三二・六、九。七六・一二、一三参照。―12）モイゼ、ダヴィドなど聖なる聖書記者をさす。
13）すべての点で限りなく在すから。

二三 要し給わず。二三その御作はみな如何ばかり慕わしきかな。されど我等の知
二四 り得るところは恰も火花に異らず。二四すべて是等の物は生きて世々に存し、
二五 いずれも定めに応じて悉く彼に従う。二五万の物、一つは一つに対して一対
二六 をなし、14) 目的に適わぬ物は彼何一つ之を造り給わざりき。二六彼は各々の
有つ美点を確定め給えり、されば誰かその御光栄を仰ぎ見て飽く者あらん
や。

14) まず種の保存および繁殖のもととなる男女雌雄の対照をさす。

## 第四十三章

自然界による讃美（前章のつづき）

一 一高処にある蒼穹は主の麗しき御作なり、天の美観はその御光栄の顕
二 現なり。二至高者の御作なる陽は妙なる傑作にして、出る時、その現るる
三 によりて彼を告げ奉る。三その南中するや、地を灼く。その炎熱には誰か
四 堪うることを得んや。1) 人は熱火の作業に、爐を守れど、四陽はその三倍2)
もて山々を灼き、火の如き光線を放射ち、その輝く光に人目を眩ましむ。

第四十三章
1) 詩一八・七参照。—2) 炉の熱の三倍の熱さで。

五　偉大なるかな、之を造り給いし主、そは御言に応じて軌
六　道を急げり。
七　世の徴たり。
八　虧くる光体なればなり。
九　実に是は奇しく忽ち行きて円満なるに至る。
一〇　処の陣営[6]の司[7]にして、天の穹窿に燦然と輝く。
一一　の光輝は天の美観なり、主之によりて高きにある世界を照らし給う。
一二　彼等は聖なる者[8]の御命令のままに、御定めに循いて立ち、それぞれ警戒に当りて疲るることなからん。
一三　虹を見て、之を造り給いし者を頌めよ。そは輝きて甚だ美し。[9]
一四　そは光の環をなして天を繞る、至高者の御手之を頒し給えり。
一五　彼は御命令もて雪を降りしきらしめ、[10]御審判の電光を疾く発し給う。是によりて宝庫開

6) 当時の他の諸民族同様ユデアヤ人も太陰暦で年月を数えた。
7) 新月（民二八・一一。母上二〇・五、二四。王下四・二三。代下八・一三。三一・三。三。襄一・一三。何二・一一。歴八・五。）第一月の十四日は過越祭、第七月の十日は贖罪の日、同月の十五日からは幕屋祭。利二三・五、二七、三四参照。
8) ヘブレオ語では、空の月はヤレアー、歳の月はイエラー。
9) 月の輝く時衆くの星が辰。
10) ヘブレオ語本では陣を張る。
一四節に雪はなく、一九節に至つて漸く出てくる。

一六 け、雲、小鳥の如く飛出るなり。一六彼はその大能によりて雲を据え給えり、雹

一七 また砕けたる石の如く至る。一七その御眼前にては山々も揺れ動かん、その欲し

一八 給うや、南風吹き来らん。一八その雷鳴の音は地を打つべし、北の疾風と、旋風

一九 ともまた然せん。一九彼なお地に下り立つ小鳥の如く、雪を撒き散らし給うに、

二〇 その降りしきることさながら蝗の如し。11) 二〇その白き色の美しさは目もあやに、

二一 その降り注ぐ様は心を駭かす。二一彼は霜を塩の如く、地上に注ぎ給うべし。そ

二二 の凝るや茨の棘の如くならん。二二寒き北風吹けば、水凝固まりて氷晶となり、

二三 すべて水の溜れる上に浮かびて、胸甲の如く水を覆わん。二三彼はまた山々を侵

二四 し、荒野を焼き、火の如く緑草を絶やし給わん。二四やがて雲疾く来りて一切を

二五 医し、暑さの後に露置きて、その力を弱めん。二五御言によりて風靜まり、御旨

二六 によりて深き海風ぐ、主その中に島々を植え給えり。二六海の上を渡る船人等は

二七 その危険を語れ、我等己が耳に之を聞かば、感嘆すべし。二七そこには赫々とし

て驚くべき御作あり、種々の類の獣、あらゆる生物、及び怪物の如き被造物即

11) その ように 濃密に

二八　ち是なり。二八彼によりてこそ旅路の目的は定められ、その御言によりてこ
二九　そ一切は宰らるるなれ。12）二九我等大いに云わんとするも、言に窮せん。然し
三〇　れども語るべきことの結論は、彼一切にて在す、ということなり。13）三〇我
三一　等何をなしてか、彼を頌栄うるを得ん。実に彼こそは全能なる者に在して
三二　その造り給いしあらゆる作に超え給うなれ。三一主は畏るべくして甚だ偉大
三三　に在し、その権能は驚くべし。三二汝力の限り主を頌栄えよ。かくなして
三四　もなお彼は遥かに卓越れ給う、その偉大なること寔に驚くべし。三三汝等主
三五　を頌め、且力の限り之を崇めよ、蓋は彼あらゆる讃美も及ばざるまで偉大
三六　に在せばなり。三四汝等彼を崇め奉るには、あらん限りの力を尽して倦むこ
三七　となかれ。蓋は汝等ついに及ばざるべければなり。三五誰か彼を見奉りて語
　　り伝うることを得んや。また誰か彼の元始より在すままに、之を称揚する
　　ことを得んや。14）三六是等よりもなお大なる、隠れたる事数多あり。実に我
　　等は彼の御作を僅かに垣間見たるに過ぎざるなり。三七然れども主は万物

12）海とそのさまざまな不思議なものができたのは主のおかげであるが、同様に航海者が目的地に着くことも主が宰り給うのである。

13）主は御自分のうちに万物の完全性を有し給う。

14）詩一〇五・二。

を造り、敬虔に活くる人々には智慧15）を与え給えり。16）

15）物を本当に悟る力。―16）自然界による天主讃美はこれで終り。

## 第四十四章

聖祖等、殊にヘノク、ノエ、アブラハム、イサーク、ヤコブを讃う

一　我等いざ栄ある人々、我等が歴代の父祖を讃えん。1）二　主は元始よりその大能によりて、御光栄を顕す事を数多行い給えり。三　彼等の内には権力もて治め、勢大なる人々もあり、叡智を授かり、預言者等の中の預言者たる貫録を示したるもあり、四　当時の民に号令し、叡智の力により民に聖なる言を教えたるもあり、五　また己が知識によりて音曲を案出し、聖書の歌を公にせるもあり。六　彼等は徳に富める人々にして、美の趣味を有ち、己が家にて安らかに生活せり。七　彼等は皆その国民の中にて代々光栄を得、己が存命中に、賞讃せられたり。八　彼等より生れたる人々2）は後世に名を遺し、かくてその賞讃は語り継がるるに至れり。

第四十四章　1）著者は先に真の智慧の原則を説いたが、これからそれを有していたイスラエルの偉人たちを挙げる。―2）ギリシャ語本「かれらのうちのある人々」。

九　九また何の記念をも遺さざる人々[3]あり。彼等は滅び去りて恰も世に在らざりしが如く、生れたれどもさながら生れざりしが如し。その子等も亦彼等に同じ。一〇然れども是等の者は憐憫の心ある人々にして、その敬虔は滅びざるなり。一一その裔には幸福絶えず、一二その孫は聖なる世嗣にして、その裔は契約を堅く守れり。一三またその子等は彼等によりて永く絶ゆることなく、彼等の裔もその光栄も滅ぶることなからん。一四彼等の遺骸は安らかに葬られ、[4]一五その名は千代万代に活くるなり。一五民は彼等の智慧を語り伝えよかし、集会は彼等の讃美を告げよかし。一六ヘノクなる者あり、国々の民に痛悔の情を起さしめたるにより、天主に嘉せられて、楽園に移されたり。[5]一七ノエなる者あり、完全くして義しき者と認められ、御義怒の時に調停者にせられたり。[6]一八是によりて、洪水となりし時にも、地に存うる者残されしなり。一九最早肉体あるすべての物の洪水に滅ぼさるることなからんために、永久の契約、彼と結ばれたり。[7]

3) 卓れた人々の中にも、まるで世に居なかつたかのように、忘れてしまわれる者が少くない。
4) 手厚い埋葬は近東、殊にヘブレオ人の間では常に天の祝福と見なされていた
5) 創五・二四。来一一・五。
6) 創七・一。
7) 創九・一四。来一一・七。

二〇　二〇アブラハムなる者あり、衆くの国民の偉大なる父にして、その光栄
彼に匹うと見られたる者は未だ曾てあらず。彼は至高者の律法を守
二一　り、之と契約を結び奉れり。[8] 三彼は己が身に於いて[9] 契約を立て、
二二　誘試の時にも忠実なりと認められたり。[10] 三是によりて主その国民
の中にて彼に光栄を与え、誓うに、彼を土の堆積の如く増すべきこ
二三　と、三またその裔を星の如く高からしめ、且彼等をしてこの海より
かの海に至るまで、この河より地の果に至るまで、嗣がしむべきこ
二四　とを以てし給えり。[11] 三四更にイサークなる者に対しても、その父ア
二五　ブラハムの故を以て、同様になし給い、[12] 三五主万の国民に対する御
二六　祝福を彼に与え、ヤコブの頭において契約を堅うし給えり。三六即ち
御祝福によりて彼を承認し、家督を之に与え、その領分を十二の支
二七　族に分ち給いしなり。三七かくて憐憫深くして、[13] すべての肉の眼前
に寵愛を得たる人々を、彼の為常に置き給えり。

8) 創一二・二。一五・七。一七・四、一一〇。―9) 契約の外部的しるしなる割礼によつて。創一七・一〇以下参照。―10) 創二二・一。―11) 創一五・一八。―12) 創二六・四、五。―13) ギリシャ語本「ある人」。これはモイゼである。ギリシャ語本では、やはり本節が第四十五章の冒頭。

# 第四十五章

前章の続き、モイゼ、アーロン、及びフィネエスを讃う

一　モイゼは天主及び人々に愛せられ、その記念は賞讃に包まれたり。1)
二　天主は彼に聖者等2)の如く光栄あらしめ、之を偉大ならしめて敵の恐るるものとなし、彼の言に応じて恐ろしき現象を止め給えり。3)
三　王たち4)の眼前にて之に光栄あらしめ、またその民の前にて之に御掟を授け、なお御栄光を之に示し給えり。5)
四　その誠実と柔和6)との故に、彼を聖ならしめ、すべての肉の中より之を選び給えり。
五　実にその御声を彼に聞かしめ、之を雲の中に引き入れ給い、7)
六　面を合せて之に御掟、即ち生命と知識との法を授け、以てヤコブに御契約を、イスラエルに御定めを教えんとし給えり。
七　主は彼の兄弟にして且彼と同じく、レヴィ族より出でたるアーロンを挙げ、
八　之と永久の契約を結びて、之にその国民の司祭職を賜い、その光栄によりて之を福ならしめ、
九　之に誉の帯を締め

第四十五章
1) 出一一・三。
2) 太祖たちをさす。―3) エジプトにおいて。出八・一三など参照。―4) ファラオ、セホンおよびオグ。―5) 出六、七、八、三章。三三・一九 6) 民一二・三参照。―7) 出二四・一八参照。

一〇　させ、栄の衣を着せ、権能の印を冠らせ給えり。一〇また彼に長き上衣と股引と肩衣8）とを着けしめ、その身の周囲に黄金の鈴数多佩びしめ給いしが、9）二是、彼の入るに当りて音を立て、その音聖殿の中に聞えて、

一一　彼の国民なる子等にそれと心付かしめんが為なり。一一なお分別と誠実とを恵まれたる賢き人10）の織りなせる聖なる装にして、金と青と紫と、

一二　深紅の撚糸もて巧みに作られ、イスラエルの支族の数の記念として、宝石を琢りて黄金に嵌め、之に宝石細工師の細工にて彫刻したるを付けたるものをも佩びしめ給えり。一四更に頭帽の上にする黄金の冠にして、聖と刻み記されし栄誉の装飾品あり。是は人力の傑作にしてその美麗眼を楽しましむ。一五元始よりこの方、彼の以前にはかくも美しきもの、未だ曾てあらざりき。一六他の者は之を着けしことなし、ただ彼の子等のみにして、幾久しくその子孫に限らるるなり。一七彼の犠牲は日々火もて焚き尽されたり。一八モイゼ彼の手を満し、彼に聖油を注げり。11）一九是は彼

8）ヘブレオ語名エフオド。出二八・六以下参照
9）出二八・三五
10）工匠ベセレール。出三一・一以下参照。ギリシヤ語本では「裁きの胸牌」。この語は七十人訳の慣用語ではウリムとトウミム。
11）一八―一九節はアーロンを大司祭に叙階する祝聖式。モイゼは実際祝聖者の役を果た

に対し永久の契約として、その裔に対し天の日数の如く、司祭の職務を行わ
しめ、讃美を献げしめ、主の御名によりて御民に栄あらしめん為に、なされ
たるなり。二〇主はすべての活ける者の中より彼を選び、之をして御民の為に
二一執成す憶えとして天主に犠牲と香と馨しき薫とを献げしめ給えり。二二しかし
てヤコブに契約を教え、イスラエルに御法の光を与えん為に、御誡命に関し
二三御定めの契約に関する権力を彼に授け給えり。二三他の者等12)は彼に起ち逆ら
いぬ、即ちダタン及びアビロンに与せる人々、及びコレの徒党怒り、嫉妬ゆ
えに荒野にて彼を囲みけるに、13)二三折しも主なる天主みそなわし給いしが、
その事御意に適わざりしかば、彼等は御義怒の烈しきによりて滅ぼされたり。
二四主は彼等に恐ろしきことを行い、火焔もて之を焚き尽し給い、14)二五アーロ
二六ンに光栄を加え、嗣業を之に与え、地の産物の初穂を之に分ち給えり。二六主
二七は先ず彼等の為に糧を備えて飽かしめ給えり、即ち彼等主の彼とその裔とに
与え給いし供物をも食すべしとせられしなり。二七然れども彼は領地の中にて

12) アーロンの一族でない。
13) 民一六・一。
14) 民一六・三五。



利八・一以下参照。

二八　異邦人より嗣産を受くべからず、民の中には彼の分なし、蓋は主こそ彼の分にしてその讓り伝うべきものに在せばなり。二八エレアザルの子、フィネエスは、彼に倣いて主を畏れ、栄を担う第三の者たり。15）二九御民の恥ずべき堕落の時に起ちて、その善良と熱心とにより、イスラエルの為に天主を宥め奉れり。三〇この故に主彼と和睦の契約を取り結び、彼を立てて聖者等16）とその民との長となし、以て永久に司祭の位を彼とその裔とのものたらしめ給えり。三一またユダ族のイェッセの子ダヴィド王と契約を結び、彼とその裔とを世嗣となし給いしが、是、御民を正しく裁くべき智慧を我等の心に賜い、17）以て彼等の福祉を滅ぶることなからしめ給わんが爲なりき。かくて彼等のその民の中における光栄を永久ならしめ給えり。

15）フィネエスはアーロンの孫で、第三代の大司祭であつた。その父エレアザルは無視された。フィネエスは規律を守らぬ民に毅然たる態度を示した。民二五・一—一三参照。喀前二・五四。—16）これは司祭たちをさす。別の訳では中性複数 sancta の二格として「聖所」。17）サロモンが特に自分のために求めていたように。

# 第四十六章

前章のつづき、ヨズエ、カレブ、及びサムエルを讃う

一 ナヴェの子イエズスは戰鬪に臨むや猛く、預言者としてはモイゼの後を
二 継ぎ、その名の如く偉なる者なりき。[1] 三 すなわち天主の選び給いし者[2]の
三 救拯に当れる甚だ偉大なる者にして、イスラエルに嗣業を得しめんために
四 立ち逆らう敵を討ち服えたり。 三 彼の手を挙げ、城市々々に向いて剣を揮
五 いし時、その得たる光栄は如何ばかりなりしぞ。[3] 四 彼の前に何人かかくは
六 防ぎ戰いたる。 五 蓋し主こそ敵を引き渡し給いしなれ。 五 彼の熱心には陽も
七 止まりて、一日は二日の如くなりしにあらずや。[4] 六 彼四方より敵の攻め来
八 りし時、全能にて在す至高者を呼びけるに、偉大にして聖なる天主彼に応
七 えて、甚だ勢激しく石なす雹を降らしめ給えり。[5] 七 彼は敵の国民を激し
八 く攻め立て、降り坂にて対手を討ち滅ぼしたり。 八 かくて国々の民は彼の
力を知り、天主と戰うことの容易からざるを曉るに至りぬ。彼は全能なる

第四十六章
1) かれは己が名を顯かした イエズスまたはヨズエは、救い主の義。
2) イスラエル人。 — 3) 書八・一八以下。
4) 書一〇・一四。 — 5) 書一〇・一一。

九　者の御指導に従いたり。九 即ち彼はモイゼ存命の頃、イエフォネの子カレブと共に、起ちて敵に抗り、民の罪を犯すを止め、怨み喞つ声を默さ
一〇　しめて、善き業をなせり。6) 一〇 また彼等両人は歩兵六十万人の中より立てられて危険より救い出され、彼等を率いてその嗣ぐべき所、乳と蜜と
一一　の流るる地7) に入れり。一一 なお主はこのカレブに力を与え給いしが、その力年老ゆるまで存したれば、彼、地の高き処にも上るを得たり。かく
一二　てその裔嗣業の地を手に入れ、8) 一二 イスラエルのすべての子等をして、
一三　聖なる天主に服うことの善き所以を曉らしめぬ。一三 次に、それぞれに名
一四　ある裁き人等あり。その心は腐敗せず、彼等は主より離れざりき。一四 さ
一五　れば彼等の記念は賞讃せられ、その骨はその在処より躍り出で、9) 一五 そ
一六　の名は永久に存し、聖なる人々の栄誉はその子孫に至るまで残れかし。
一六　主の預言者にしてその主なる天主に愛せられしサムエルは、新なる王
一七　政を布きてその国民を治むる君等に注油せり。10) 一七 彼は主の律法に循い

6) 民一四・六。
7) 聖地の肥沃豊穣なことを示すため屢々聖書に用いられた譬喩民一四・八。一六・一三。書六章など参照。
8) 書一四・一二以下。―9) 願わくは彼らの骨より絶えず栄ゆる子孫の出でんことを。―10) 彼は王政を布き（母上八・九以下）、サウル（一〇・一）とダヴィド

て会衆を裁きしかば、天主ヤコブを眷顧み給い、彼はその忠節によりて預言者と認められたり。一八彼はまたその言においても信頼すべき者と認められたり、そは彼、光明の天主を見たればなり。一九彼は敵が四方より囲み攻めし時、玷なき小羊を献げて、全能なる主を呼び奉れり。11) 二〇時に主天より雷を下し、轟き渡る御声を聞かしめ、二一チロの諸侯、12) 及びフィリスト人の諸将を悉く滅ぼし給えり。二二さて彼は寿命尽きて世を去るに先立ち、主と己が注油せし者13)との眼前にて、金銭より、鞋の果に至るまで、未だ曾て何人よりも取りしことなしと誓言しけるが、誰も彼を咎むる人なかりき。14) 二三かくて後彼永眠したれど、なお王に告げてその命の終ることを啓示せり。15) 彼はかく地下より声をあげて預言し、その国民の不敬を絶やさんとしたるなり。

（一六・一三）とに注油して、これを王とした。―11) 母上七・九以下参照。12) ギリシャ語「敵」。13) サウル。―14) 母下一二・三。―15) サウルがエンドルの巫女の所へ占いに行き、サムエルがかれに現われた事件。

# 第四十七章

前章のつづき、ナタン、ダヴィド、及びサロモンを讃う

一その後ダヴィドの時代に、預言者ナタン起れり。1) 二ダヴィドはイスラエルの裔等の中にて、肉より分たるる脂肪の如くなりき。2) 三彼は若き時、獅子を小羊の如く玩弄び、また熊をも同様に扱うこと、さながら羊の少きものを扱う如くなりき。3) 四彼は巨人を殺して、国民の恥辱を雪ぎしにあらずや。4) 五彼は手を挙げて、投石器の石もて、ゴリアトの思い上れるを打倒せり。六即ち彼全能の主を呼び奉りしかば、主その右手に、この強き軍人を除きて己が国民の角5) を興すべき力を与え給いしなり。七されば人彼を万人に当る者と称え、主の御祝福ゆえに彼を讃め、之に栄の冠を捧げたり。6) 八実に彼は四方の敵を粉砕し、仇なすフィリスト人等を殲滅して今日に至り、以て彼等の角を

**第四十七章**　1) ナタンの活動については、母下七・二。一二・一を見よ。2) 恰も脂肪を和祭の犠牲の最良の部分として、天主のために取りのけておくように（利三・三—一六）、ダヴィドもイスラエル全体の中から天主のために選み出された。3) 母上一七・三四。4) 母上一七・四九。5) 角は権力の象徴。6) 母上一八・七。

九　永久に砕き去りしなり。九彼はすべての事業において、聖なる
一〇　者、至高者に、讃美の言もて、感謝を献げたり。7)一〇彼は心を
一一　尽して主を讃え、己を造り、且、敵に抵る力を己に賜いし天主
一二　を愛せり。一一彼はまた祭壇に向かいて歌手等を立たせ、その声
一三　もて甘美なる歌曲を歌わしめたり。一三なお終生祭式に光彩を添
一四　え、佳節を重んじ、以て人々をして主の聖なる御名をたたえ、
一五　朝まだきより天主の聖徳を崇めしめたり。一三主は彼の罪9)を浄
一六　め、その角を窮りなく挙げ、イスラエルにおける王権に対する
御約束と光栄の座とを彼に与え給えり。10)一四彼の後に聰明なる
子出でしが、彼11)は彼12)ゆえに敵の力を全く挫き給えり。一五サ
ロモンは太平の時に国を治めたり。天主彼にすべての敵を服わ
せ給いければ、彼はその御名の為に家を建て、永久に聖所を設
けたり。汝13)の若き時賢かりしことといかばかりぞ。14)一六汝は大

7) ダヴィドの詩篇の大部分は、勝利獲得に対する感謝と、御祐助を求める祈りとから出来ている。
8) 聖所における歌手楽手に関するダヴィドの規定については、代上一六・四―三七参照。―9) 母下一一、一二、両章参照。
10) 母下七・一以下。詩八八・二―五、二〇―三八。
路一・三一―三二参照。
11) 一三節の主語の「主」。
12) ダヴィド。―13) サロモンへの呼びかけ。―14) 王上三・五―一四。

一七　河の如く智慧に充溢れ、汝の精神は地を覆いたり。15）　一七　汝は譬喩
もて多くの玄義を説けり。汝の名は遥かなる島々にも伝えられ、
一八　汝は平和16）を好めるによりて愛せられたり。一八　国々は汝の雅歌や
一九　箴言、譬喩や解釈に、一九　且、又の名をイスラエルの天主とも称ぶ
二〇　主なる天主の御名17）に驚嘆せり。二〇　汝は黄金を銅の如く集め、白
二一　銀を鉛の如く積みしが、18）　二一　汝の腰を婦女子に傾けて、汝の躰を
二二　恣まに濫用し、19）　二二　汝の栄誉に汚点を印して汝の裔を瀆し、汝
二三　の子孫の上に御義怒を招き、汝の愚行に溺れ、二三　かくて王国を二
分せしめ、エフライムより非道の王権を出して支配せしむるに至
二四　れり。20）　二四　されど天主は御憐憫を棄てんとし給わず、その作り給
いし所を壊らんとも滅ぼさんともし給わず、またその選み給いし
者の裔を根より絶たんともし給わず、主を愛する者21）の胤を全く
二五　除かんともし給わずして、二五　ヤコブとその家系のダヴィドとに残

15）王上四・三一。
16）サロモンという名は「平和なる人」の義。実際彼の治世はイスラエルに平和が永続した時代であつた。—17）ヘブレオ語本「しかして汝は栄誉ある名もて称ばれたり」。その名とは即ちイェディドヤ、天主の愛子の義。
18）王上一〇・二七。
19）ギリシヤ語は「汝の体を女の支配下におきたり」。—20）王上一二・一六。—21）ダヴィド。

二六 れる者を与え給えり。二六やがてサロモンはその父祖の如く逝き
二七 ぬ。二七彼は己が後に、その胤にして、国民の中にても愚なる者を
二八 遺せり。二八すなわち己が策謀もて国民を背かしめたる、思慮浅き
二九 ロボアム、22) 二九及びナバトの子にして、イスラエルに罪を犯させ、
三〇 エフライムに罪の途を拓きたるイエロボアム是なり。されば彼等
三一 の罪は溢るるばかりに多くなりぬ。三〇彼等は人々をその国より逐
いやりしなり。23) 三一かくて報復の彼等に臨むまで、彼等あらゆる
悪を求めけるが、終に主すべての罪より彼等を救い給えり。24)

## 第四十八章

前章のつづき、エリア、エリゼオ、エゼキア、イザヤを讃う

一 一次いで預言者エリア、火の如く起ちしが、その言は炬火の如く
熱烈なりき。1) 二彼は彼等に饑饉を下したれば、己が嫉妬より彼を
二 怒らしめたる者共少くなれり。2) 蓋し是等の者は主の御掟に堪う

22) 王上一二・二八。
23) アッシリアへ捕虜として引きゆかれたのがイエロボアムの始めた偶像礼拝の罰であることが、ここに明記されている。
24) ギリシヤ語本になし。

第四十八章 1) 王上一七・一。 2) 天主が天から火を下して、彼の真の予言者なることを

三　ることと能わざりしなり。三彼は主の御言によりて天を
四　閉し、三度天より火を降せり。3)四かくの如くエリアは
その奇蹟によりて、偉なる者と讃えられたり。抑々誰
かその栄誉において、汝4)と匹敵ぶことを得る者あら
五　ん。五汝は主なる天主の御言によりて、死せる者を冥
六　府より、死の運命より、起たしめたり。5)六汝は王等6)
七　を滅亡に陥れ、その威権を容易く打砕き、驕れる者を
その座より落せり。七汝はシナイにて御審判を、ホレ
八　ブにて報復の御判決を聞きたり。7)八汝は王等に注油し
て、8)報復せしめ、また預言者等を立てて汝の後を継
九　ぐ者とせり。9)九汝は火の旋風の中を、火の馬の車に乗
一〇　りて、挙げられたり。10)一〇汝は審判の時に、主の御義
怒を和げ、父の子に対する心を宥め、ヤコブの支族を

証し給うた後、彼はバールの司祭達を多数殺させたので、彼らは少くなつた。王上一一・二九―四〇参照。
3)犠牲を献げた時に一度（王上一八・三八）、彼を捕えようとした兵卒達に二度（王下一・九―一二）。
4)本四七・一五にサロモンへの呼びかけがあつたように、これはエリアへの呼びかけ。―5)王上一七・二二。
6)アカブ、オコジア、ヨラム。
7)どういう天罰がイスラエルに下されようとするか、そこで天主から彼にお告げがあつた。―8)ハザエルをシリアの王に、イエフをイスラエルの王にした。―9)エリゼオ。―10)王下二・一―一七。

一一　再興するよう、錄されたり。11）　一二　福なるかな、汝を見、汝の友愛に浴する栄
一二　を担いし人々。一三　蓋し、我等の生くるはただこの生のみにして、死後我等に
一三　はかかる名声あらざるべし。一三　実にエリアは旋風に巻き上げられしかど、そ
の精神はエリゼオに充ち満てり。彼は世にある間、侯伯を恐れざりき。何人
一四　も権力もて彼を服せしむる能わず、12）一四　いかなる事13）も彼を屈せしむる能わ
一五　ざりしなり。その体は死後もなお預言せり。14）一五　彼は生ける間不思議をなし、
一六　死してもなお奇蹟を行えり。一六　すべて是等の事ありしにも拘らず、民は悔い
改めず、罪を離れずして、終に己が国より引きゆかれ、地にあまねく分れ散
一七　一八　るに至りぬ。一七　ただ少数の民のみは15）ダヴィド家の君と共に残れり。一八　是等
の中には、天主の御意に適う事をなしたる者もありしが、また多くの罪を犯
一九　したる者もありき。一九　エゼキアは己が城市を固め、その中に水を引き、また
二〇　鉄もて岩を掘り、水汲む井戸を設けたり。二〇　その頃センナケリブ上り来りて、
ラブサケを遣し、手を挙げて彼等に敵対い、また手を伸べてシオンを脅し、

11）馬四・五、六。マテオ一一・一四。一七・一〇—一二参照。
12）王下二・一二。
13）原文verbum.
14）王下一三・二一
15）三族から成るユダ王国。

二一　己が勢を恃みて傲然たりき。16）二二時に彼等の心も手も震い慄けり、
二二　彼等は陣痛に悩む女の如く苦しみたり。二三是において彼等憐憫深
き主を呼び奉り、手を拡げて天に挙げしに、聖なる主、天主は直
二三　に彼等の声に応え給えり。二三主は彼等の罪を御心に留め給うこと
なく、彼等をその敵に付し給わずして、聖なる預言者イザヤの手
二四　により彼等を浄め給いぬ。二四主の天使はアッシリア人等の陣営を
二五　打倒して彼等を蹂躙れり。17）二五是、エゼキアが天主の御意に適う
事をなし、天主の御眼前に忠実なる大預言者イザヤの彼に命じた
る如く、己が父ダヴィドの道を雄々しく踏み行きしに由るなり。
二六　二六その頃陽の後に退きしことあり、また彼は王の寿命を長からし
二七　めたり。18）二七彼は偉大なる霊によりて最後に起るべき事を見、シ
二八　オンに嘆く人々を慰めたり。19）彼は遥か後までの、二八将来のこと、
隠れたることを、その起るに先立ちて顕し示せり。

16）王下一八・一三。
17）イエルサレムの囲みとその解けたことについては、王下一八・一三—一九、三七。賽三六、三七、両章参照。
18）イザヤは日時計における影を後戻りさせることによつて、エゼキアにその病気回復の徴を示した。王下二〇・一—一一。賽三八・一—八参照。
19）殊にメシアの御國における幸福を述べることによつて。

# 第四十九章

前章のつづき、ヨシア、イエレミア、エゼキエル及び十二預言者を讃え、更にゾロバベル、ヨセデクの子イエズス、ネヘミア、エノク、ヨゼフ、セト、セム及びアダムを讃う

一 ヨシアを偲ぶは、香製造者の術もて種々の香料を合せ成すが如し。[1]

二 彼を偲ぶはいずれの口にも甘きこと蜜の如く、また酒宴の席の音楽の如し。[2]

三 彼は国民を悔悛めしむる為に天主より遣され、憎むべき不敬を取除きて、

四 己が心を主の方に向け、罪人等の時代にありながら、敬虔を固めたり。

五 ダヴィド、エゼキア、及びヨシアの外は、すべて罪[3]を犯しぬ、

六 蓋はユダの王等至高者の律法を棄て、天主を畏るることを軽んじたるに由るなり。

七 されば、彼等は己が王国を他の人々に、己が栄を異国の民に、付し、

八 選まれし聖なる城市を焼土と化し、その街衢を荒廃せしむるに至りしなれ。即ちイェレミア

**第四十九章**

1) 王下二二・一。

2) 前にシラクが音楽に就いて述べた所を参照（本三二・五、七—八）。

3) ここでは偶像礼拝の罪をさす。例えばダヴィドは周知の通り、ほかのことで罪を犯した。

九　の預言の如し。4) 是、覆し、毀ち、滅ぼし、再び建て、新たにすることを告げんために、5) 母胎よりして既に、預言者として聖別たれし彼

一〇　をば、彼等が虐待したるに由るなり。6) 一〇またエゼキエルという者あ

一一　り、智天使の車の上にて示されし輝く異象をば、見たり。7) 一一実に彼は

一二　雨を象徴として敵のことを述べ、直き道を行く者に善を行わんとした

一三　り。一三また十二預言者の骨、その処にて蘖を生ぜよかし、8) 蓋は彼等

一三　ヤコブを固め、雄々しき信仰によりて彼を救いたればなり。一三我等い

一四　かにしてかゾロバベルを頌えん、彼こそは実に右手に嵌めたる印璽の

一四　如き者なれ。9) 一四ヨセデクの子イエズス10) もまた然らずや。彼等はそ

一五　の世に在りし日主の為に家を建て聖殿を興し、永久の光栄に備えたり。

一五　またネヘミアをも時久しく記憶すべし。彼は崩されたる石垣を、我

一六　等の為に築き、門と閂とを設け、我等の家を建てたり。一六凡そ世に生

れたる者にしてエノクの如きはあらず。実に彼は地より挙げられたり。

4) 王下二五・九。
5) 耶一・五。
6) 耶三七・一四—二〇。及び三八・四—二八。—7) 結一・四。—8) 四六・一四及びその註参照。—9) 印鑑付指環のように天主から丁重に保護された。—喇三・二。基一・一二。
10) イエズス即ちヨズエはゾロバベルと同時代の人で、大司祭であつた。

一七　一七またヨゼフの如きもあらず。彼は人と生れて兄弟の君侯となり、国民を支え、兄弟を治め、

一八　民を安んずる者となりにき。[11] 一八彼の骨は鄭重

一九　に保存せられ、死後もなお預言したり。[12] 一九セトとセムと[13]はは人々の中に栄を得たり、されど生きとし生ける者に優るは創造によるアダムなり。[14]

## 第五十章

前章のつづき、大司祭シモンを讃う—結び

一　一シモンという者あり、オニアの子にして大司祭なりしが、その生ける間家[1]を支え、その世

二　に在りし頃聖殿を堅うしたり。二聖殿の高屋も、

11) 創四一・四二—四五。—12) 本四八・一四参照。—イスラエル人は彼の骨を丁重に保存しシケムに埋葬したが、それは彼の死ぬ前の言の適中した証拠である。—13) セトはアダムの子で、人類のうちノエの大洪水の前天主に忠誠を守つた人々の祖。セムはノエの子で、アブラハムの、従つてイスラエル民族の祖。

14) 創一・二五以下。

第五十章　1) 主の。

二重の建物も、聖殿の高き石垣も、彼によりて基礎を据えられたり。

三 彼の時代には水井湧き出でて、さながら海の如く溢るるばかり湛えたり。2) 四 彼は己が国民の為に心を砕き、之を滅亡より救い出せり。3) 五 彼は勢力ありて城市を大きくし、国民の間に立交りて栄誉を得、家と庭との入口を広くしたり。

六 彼はその時代にありては、雲間なる暁の明星の如く、4) また満月の如く光り、七 天主の聖殿にありては、照る日の如く輝けり。八 更に輝く雲間に煌く虹の如く、春の頃の薔薇の花の如く、水の辺なる百合の如く、夏の頃に薫る乳香5) の如く、九 輝く火の如く、火に焚かるる香の如く、一〇 諸種の宝石もて飾りたる金無垢の器の如く、

2) 聖殿は高い所にあつて、しかもその前庭では多量の水を用いたから、聖殿への給水は大仕事であつた。そのため特に聖殿の下の岩を切り開いて給水室を作り、そこから桶で水を直接前庭へくみ上げた。―3) 彼は異邦人が入ることによつて聖所が瀆されないよう、これを保護した。聖殿が瀆されるのは民全体にとつての一大不幸と考えられていたからである。

4) 六―一一節には、シモンが人なみ卓れて持つていた威厳と優雅さとを示すために、天上、地上における美や好ましさを表現するいろいろな喩が十二挙げてある。―5) ここの「乳香」は「乳香の木」の意味。夏の暑い時にはそれから乳香が滲み出、芳香を放つ。

一一　芽ぐむ橄欖樹や高く聳ゆる糸杉の如きは、彼が光り輝く衣を着け、此上なき
一二　権威を身に佩びたる時の状なり。一三彼聖なる祭壇に昇る時には、聖なる衣を輝
一三　かしたり。一三かくて彼司祭等の手より犠牲の分ちたるものを取るや、自らは祭
壇の傍に立ち、その兄弟等彼の周囲に環を作りて、その状恰もリバノンの山に
一四　杉の植わりたるが如し。一四かくアーロンのすべての子等もまた、棕梠の枝の如
一五　く、綺羅を飾りて彼の周囲を囲み立ちしなり。一五イスラエルの全会衆の前にて
主に献ぐるは、彼等の手に依れり。かくて彼は至高き王に恭々しく奉献をなす
一六　べき職務を、祭壇にて果すや、一六手を神酒の方に差しのべて、その葡萄の血6)
一七　を注げり。一七彼は之を祭壇の下に流して、至高き君に捧ぐる聖き薫とせり。
一八　一八その時アーロンの子等叫び出で、槌もて打ちて造りし喇叭を吹き鳴らし、天
一九　主の御前に大声あげて、聴かれ且憶い出されんとしたり。一九その時すべての民
斉しく急ぎ地上に平伏し、己が主なる天主を礼拝し、至高き全能の天主に祈を

6) 葡萄酒。

二〇 ささげたり。二〇歌を唱う人々また声をあげて主を頌え、広き堂内には、甘美
二一 溢るる歌声いよいよ高まれり。二一かくの如くにして、主を崇むる儀式果て、彼
二二 等がその勤行を終うるまで、民は至高き主に祈願をこめたり。二二次いで彼下
り来り、イスラエルの子等の全会衆に向いてその手を挙げ、7) 己が唇もて天
二三 主を頌栄え、且その御名を喜び誦え、二三天主の御力を示さんと欲して、己が
二四 祈祷を繰返せり。二四されば今、万物の天主、即ち全地に亘りて偉大なる事を
なし給える者、我等の母胎にありし時より我等の齢を多からしめ、御憐憫に
二五 循いて我等を扱い給える者に、汝等も祈れかし。二五願わくは彼が我等に心の
喜悦を与え、我等が生ける間永くイスラエルに平和あらしめ給わんことを。
二六 二六これ、イスラエルが、天主の御憐憫の我等と共にあり、主の日に当りて我
二七 等を救うべきことを信ずるに至らんためなり。二七わが霊魂は二つの国民を憎
二八 む、されどわが憎む第三のものは国民にあらず、二八セイルの山に坐せる者等

7) ヤーヴェの御名を三回唱えて祝福するために。

二九　と、フィリスト人等8)と、シケム9)に住める愚
なる民と、即ち是なり。二九以上の智慧と規律と
の教訓は、シラクの子イエルサレムの人イエズ
スが、10)その心より智慧を思い出でて、この書
に錄したるなり。三〇是等の善き事にいそしむ人
々は福なるかな、11)之を心に留むる者は常に賢
三一　かるべし。三一実に是等のことをなさば、何事も
能わざる所なからん、そは天主の光、その人の
歩みを照らし導けばなり。

## 第五十一章

本書の結び、シラクの祈

一　一シラクの子イエズスの祈。1)主なる王よ、我

8) セイルの山に住むエドム人とフイリスト人とは昔から御民イスラエルの敵であつた。
9) サマリア人は帰還後ユデア人に敵意を抱いて、自分らのために特別な礼拝の場所を造つた。彼らは特種の民ではなかつた。王下一七・二四参照。—10) これは本書の末文で、読者に別れを告げる言葉。默二二・一八以下参照
11) こういう言葉で、著者が天主の御照しに応じて錄したという意識をも表わす。

第五十一章　1) 附加文。感謝の祈で、いろい

二　汝を讃め、汝わが救主なる天主を讃え奉らん。二我汝の御名に讃美を献げ奉らん、そは汝我を助け護り給いたればなり。

三　三汝はまたわが身を滅亡より、不義の舌の罠より、虚偽を構うる者の唇より、救い出し、仇の眼前にてわが助け手となり給えり。四更に汝は御名の御憐憫の豊かなるままに、我を咆えたけりつつ将に喰わんとする者等2)より、五わが生命を狙う者等の手より、我を囲む患難の門より、六我を包囲む焔の燃え盛る中より救い、3)我をして火の只中にありながら熱しとも覚えざらしめ、七冥府の底より、4)不潔なる舌より、虚偽の言より、不公平なる王より、不義の舌より、救い給えり。5)

八　されば死するまでわが霊魂主を讃うべし。九そはわが生命下なる冥府に近づきたればなり。6)一〇是等四方より我を囲み

ろな点で詩一七篇及び、母下二二章を思わせる。

2) 敵が咆えたけりつつ、まさに呑まんとする獅子に譬えてある。詩二一・一四参照。―3) 火で窒息すること。―4) 著者は自分がすでに冥府に降つたと思つていた。―拿二・三参照。

5) 不公平なる王とは多分ユデア人をその信仰ゆえに迫害したアンチオクス・エピファネスで、著者もその中にいたのらしい。喀前一・四六以下参照。―6) 七節とその註参照。

たれど、誰も助くる者なかりき。我人々の援助を待望みしかど、一人だになかりき。二主よ、我は汝の御憐憫と、汝が世の始よりなし給えることとを憶い出せり。三主よ、汝は実に汝を待ち焦るる人々を助け出し、之を異邦人等の手より救い取り給うなり。一三汝は地上にわが住居を高くし給えり、我は死の過ぎ去らんことを願えり。一四我はわが主[7]の御父なる主を呼びて、わが患難の日に、また人々の驕れる時に、御祐助なく我を棄て給わざらんことを、求めたり。一五我は絶えず汝の御名を讃め、讃美もて之を頌え奉らん、そはわが祈祷聴容れられたればなり。[8]一六汝は我を滅亡より救い、奸悪なる時代より助け出し給えり。一七この故に我は頌え、汝に讃美をささげ、主の御名を讃め奉らん。一八我は未だ若かりし時、漫遊の旅[9]に上る前、わが祈るに際して明らさまに智慧を求めたりき。一九我は聖殿の前にて之を願い求めし

7) 詩一〇九・一参照。天主の御子たるメシア。—8) ヘブレオ語本では、一八節からアルファベット順になつていて、ただ一文字だけ欠けている。ギリシャ文はヘブレオ文と異る。
9) 著者が本三四・一一—一三で回想している旅、これは逃走避難の旅であつたらしい。

が、10）なお最後まで之を探ねん。そは早熟の葡萄の如く花を開きたれば、
二〇　わが心之を楽しみ、わが足は直き道を歩み、我は若き時よりその跡を追い
二一　たり。二二　我はいささかなりともわが耳を傾け、之を受け入れたり。二三　我はわ
二三　が身の衷にも数多の智慧を見出し、之によりて大いに進歩したり。二三　我に智
二四　慧を与うる者に、我光栄を帰し奉らん。二四　蓋は我之を実行せんと思い定めた
二五　ればなり。我は善事に熱心なりき、さればわが滅ぶることあらじ。二五　わが霊
二六　魂はこれを求めて闘い、我は之を行いて強くなれり。二六　我は手を高く差し伸
二七　べて、11）我がこれを知らざることを嘆きぬ。二七　我は心を之に向け、ついにそ
二八　れと知りて之を獲たり。二八　我は始よりこれと心を共にしたりき。この故に我
二九　の見棄てらるることなからん。二九　わが腸はこれを求めて九回せり。12）されば
三〇　我善き宝を得べし。三〇　主はわが報賞として我に舌を賜えり、13）我之をもて彼
三一　を讃め奉らん。三一　汝等智慧冥き者等よ、わが許に来り、教の庭に集まれ。

10）昔サロモンがしたように王上三・六—九参照。
11）熱望のしるし。
12）激しい感情と熱烈極まる望とを表わすヘブレオの言い方。
13）他人に教えるため。

三二　三三汝等如何なればなお躊躇うや。是等の事に対して何というや。汝

三三　等の霊魂は甚く渇けり。三三我わが口を開きて語れり、汝等金銭によ

三四　らずして己が為にこれを得よ。14)　三四汝等の頸を軛の下に置き、15)　汝

三五　等の霊魂をして教を受けしめよ。実にそは見出さんとすれば、近処

三五　にあるなり。三五わが労したる所少きに、わが得たる平安の多きこ

三六　とは、汝等目のあたり之を看よ。三六汝等多くの銀を費しても教を受

三七　けよ、しかしてそれによりて夥しき金を得よ。16)　三七汝等の霊魂主の

三八　御憐憫を悦べかし、さらば汝等彼を讃うることを恥じざるべし。

三八　時の失せざる間に汝等の業をなせ、さらば彼、その時17)至らば汝

等に報酬を与え給わん。

14) 賽五二・三参照。
15) マテオ一一・二九参照。—16) 汝らが銀を出す必要があつても惜しくはない。教の価値は金にもまさるから。—17) 天主が御摂理を以て御自ら定め給う時に。